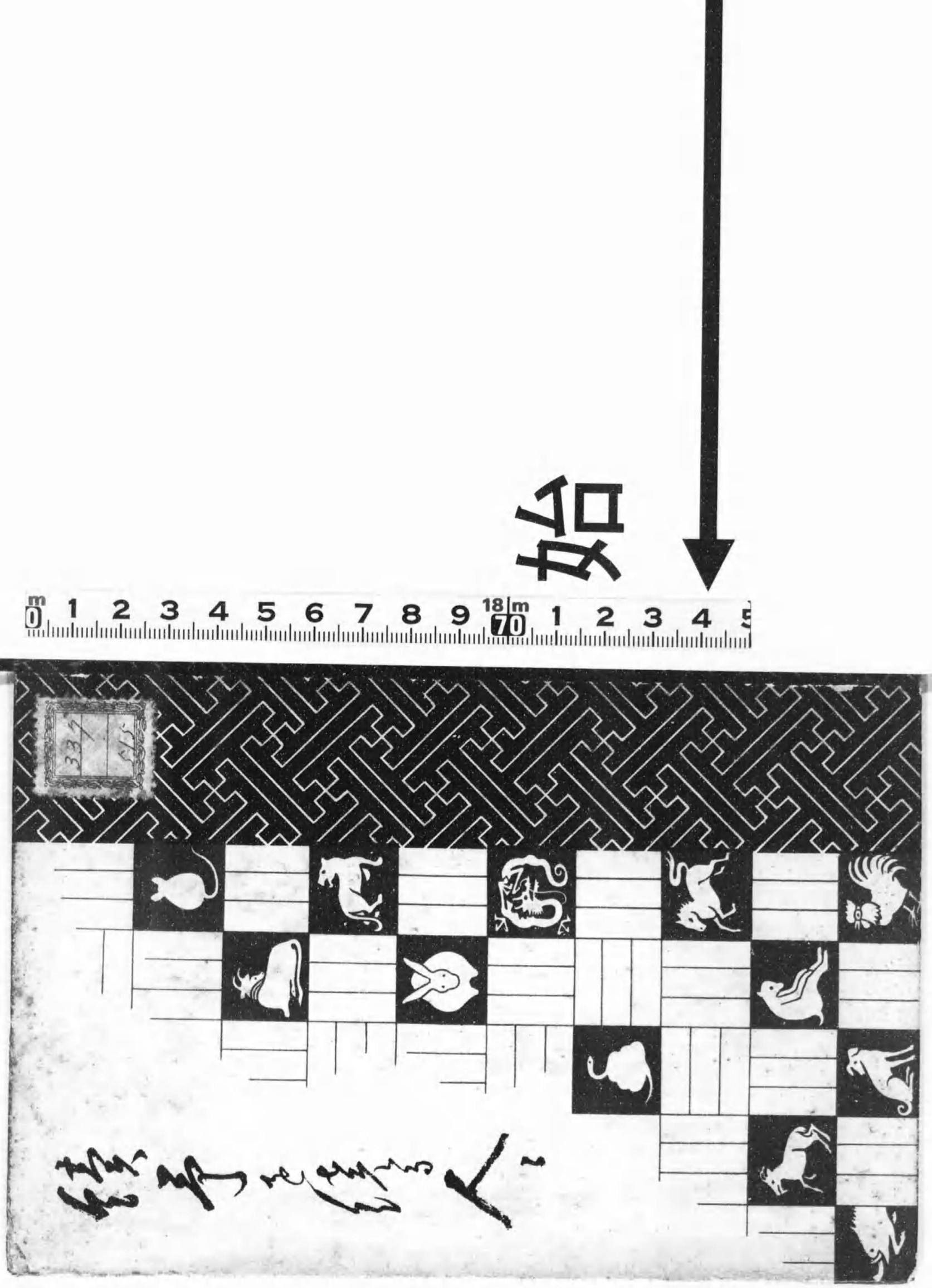


特214
445

續予を繞る人々

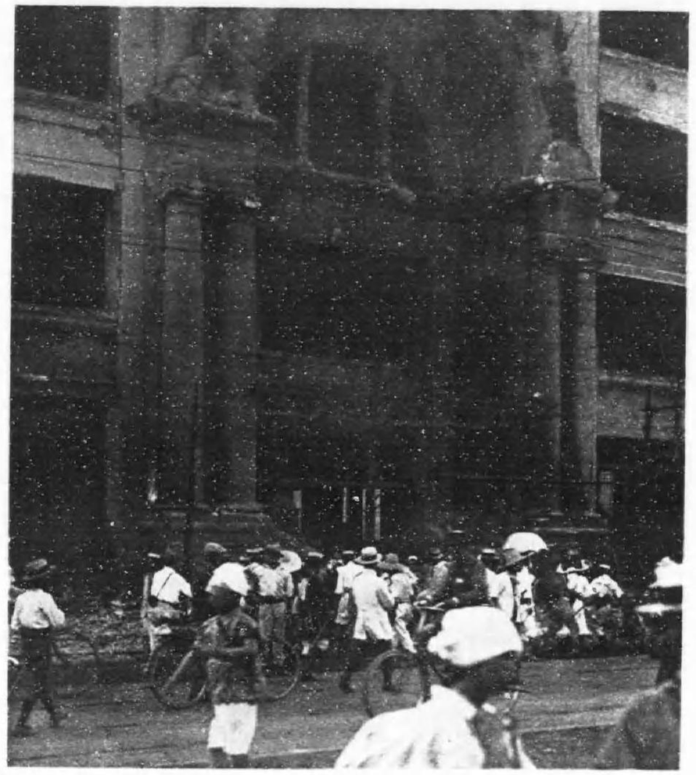
林　幸　平　著

昭和七年　帝國圖書

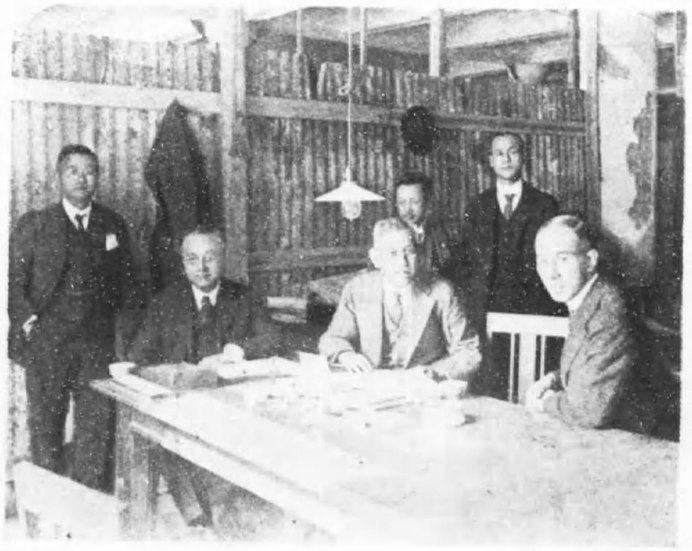
日比、藤村兩翁の靈前に此の書を献ぐ

晩年の日比翁助氏

藤村喜七氏



大正十二年九月三日の三越玄關



震災直後の重役室

越　三　の　興　復

米國旅行中の中村氏と著者(左)

337-515

自序

前年病中の閑筆を弄して『予を繞る人々』を綴りたるに、中途にして病氣は全快し、尻切蜻蛉に筆を擱きぬ。

無責任なる友人ありて、頻りに後編を續けよといふ。

フト魔がさして其氣になり、朝飯前の一時間と、夕食後の一時間とを費して、再び無用の文字を羅列するに至りしこそ禍なれ。

生兵法大負傷の元とは思へど、始めて見れば止められもせず。盲目蛇、突き當る迄走つて行きぬ。

前半は大方、古き記憶を、覺束なくも呼び起して、前編に洩れたるを拾ひ集め、後半は大正十二年九月の震災後、慘憺たる三越の復興に、登場したる人々を土臺として、紛々たる當時の有様を、忘れぬ中にと記したり。

筆を投じて顧みれば、到底痴人の夢に過ぎず。醒めて正氣に歸れば、背後に冷たきものの流るゝを覺ゆ。

昭和七年七月

林　幸平

續予を繞る人々　目次

先覺者……一
大黑柱……五
日比さんの思ひ出……一〇
意匠室……二五
繪の稽古……二八
羅針盤……三三
武力解決……三六
竹鶯梅雀……三九
小僧日記……四四
鐘ごん……四六
心機一轉……五〇
將軍……六〇
太公望……六五

エヴグロ……七三
邪運劍……七六
暑中休暇……八〇
赤城の震動……九〇
桐生の宿……九三
火の都……九七
流言……一〇一
家内安全……一〇三
九月一日……一〇八
食料問題……一一〇
焼け跡……一一三
灰掻き……一一七
武装青年團……一二〇
カンガルー……一二一

青山本部……一二一
金庫破り……一二三
整理係……一二七
防火建築……一二九
寶の山……一三三
宿直……一三五
殘金整理……一三九
兵糧……一四三
探ね人……一四七
死線……一五〇
廻り合ひ……一五三
十三艘飛び……一五六
バラック問題……一五九
首斬役……一六一

轉勤……一六五
黒鼠……一六六
被服廠……一七一
悲劇……一七四
丑さん……一七六
假營業所……一七九
トタンの苦み……一八二
チエーンストア……一八六
洋行命令……一八九
春洋丸……一九〇
ホノルル……一九三
キャリホルニヤ……一九七
グランドキャニオン……二〇〇
シカゴ……二〇四

クリブランド……二〇六
紐育……二一一
サービス第一……二一三
生活難結婚難……二二四
ヤンキーガール……二二六
ロックスミス……二三〇
マウントバーノン……二三四
歸朝……二三七
下足問題……二四〇
復興工事完成……二四二
三越の歌……二四六
社會の徽……二四八
三六會……二七五

||目次終り||

續予を繞る人々

林　幸　平著

先　覺　者

今ではこの百貨店は、東京大阪を初め各都市に散在して繁榮を極め、一般小賣商店の經營を壓迫して、小賣商對百貨店問題をさへ惹起し、取分け近年の不況に際しては、一層深刻なる苦痛を一般小賣商店に與へつゝある。

恰も自動車が增加して、人力車が其職業を次第〳〵に奪はるゝ樣に、一般小賣の商賣組織にも、時代の惱みを痛感せしめて、其覺醒を促すに至つたのである。

然るに明治三十年頃の一般小賣商の營業振りは、實に眠れるが如く、僅かに銀座の煉瓦通りや、勸工場の經營などが、チラホラ珍らしがられた位ひに過ぎない。況んや呉服屋の如きは、最も舊式に屬し、水引暖簾や太鼓暖簾の影に深く隱れて、江戸時代其まゝの狀態を持續して居たものである。

越後屋の組織改革に手を染めた高橋義雄氏は、當時三井銀行の要職に在つた一銀行家であり、小賣商賣には何等の經驗もなき言はゞ白面の一書生であつたが、其頃米國のワナメーカーが、百貨店を其理想に依つて紐育と費府に經營し、非常なる成功を博しつゝある事情を研究してヒントを得られたものであらう。

勿論當時高橋さんは、越後屋の最高幹部であり、僕は年少の一兵卒、親しく氏より其抱負を聞かず、其計畫に與らず、犬馬の如く命のまゝに働いて居たに過ぎず、地位に於て距離甚だ遠く、其眞相を親ひ知る由もないが、今にして追想すれば、斯く想像し得るものである。

客の望みを聞いて、幾多の商品を倉庫から運び出し、又是を片付けて整理する事は、能率に於て非常なる不經濟である、持品を死藏して、華客に其全部を示す事能はざるは、廣告の効果を解せざる馬鹿馬鹿しき組織である。然し此方法は、過去何百年來仕來りの先例であつて、呉服屋の經營は、先祖代々斯う言ふものと丸呑みにし、其型を破り新規軸を考ふるなどは、一般の呉服販賣業者の夢にも思はぬ事であつた。

其能率の不經濟なるに着眼し、斷然座賣組織を廢して、陳列式に改め、持品の全部を一と眼に來客の前に陳列せんとする事は、今でこそ當然過ぎる程の事實なれど、其當時に於ては驚異の改革に屬するものであつた。

或は色が變るであらうの、品が打てるであらうの、持品の全部を暴らすは、店の奥行きを暴露する恐れがあるのと、內部に於てさへブツ〳〵言ふ者が多かつた。

高橋さんは冷靜に、此冬眠せるが如き呉服商賣の狀態を達觀して、一切過去の舊習に捕はれず、明快なる判斷により、思ひ切つて斧鉞を加へられたものである。

かくて、店舗を改築して商品を硝子ケース内に陳列し、手に取らずして其色合や柄行を判別し得る樣にし、表通りにはショーウインドーを設けて、商品の飾り付けをなし、往來の足を止める事を工夫し、使用人採用の方法を改正し、人材登庸を聲明し、賞罰を明かにし不正を嚴處し、帳簿組織を改正し、損益勘定を明かにし、地方の顧客に對しては通信販賣の道を開き、生産業者を促して、新製品を案出せしめ、毎年新柄陳列會を開催して、顧客の吸集を計り、店内に意匠係を編成して、專ら圖案の進歩向上を計り、ポスターを全國各驛に掲げて、廣告の新法を案出する等、現在としては何等珍らしからざる事も、當時は非常に新らしく一歩一歩尖端を切つて、同業者に多大の衝動を與へたるものである。

かくて高橋さんは、呉服屋の座賣法を陳列販賣式に改め、進んで百貨店とするの基礎を作つた先覺者である。

明治三十七年末、株式會社に組織が變更せられて、日比さんが責任の衝に當り、追々に洋服、雜貨、既製品、靴、鞄、玩具、文房具、美術品、家具食料品と商品の種類を增加して今

日の百貨店を成したものである、故に日本に於ける百貨店の發達史を知らんと欲する者は、先づ根本の基礎を築き上げたる高橋さんの功績を沒却してはならぬと思ふものである。

大黑柱

藤村喜七氏は伊勢松阪在の人、今より七十餘年前年齡僅かに十一歲の時、慈父母の膝下を離れて、松阪縞の布子に小倉の帶を締め、小さな草鞋を履いて風呂しき包みを背負ひ、旅なれた宰領に伴はれ、故郷の山河を後にして、覺束なくも幼き足に、東海道の埃を踏んで大江戸に向つた時の姿を想像すれば、何とはなしに一掬の涙を禁じ得ないのである、富める家庭の子弟ならんには未だ母親の膝に甘へてゐる惡戯盛りであるべきを。

其頃、松阪在の百姓の生活は實に悲慘なもので、氏の母堂が未だ幼い氏に向つて、當々人間は白い御飯を喰べて世を渡る樣にならなければ駄目であるとよく言はれた。夫れではどうすれば其樣な生活が出來やうかと言ふに、何でも土一升金一升の大江戸に出て、大

きな店に奉公し、一生懸命働けば……と教へられたと言ふ。

其後さる人の世話で、越後屋へ奉公する事となり、未だ東西をだに知らぬ少年が、生馬の眼をも抜くと言ふ江戸に出て、行路難の人生に早くも獨立自活の第一歩を踏み出した事は、健氣と言はんか、餘りにいぢらしい限りである。

氏は元來勤勉な努力家で、鄕關を出た時から既に背水の陣を布いて居る。如何なる仕事も厭はずハイ〳〵と働いて居る、非常に仕事を樂しむ人であつた。

大方の人は少々の病ひに託けて、休みたがる弱點があるが、氏は店に出て働いて居れば少々の病氣は忘れて了ふと言ふ程の表裏なき勤勉家であつた、夫れに非常な理財家で、餘財が出來れば蓄積して家を買ひ、地所を買ひ、之を有利に貸し付けて、利殖の道に切々として勵む。

見込みあれば、人に金錢を貸す事もあれど、決して恩貸はせね、必ず利率を定め保證人を立てゝ貸す、但し見込みが外れて取れなければ、サラリとあきらめて忘れて了ふ。飽く

迄も追及して首を締める樣な事はせぬ。

其身を持するや勤儉、苟くも無駄な事はせぬ。敬服な事には、經濟に自他の區別を付けぬ事である。

氏は自分の物は勿論、店の物であらうが他人の物であらうが凡そ天下の物質を消費するに當つては、決して不經濟な眞似はしなかつた。

世間大方の人は、自分の物とし言へば極端に始末して、會社の物や他人の物は、出來るだけ大雜端に消費する。是が人情の弱點であるが、其樣な卑しい考へでは決して大成するものでない。藤村氏は、決して苦學素養を積んで人格を磨いたと言ふ質の人ではなく、亦天才的に傑出したと言ふ人でもない、然し彼の誠實と不斷の勤勉とは、彼をして最も商品に精通せる、恐るべき名仕入方たらしめ、暗夜の手探りに絹を仕入れても、嘗て其良否を誤らなかつた程に磨きあげられたるものである。

然も彼は頑固一徹な番頭ではなく、よく時勢の變遷を知つて、之に順應する才能を備へ

て居た、後年幾多の先輩を拔き、若くして越後屋の總支配人となつた頃、世間は盛んに外國の文化を輸入し、所謂文明開化の風が吹いて、鹿鳴館時代の出現となり、洋服の流行は上流社會の男女兩方面共に非常なる盛況を呈した。

氏は早くもこれに着目し、店員中の秀才小林才二郎氏を拔いて隨行せしめ、佛國巴里に渡り、視察して幾多の材料を仕入れ、佛人ホフマン夫人並に其令孃の二人を雇ひ、小林氏を後に殘し、留學せしめて歸朝し、男女兩洋服店を開業して、同業者をアッと一驚せしめたものであつた、當時呉服屋の番頭が洋行して商業視察を試みるなどは、破天荒の事に屬する。

星移り物代つて明治三十七年末、越後屋は三井家の手を離れて、株式會社三越呉服店となるに及び、日比翁助氏を專務取締役とし、藤村氏は常務として今の三越の創業に當り、誠實と熟練と健康と勤勉とを以て、幾多の從業員を率ゐ、眞に青年の師表と仰がれて努力奮鬪した。今の三越繁榮の基礎は、實に氏の力に負ふ所極めて大なるは、今の三越の古き人

達の記憶に尙ほ新たなる處である。

氏が三越の常務取締役として、六十一歳の還曆を迎へた時は勤續恰も滿五十年に當り、其祝ひとして舊越後屋の大黑柱の一端を以て厨司を作り、夫れに純金の大黑天尊像を作つて店員一同から贈呈したと言ふ美談もある。

氏は終世を三越の事業に捧げ、七十餘才の高齡を以て世を去つたが、當時氏の富は既に百萬を超えて居たと聞く。氏の如きは平凡なる、而して健全なる大道を踏んで、眞面目に一歩一歩と進み、成功の門に到達したるものである。

天才的の成功は鮮かで、實に華々しく見えるものであり、青少年の憧れの的となるものである。然し、是は學んで容易に得べき處のものでない、歩一歩健實なる道程を踏んで誘惑の岐路に迷はず、一攫千金の橋を渡らず、坦々たる大道を眞一文字に進んで成功の門を叩くも亦大丈夫の事ではあるまいか、極めて地味ではあるが、健實なる意志の所有者であるならば、何人と雖も學んで必ず到達し得る處の大道であると信ずる。

日比さんの思ひ出

越後屋時代に商賣の振はなかつた原因は、種々有るであらうが、其經營が時代の進歩に伴はぬ事が一大原因である。建築の結構、設備の改善、組織の改正、流行の研究、サービスの改良と數へ來れば限りもない事であらうが、先づ差當り直接客に接する店員の態度が緊張せぬ事は最も重大である。店員が緊張せぬのは、商賣の利害が直接自身の利害に一致せぬからである。積極的には販賣高を增進し、消極的には營業經費を節約して、積み上げたる利益は、直に其何割かゞ店員に分配せられると言ふ事にならなければ、弛緩したる店內の空氣を一掃し、奉公人根情を捨てて、商賣を我が物とし、更生の意氣を以て面目を一新せしむる事は、困難否不可能であると、考へたのは日比さんであつた。

三越が組織を變更して株式會社となり、專務取締役として全責任の衝に當り、熱烈なる意氣を以て全店員を率ゐると共に、なるべく店員に株を持たせて株主となし、每期の決算

に於ては純益金の三割を、先づ店員の賞與に割當る事を發表したのである。

越後屋時代に於ても賞與は給せられて居たが、極めて少額であり、出勤日數に一定の率を乘け合せて、算出せられたるものを與へらるゝに過ぎなかつた。なるべく休まずに出勤さへすれば、若朽でもヘナチョコでも、賞與が多いといふ結果になる。然るに新組織の株式會社となるに及んで、根本の制度を一新し、賞與の一半は本人の働き振りによつて給與せられ、大いに働く者は大いに酬ひらるゝ結果となり、店員一同猛然として奮ひ起つたのである。

嘗ては營業不振の故を以て、店內の設備改善などの申請も大元方に阻まれて用ひられず舊態依然として手も足も出ず、消極一方に傾いて何等の新味も發揮し得なかつたものが、三井家の手を離れて自由の立場となるに及んで、店內の造作漸を追ふて改築し、增築し、新築し、種々の催物を行ふて客足の誘引を計り、新鋭の氣漸く店內に漲るに至り、人氣次第に集中して、日一日と繁昌を加ふるの氣運に向つたのである。一面氏は細心の注意を拂

つて人の働きを見る。事業は人の力である、多くの店員中には隠れたる利器もあるべく、得難き天才も有るであらうと、これを需むる事は渇するに水を求むるが如くであつた。

僕は其頃倉庫番を拜命して、地方からの着荷を受取り、着荷案内狀を發送し、急ぐ物は直に開荷せしめ、急がぬものは正味倉に整理する、傍ら受付けの應接などもして居たが、如何とも閑な仕事で、手持無沙汰で實に困る、秘かに繪筆を弄して一輪の花を寫生して居た。誰か前に立止まつた樣子に、筆を止めて見ると日比さんである、僕はハツとして、是は屹度お小言頂戴と思つて居た、然るに日比さんはニツコリ笑つて、

『ホホーなか〳〵うまいね、一寸その帖面を見せよ』

と言ふ。僕は最早お小言滿喫を覺悟して懼る〳〵差出すと、繰返し〳〵見て居られたが其後は時折花の小枝を持つて來られ、閑な時には是を寫生して見よと言はれた。

是で公然繪を書く事を許された樣な氣もした。ある時日比さんが、小供監督の部屋で呼んで居ると言ふ、ハテ何事かと行つて見ると、四枚の襖を指差して、

『是は君が書いたのか』

と問はれる。

『ハイ、夜分骨書きをして、休暇の時に着色しました』

と卿か辯解ケ間敷く答へた、その四枚の襖には、玉章先生から借りて來た粉本を手本として、四季の山水がデコ〳〵とねたくつてある。

『君は繪が好きかね?』

『ハイ、大好きです。家に居る時分は外へ遊びに出ずに、家で繪ばかり書いて居ました

母はよく繪なぞやめて、字でも習つたら役に立つものをと言はれましたが、好きな道でやめられません』

と正直に告白する。

『ウム夫も宜しい。好きなら大いにやるが宜いさ、是を君に贈らう』

と、月耕漫畫二卷十四冊、二つの疊紙を作らせて、夫に自から筆を奮つて、奬勵の文字を

認めて呉れた。

子供心に、商賣人に書など無用である、今後斷然止めて了へとでも言はるゝ事かと思つて居たが、豈計らんや奬勵の言葉を聞いて夢の如くに感じた。月耕漫畫は、僕の甚だ好かぬ版本であつたが、然し日比さんの篤い志は何物にも換へ難き溫かさを覺えて、今も尙大切に保存してある。

鐘どんの天才を見出して英國に留學せしめる。益さんの利器を認めて、屢々海外にまで仕入に派遣する。常に何者をか見出さんと細心の注意を拂つて居られることは、敬服に價するものであつた。

或る時日比さんは、皆を集めて講演せられた一節に、

凡そ商店は、入口の感じが極めて大切である、卽ち店に這入つた第一印象が宜しくなければならん。先づ入口で、下足番が氣持ちよく來客の下足を預る。（其頃店內では床に蓆を敷き詰め、入口で下足を預る）此動作に充分宜い感じを客に與ふる必要がある。

又出口が更らに大切である、出口の下足番が快く客を送り出せば、店內の混雜で多少の不愉快を感じても、此出口の快感によつて打消す事が出來、再び三越の店に足を向ける機會を作る、下足取扱は賤しい仕事と思ふてはならぬ、商賣の盛衰を握る鍵とも心得て大切に考へねばならぬ。

と言はれ、每朝の出勤には、店の表が開く頃に、必ず正面玄關からスーツと這入つて來るギロツと鋭い眼を以て一同を見廻し、ニツタリ笑つて會釋する、徐々に歩を店內に移して硝子ケースの上に塵などあると、指で觸つて見て顏をしかめ、係員を呼び出して掃除をよくせよと小言を言ふ。

店員一同は、日比さんが出勤したとなると、甲乙丙丁、眼から眼へ電波が傳はつて、皆襟を正して一齊に緊張したものである。歸りには客の出口の下足場から、履物を出させて歸る。來客の多い日などは、下足番に向つて、今日は大入りでさぞお骨折りであつたらう、君達ちが皆よく骨折つて呉れるでのう、いや御苦勞樣と愛想を言ふて勵ます。

或る時下足番の一人が、客の履物の取扱ひに對し不滿足な事があつて、客から苦情の手紙が來た。早速取調べて、其者を二ケ月間減給の嚴罰に處し、そして今夜自分の宅へ來る樣にと命令した。下足番は如何なるお小言を繰返されることかと、恐る〳〵罷り出ると、日比さんは金一封を彼に與へて、

『毎日お前達は塵埃の中で、人のいやがる下足を取扱つて、さぞ骨の折れる事であらう。然し親切に丁寧にして上げなければ、客は必ず不愉快を感じて苦情を言ふて來る。まだ苦情を言ふてくれる人は謝するに道も有るが、些細な事と默つて其まゝにし、再び三越へ來られなくなる客も有るに相違ない。夫が最も恐るべき處、下足の扱ひは甚だ大切な役目であるから、充分注意して呉れんと出來んよ。お前も收入が減つては困るであらうから、是は少ないが私からお前にやる、減給されたからとて、氣を腐らさずに勉强しなさい』

と懇切に諭すのであつた。而も此金一封は減給の高より遙かに多いものであつて、其下足

番は涙と共に大いに感激したのである、一下足番の生活にすら、深甚なる注意を拂つて居られた。

僕が腸窒扶斯に罹つて赤十字社に入院した時、腸出血を起し非常に重體であつて、面會謝絶をして居つた。當時患者が非常に多く、滿員の爲め相當の室に入院出來ず、看護婦の詰所を開けて其處に四等室の待遇を受けて入院して居た。其時も日比さんは態々見舞に來られ、面會が出來ずに歸られたが、非常に重態と聞かれて、態々井上侯に賴み、井上侯から赤十字病院長平井博士に、充分注意してやる樣にと命ぜられる。

平井院長は一等、二等、三等の患者を調べさせて見たが、そんな患者は居ない。そこで段々に調べて見ると、四等待遇の押込み患者で、看護婦の詰所に寢て居るのが夫らしいと、態々院長が見舞に來られた。元來院長は一三等以下の患者は見ない事になつて居る。然るに今日は院長が僕の室へ來診するといふので、看護婦達は色めいて、そこらを掃除するやら大騒ぎ、あとで段々聞いたら、井上侯の御聲がかりと言ふ事であつた。何の爲に井上侯

が、僕の爲めに其樣な指揮をせられたものか不思議でならなかつた、然るに全快の後聞けば、井上侯には日比さんが特に賴んだのであると言ふ。一店員の病氣に對して、斯く迄も心を勞せられるかと、僕も大に感激した一人である。

以上の如きは、大方の人の學んで及ばざる處であらう。

百貨店の從業員は恰も石垣の如く、水に隱れたる下積みの小石一個と雖も、拔き去つては破綻を生ずる基となる、常に心を一にして共同動作を取る必要がある、上下步調を一にして進退せねばならぬとあつて、毎年晩夏、營業閑散なる時を選んで、鎌倉に全店員の大運動會を催す。

當時千餘人を同時に運ぶには、長蛇の如き一列車を特別に仕立てる必要があつた。其日は業を休み、それ〴〵係によつて班を分ち、隊旗を飜して新橋停車場前の廣場に整列し、進軍の指揮に隨つて隊伍正々と乘り込む。此日は新聞記者、流行會員、特別關係者等をも招待する。列車の胴腹には、㊙のマークを取り付け、窓より隊旗を朝風に飜して盛んな

るものである。沿道之を眺めて、三越の一大デモンストレーションに驚く。

列車が鎌倉に到着すれば、先づ鶴ヶ岡八幡宮に商運長久を祈り、行列正しく由井ヶ濱邊に向ふ。海邊には小屋掛けの天幕を張り廻らし、滔々たる相模灣の鯨波打寄する處、一千餘人の大運動會が催される。飛入勝手次第の食べ物の模擬店が出來る、土地の漁師なども秘かに入込んで失敬して居る、餘興には假裝行列、少年音樂隊の合奏、有志の舞踊などと非常なる賑ひ、メッセンジャーは自轉車隊を揃へて、ユニホーム姿で鎌倉中を乘り廻す、名所見物の男女店員は列をなして市中を賑はす、鎌倉は時ならぬお祭り騷ぎ。

夕方は再び隊伍を整へて、別仕立の列車で歸途につく。かくて老いたるも若きも、終日嘻々として戯れ、和氣靄々として遊ぶ。天下に一大デモンストレーションを行ふと共に、全店步調を一にする空氣を作らんとす。日比さんは爲政者として、此邊にも深き考慮を拂つて居られたものであらう。

新聞記者T君は、其頃未だ珍らしかつた百貨店の組織について、日比さんに面會を求め

雜談數刻辭するに當つて、日比さんは態々出口迄送つて來た。（大概な客は自から送り出す）イヤお忙しいのに夫では恐縮と辭退したが、いや是は一つの私の仕事で、かふいふ機會に店内を見廻り、又どういふ風に下足を扱つて居るかも見る必要が有ると言はれ、其細心なる注意にホト〳〵敬服したと言ふて居た。

客に對しては誰にも愛想よく、腰も中々低かつたが、高位高官の人々や、貴族富豪に對しても、格別改まつた態度はせず、極めて自然に應對し、談笑の間に重要なる用件も進めて行く。極めて座談に長じ、見識も高く山縣、松方の諸公にも接近し、伊藤公や井上老侯などには、特に引立てられて居た樣である。

巴里大使館の裝飾の註文は、井上侯との座談により、京城出張所の開設は、伊藤公の援助によつて實現したるものと聞く。伊東、東郷兩元帥や、島村、秋山、黒井等の諸將軍とも親しく、屢々來店を乞ふて、福井丸船材の記念品を作製する計畫を相談するやら、三笠艦の古材を乞ふて何か國民教育の資料を造らんと計畫するなど、商賣以外何事か社會に貢

獻せんと努力して居られた。

日本に來遊せらるゝ外國の貴賓は、式部職の援助によつて來店を請ひ、三越として其旅情を慰むる爲めに、工夫を凝らした事は一と通りでない。當時未だ貧弱なりし三越の店に國賓を迎へて、何物か宜き印象を與へんと苦心し、時に態々茶室を店に設けて、コンノート殿下を迎へ、日本古代文化の匂ひを供せんとするなど、たゞ見れば何の苦もなき水鳥の足に閑なき日比さんの理想は、外交は國家のみに依賴せず、國民と國民との外交に迄導かねばならぬ、三越亦國賓を迎へて、國家の外交に何等か貢獻する處あるべしと考へて居られたであらう。其頃日本に來遊せられた貴賓は、英、獨、佛、米、支を初め、各國の皇族、使節等大方は三越を訪問せられたものである。

日比さんが英國に旅行した時も、日本から態々土産物を携へて、コンノート殿下の御殿に伺候し、前年殿下日本御來遊の節、三越を訪問せられたる御禮を言上して、來英の御挨拶を申上げるなど、一商店の經營者としては、過ぎたる程の心づかひである。

三越は營利會社ではあるが、單に營利のみを考へて經營しては宜しくない、相當に國家社會に貢獻すべきである。或は新製品の競技會を興して、產業の進步發達を促し、店舗の建築を壯麗にし、設備を改善して、都市の美觀を增し、市民の利便を計り、商品は生產者より三越を經て、直接消費者に供給し、極力中間の關門を省略して價格を低廉にし、百貨を一堂に集中供給して、市民の便宜に供し、又流行を指導して市民の趣味を向上せしめんと流行の雜誌を發刊して其時々の流行或は新製品等を紹介し、又種々の催物を計畫してこの雜誌に豫告した。當時この雜誌を三越より送り來るは、受けたる華客の喜びとなり、又一つの誇りともなつたのである。

初めは『時好』と題して久保田米齋氏が編輯の任に當り、『三越タイムス』と改題して濱田四郎氏これに代り、更らに松居松葉氏を迎ふるに及んで、紙面は愈々美辭麗句絢爛を極め、流行を紹介する以外、內容益々豐富となつて、興味を加へ來り、家庭の好き讀み物とはなつた。

凡そ三越のサービスによりて、生活に利便を加ふるは、市民の幸福を增進するものにして吾人の使命とする處、之を理想的に經營せんとするには、內に多くの人材を養成すると共に、智識を廣く世間に求むるの要ありとなし、巖谷小波氏を幹事として、理、文、法、工、醫等の學者、敎育家、美術家、新聞記者等、各方面の權威を集めて流行會を組織し、每月三越を會場として座談會を催し、或は兒童用品研究會を起して、兒童用品の改良進步を促し、私設兒童博覽會を催して、一面社會敎育に資すると共に、將來の華客となるべき多數の兒童を迎へて、三越に對する印象を深からしめんと勉むるなど、數へ來れば枚擧に遑もない。

些細なる客よりの苦情に對しても、百里を遠しとせずして、謝罪に店員を特派し、顧客の疑ひに對しては、或は化學試驗を行つて說明懇切を極め、時に或は貴金屬細工をも切斷して證明に努むるなど、マークの信用を維持する爲めには、多大の犧牲を物ともせず、華客をして大に恐縮感激せしむると共に、絕對の信用を置かしむるに至れる例も少くないの

である。

斯くの如くあらゆる方面に、細心の注意をし焦慮したならば際限がないのであるが、而も撓まず、鋭き不斷の注意を怠らざりし彼、如何に明晰の頭腦と雖も、強健なる體軀と雖も、此重荷に壓せられて、神經衰弱に罹らざるを得れば寧ろ奇蹟と言ふべきである。

果せる哉、日比さんは約束通り重き神經衰弱に陷り、門外不出の人となられて二十有餘年、嘗ては風雪を避け、枝振りの惡しきをため、害蟲を驅除し、肥料を施して、漸く美しき花は開き、累々として甘き實を結ぶに至つたのに、遂に此大樹の花も見ず、實も摘まずして、樂しき春秋をよそに病床に横はる。嗚呼此忠實なりし園丁の悲慘なる運命に、涙の新たなるを覺ゆる者、豈に獨り僕のみならんやである。

昭和六年二月二十二日、午後二時二十分、僕の最も敬愛する日比さんは、折柄の寒天降り頻る白雪皚々、萬目等しく白紗に包まれて、清められたる天地大自然の間に、安らかに靜かに、白玉樓中の客となつて、眼に美醜の色を見ず、耳に賢愚の聲を聞かず、口に正邪

の差を言はず、思案の扉を固く閉ぢて、一と日の勤め終へたる如く、永劫の深き眠りに陷つてしまはれた、嗚呼萬事休す。

されど何等苦悶の色もなく、恰も歸するが如くほゝ笑まし氣に……。

世の中に神も佛もなきものを
君やすかれとなほ祈る哉

意匠室

日清戰爭前後の一般風俗は極て地味なものであつて、母親の晴着を娘に直し、又其子供が洗張りして用ゆるなど、敢て珍しい事ではなく地質の丈夫な事と、染色の堅牢な事が織物撰擇の第一の要素であつた。結婚した後の婦人の晴着の裾模様などは、大方鼠地に白上り松竹梅鶴龜の精々七八寸から一尺位の高さが用ひられ、極めて沈衰したるものであつた

高橋さんが越後屋を經營するに當り、當時戰勝國たる人氣を利用し、裾模様などは元祿

の昔の様に華美にせねばと有つて、畫家に托して裾模様の雛形を書かしめ、或は夜會模様とか、元祿模様とか、或は花柳界をも利用して派手に派手にと宣傳した。當時同業呉服店の模様雛形は、大方紺屋の上繪師が乏しい素養を以て拙劣極まるものを書いて居たに過ぎぬ。然るに其當時越後屋では新たに意匠室を設けて、籾山東洲先生を係長とした。

先生は下條桂谷氏の門人、囑託の畫家に、夫々賣場から注文して來る模様の圖案を割り當て、又一方では參考書を各方面に求めて之を整理し、何くれと事務を取つて居る。先生は繪も書かぬのではないが、餘り裾模様などには適せぬ様であつた。然し書が非常に達者で殊に大字が得意であつた。其頃賣出しの看板や、地方行商の廣告立札は幅十尺高さ十五尺もある、白キヤラコに、墨痕淋漓と大字を踊らせたものである。先生色淺黑く矮軀四尺八寸三分、グツーと一杯きこし召した勢ひに乘じて、件の白布を延べたる上に、丈けなす大筆をかついで踊り歩るく、寒山が雪の庭でも掃いて居る様である。然しよく嵌まつて實に達者なものであつた。何か書く物とし云へば帳面の表紙迄先生の處へ持つて行く。先生は無頓着

に水の流るゝが如く何でもサツサと片付ける。

東洲先生の下には、土佐派の片山貫道、玉章門下の福井江亭、島崎柳塢、高橋玉淵、戸田玉秀、寛畝門下の佐川百臥其他藤井忠弘、花田義方などいふ畫伯連を囑託して、盛んに新圖案を作らしめ、斷然流行の尖端を切つて居たものである。然し、其頃の模様は皆本友禪を主として、刺繍や上繪をあしらうといふ工合で、糸目糊、揚樹糊、闘き糊、伏せ糊と糊置きが主なる仕事である。隨つて其工程を心得て雛形を書かねば仕事が仕悪くい、のみならず出來上つた模様が圖案者の滿足する處とならず、又工人は畫家の圖案を受け取つて思ふ様に工程が進まず、兎角畫家の作製した雛形は模様になり悪いと言ふ非難がある。それで畫家は先づ工場を視察して、其工程を呑み込む必要が有るとあつて、打揃つて京都の友禪工場や西陣の織物工場を視察し、各々自ら友禪を染めて見るなど、世間未だ圖案など言ふ文字の流行せざる頃としては、異數の努力といふべきである。かくて三越の模様が群を拔いて優れて、漸く世間に圖案の必要なるを認めしむるに至り、時に或は懸賞を以つて裾

模様圖案を募集するなど、常に世間の圖案界をリードしつゝあつた。

繪の稽古

意匠室に來て見ると、大勢の畫伯達が澁引の假張りに白雲紙を張り付け、模様の雛形を書いて居る。油が乘ると默々として筆を走らせて居るが、なか〳〵潮が乘つて來ない。大方は定用の大工が難かしい茶室でも捻つて居る樣に、先づ茶を飲む、鋸の目を立てる、鉋を磨く、夫れから一と眠り……まさかさうでもないが、兎角話に華が咲いて仕事は進まぬ勝ちである。

僕は元來繪が好きで、時折意匠室を覗く事を樂む、今日は朝から意匠室に入り浸つて、皆の模様をかくのを見て居る。餘り永く動かぬので、誰やらが、

『オイ、さういつ迄も油を賣つて居ると叱られるぜ』

『いや今日は休暇です』

『ウムさうか、夫れなら淺草へでも行けば宜いじやないか』

『いや繪を見て居る方が面白い』

『君はそんなに繪が好きかい、夫れなら意匠室に役換へして貰つて、模様を書く事を稽古したらどうたい』

『いや夫れは厭た』

『なぜ?』

『僕が跛か片手なしの片輪なら、さうするが、手足が滿足に此の通り動くんだもの、模様かきなんぞに成るのは厭だよ』

『オヤ此小僧怪しからん事を言ひ居るな、手足の滿足な人間が模様を書いてなぜ惡るい?』

僕はハツと思つたがもう仕方がない、

『イヤ、濟みません、御免なさい。なぜ厭だと言ふもんだから、つい思つたまゝを言つて

了つた。夫れは僕だけの事ですよ……』

とホウ〳〵の體で逃げ出した。後に畫伯連中怒るまい事か、然し其後ちよい〳〵胡麻を摺りに行つて御機嫌をとるので可愛がられた。

○○先生は好んで竹の曲尺に、溝の刻つてある定木を巧みに用ゆる。或る時唐紙の半折を延べて、先生！書き初めの御手本を一枚願ひますとやる。先生禿頭をツルリ撫でながら、ウフッ此小僧、人に物を頼む時だけ先生は現金な奴だネ。ウム、やさしい鶴でも書いてやるかな……と筆を執つて、紙の上の方に少さい一羽の飛んで居る鶴をかき、下には立つて居る大きな鶴をかく。やがて上半身が出來て、いざ足となると例の定木を當てゝ二本の筆を持ち、一本は逆さに定木の溝に當て、他の一本の筆に墨を含ませて溝に隨つてスーッと引いて來る。如何に鶴の足が長くても、定木で引いて生きた足が出來るであらうか、往昔應擧は一張の弓を書くに幾枚も無駄がきしながら、其絃を只一といきに書いたと聞く。是でこそ藝術の貴さはあるが、定木でやつては、工藝品にもなるまい。

生意氣な事を考へて見たが、默つて頂戴に及び、毎晩是を手本にして書き初めの稽古を始める、然し足丈けは定木を使はぬ事にした。古人は弓の絃と言ふ靜物ですら、意氣を込めて健腕を奮ふ、況んや是は血の通つて居る動物の足である……。

綿方の最上が川端玉章先生を知つて居ると言ふので早速紹介して貰つて、どうぞ繪を敎へて下さいと頼みに行く。先生頻りに繪をかいて居られたが、靜かに筆を止めて、眼鏡越しに僕の樣子を見ながら、お前繪が習いたけりやお前の店に福井も島崎も居るじやないか…。

僕は夫れには一向返事もせずに、只ペコンと御辭儀をして居る。やがて先生は何かお前の書いた物があるなら見せろと言ふ。即ち甲斐絹の羽織裏に、扇面散らしの模樣を書いたのを先生の前に擴げる。扇面の中には意匠室から借りて來た參考書を手本にして、土佐畫の松や、光琳の菊、四條派の花鳥、若冲の鷄と勝手次第にぬたくつてある。フム！かう無茶にやつてはいかんよ、先づ運筆を學ぶが宜い、手本は書いてやらんが、大倉書店に私の書いた習畫百題といふ版本がある、彼を南京唐紙に習つて淸書したものを持つて來るが宜

い、夫れを見てやる事にしやう…と言はれる。僕唯々として辭し、早速先生の言ふ通り、店が終ると毎晩暗い廊下の洋燈の下で專念運筆の稽古をする。凡そ半月程も習つた繪を、二枚程淸書してある夜先生の門を叩く。先生は夜でも燈火の下で着色の山水を精々と書いて居る、實に勉强なものであつた。

やがて筆を置いて、僕の淸書を見て居られたが、やをら筆を取つて直して呉れる、こう形にばかり捕はれては繪が死んで了ふ、形は二の次ぎにして意氣を學ぶ事が大切である、斯う筆を持つたら充分下腹に力を入れて、此當つた筆に命を込めて今將に開かんとする苔の勢ひを失はぬ樣にする事だ、此一線は植物の生命が通つて居る技であつて、決して只の線ではない、特に新芽を吹かんとする意氣がなければならん、何でも精神を込めると自ら生氣が筆先きに現はるゝ……な……ウム此處が尊いのだ―と親切な教を受ける。大に學ぶ處あつて店に歸る。油が乘ると、火もない寒い廊下の隅に繪筆を握つて、十二時に及ぶ事もある。少し上達すると、粉本を貸してくれる、夫れを寫して作畫の工夫を習得する。

だが、貧生餘財乏しく、先生に對して定まつた謝禮を呈する事が出來ぬ。縮緬の耳など拾ひ集めて奥樣に持つて行つたり、田舍から貰つた新茶を持つて行つたりする位が、精々謝禮とも言ふべき物か。今にして當時を追想すれば、腋下に冷汗の流るゝを覺ゆる。地下の先生、果して如何の感をなして居らるゝであらうか。

羅針盤

越後屋時代の三越は、日本第一の老舗と雖も、小僧を敎育して人物を養成するの制度なく、人材ありと雖も、之を登用するの道も開けて居らぬ。年功を積んで、順押しに番頭になり、漸く僅に一家を營むに過ぎぬ。時代の變遷も社會の進步も知らず、猫額大の老舗の一小天地に蠢動して、醉生夢死するものが多かつた。

何事をか修養せんとして、書物に眼をさらせば、先輩同僚は異端者の如く色眼鏡にかけ

て、同情し指導する者とてはない。

然し、智識慾に燃え立つ少年の向上心は如何なる壓迫の風呂敷も包むに由なく、淺くともせかば溢るゝ谷川の水である。

僕一日、休暇を得て、神田の古本屋の前に立ち、貧弱なる讀書力にも、消化し得る書物をと物色して、手摺れたる一冊の福翁百話を得た。是を懷ろにして上野公園のベンチに讀み耽ける。高尚なる論理は、平易なる文章に綴られて、大は宇宙の大觀より、小は細菌の微に至る迄、人間處世の法より人に交るの道、安心立命の法、有神無神の議論迄、凡そ知らんと欲する新智識は、滾々としてつくる處なき面白さ、春の日影は傾いて、黄昏近くなる頃迄食はず飲まずに立ち去る事をさへ忘れて居た。

田舍からポッと出て來て、物珍らしい東京の繁華に憧れて、稀に來る休暇の日を、指折り數へて待ちこがれて居た少年が、貧しき財布を傾けて得たる一冊の古本に魅せられてあ

たら一日の休暇は消えうせたのである。

翌日から、此古本は、小さき懷ろの奥にかくれて、或は仕事の暇に、便所の窓に、深夜人靜まつた孤燈の下に、默々として闇黑の少年を光明に導く。就中獨立の一章には、最も深き感銘を與へられて、何十回讀み返したか判らぬ。遂に一字殘らず暗誦するに至つた。

何か困難な事に遇へば、此一章を心の中に繰返して、或は勵まし、或は戒めなどした事幾度ぞ。

幸ひにして今日迄、生活の爲めに借金せぬも此お蔭である。今も尚、有形無形の獨立を全ふせんと、努力する心に變りはない。

僕は福澤先生に親しく接した事はなく、寫眞によつて其風貌に接し、著書を通じて其教へを受けたるに過ぎぬ。然し、直接教へを受けたる人に劣らぬ偉大なる感化を受けたる事を、先生在天の英靈に對して、深く感謝するものである。

此貴重なる一片の小冊子、果して幾千の人格を陶冶せし事ぞ。今も尚ほ處世の羅針盤と

して、此毛摺れたる書物は、自から表紙を作り直して、獨立の記念として大切に秘藏して居る。

武力解決

Mサンが未だ桐生出張所長の時分である。今日は市日とあつて、機屋が大勢絹籠を背負つて店に詰めかけて居ると、どこで聞召したかMサンはホロリと顏を赤くして店へ出て來た。下淸と言ふ絹機屋が、大分宜い御機嫌ですな、一つ其景氣の宜い處で此絹を買つて下さいと、籠の中から二疋の生絹を拔き出して前に置く。

『ウム買つてやろう』

取り上げて、聊か朦朧たる醉眼に見て居たが、やをらヅドンと下に置いて

『拾八匁五分！』

『ジョ冗談言つちやいけませんよ、此糸質は無類の上物で、上りの次第も宜し、こんな

逸品は御店以外には向かないんです、是は練つても三割五分とは減りませんぜ、どうしたつて十七匁五分より行きません』

『いや逸品だから上値に付けたんだ、口明けに負けて置け』

『どう致しまして夫れじや可哀さうです』

『いや負けて置け』

『いや負かりません』

『ヨシ夫れなら負けて貰はない、其代り已れと此處で相撲とれ、お前が勝つたら言ひ値で買はう、己が勝つたら負けて行け』

ヨシ來た！と計り二人は店の眞中に立ち上つて四つに組む。是は前代未聞の取引だと大勢で囃し立てる。Mさんは一杯這入つて居るので、聊か足許が危ない。下淸は百姓の糞力を出して、押して見たが存外强い、其義ならばと、前袋を取つて喰ひ下らうとする處を、强引に捻つた、腰車が見事極つて下淸は店の眞中へ叩き付けられた。

ワアーッと拍手が起る。

とう〳〵十八匁五分で取引が濟んで大笑ひ。下清は頭を掻きながら、どうも昨夜の夢見が惡かつたよ。

本店の庶務係に堀三事といふ係長が居た。元來豪傑肌の人で、呉服屋の番頭らしくない老書生、いや馬賊の頭目とでも言ひたさうな人物。酒がすきで、今日も朝からホロリと醉つて懐ろ手をしながら、何が可笑しいか、受付けの机に腰かけて、ワツハツハーと豪傑笑ひをして居る。其處へチョコ〳〵と見すぼらしい男が來て、ペコ〳〵頭を下げて居る。堀サンは鬚達磨の様な顔をして、胸毛をモジヤ〳〵むしりながら、

『何だ手前は？』

『千束屋から參りました、……ヘイ』

『千束屋から何に來た？』

『此方で人を雇ふから行けと言はれました、ヘイ』

『手前の様なヒョロ〳〵した凹凸野郎は使はない！』

『ヒョロ〳〵しては居りません』

『そんな力のない弱虫は駄目だッ』

『力は有ります……ヘイ』

『何！このヘナチョコめ、夫れなら已れと腕押をして勝つたら使つてやる』

忽ち件の勞働者は、堀三事君と受付の机の上で腕押しを始めた。堀サンがウンと力を入れると、入店志望者の腕は見事机の甲板に押し付けられて了つた。

『夫れ見ろ、此ヒョロ〳〵野郎の弱虫め、サッサと歸れッ！』

男はスゴ〳〵出て行く。

堀サンはワツハツハーと大笑ひ。隨分と荒つぽい人物採用試驗ではある。

竹鶯梅雀

藤田さんは今何か用事が有つて、呉服店の方へ行かうとして居る。洋服店長の慶徳さんが呼び留めて、アンタ呉服店へ行くなら序に……と何か言ひ付けた。

藤田さんは早合點の人である。ハツと呑み込んでサツサと呉服店に行き、用事を濟ませて賄方へ廻り、小使二人に命じて、木製のポンプを擔がせて、洋服店の石疊みに据えさせ頻りに燒け付く砂利の上に水を撒かせて居る。

慶徳さんは窓から首を出して、

『藤田さん、アンタエライ氣の利いた事をして居るね。然し此炎天の燒け石にいくら撒いても駄目じやろう。夫れはさうと先程、頼んだ物はどうしたかね』

ハツ……と言つたが藤田さんは怪訝な顏をして、

『先程お仰有つた通り賄方へ行つて龍頭水を借りて來まして、只今此通り水を撒かせて居りますが』

『エツ、夫りや何かの間違ひじやろう』

『私は紛薩摩の十の字絣を持つて來る樣に言ふたのだがなあ』

『ウヘツ私は賄方へ行つて龍頭水を持つて來いと聞きました』

元老の親父は小供の時分、伊勢の松阪から江戸へ出て以來、最早四十七八年にもなるであらうが、未だにお國のナマリが取れない。夫れに、演說なぞは不得手の方で、日比さんが一場の訓示演說をした後で、親父サンも義務として、覺束なくも何かやり出す。

『エー御一同、日々御苦勞樣で、……エー……本年も最早押し詰まりまして、いよ〳〵數へ日となりました。……ウムー……皆樣の御骨折りで寶高の處も、相當な處迄參つて居ります。然しこの……寶ります物は寶ましても、戴く物を戴きませんでは、帳合ひの處もうまく參りません樣な次第で……』

と迄は先づ無難に運んで來たが、是から先きが大變だ——

『エー……ムケマシテ…ウムー…ツケマシテ…』と來る。

さあ何がむけて何を付けたのかサツパリ判らない。其中に語尾が不明になつて、ムニヤ

〳〵〳〵とよく聞き取れない中にお仕舞ひになる。

處が平常は頗る氣短かの癇癪持ちで、マゴ〳〵して居ると、直に怒鳴り付ける。何か用事を言ひ付かつたが判らぬから聞き直すと、忽ちガンと來る、此間拔け萬歳がとやられるから下の者が皆ビク〳〵して居る。

『コラッ何とか〳〵ウムー夫れ〳〵ッ何とか持て來い！』

面喰つてウロ〳〵して居ると、

『ェーッーソレ……碼差だ—何無い……ソコラマシ宜く見てみてお御覽』と來る。

『平之助』ハツと駈け付ける。例の早口で語尾が濁つて居る。何を言ひ付かつたかハツキリ判らぬ。が聞き直せば又叱かられる。ヘツと言つて、先づ絹倉に飛んで行つて友禪五六反擔いで行く。

『是では如何で』

『ェー そんな物やない、御召の中柄と言ふたやないかッ』と來た。

初めて要領を得て、ハツ左樣でと再び絹倉に走つて行く。平之助殿(ヘイノスケデン)絹倉で舌をベロリ出して、クツ〳〵と笑つて居る。

今日は洋服店の二階に取引先の西洋人が來て居る。親父サン手眞似身振りで頻りに御愛想を振り撒いて居る。日本人ならお茶を出す處であるが、西洋人だからコーヒーをとあつて、二階の階段の手摺り迄態々出て來て、

『コラッ小僧やッ—小僧う』

民藏氏は下からハツと返事をしてアタフタと駈け上る。

『コツピー持つて來い！』

ウヘッ！と言つたが驚いた。彼の頑丈な欅の臺の付いた鐵製のコツピープレス。拾五六貫もあるやつを二階迄運ぶのは大變だ。がグツ〳〵して居ると又怒鳴られるから、マヽヨと計り滿身の糞力を出して、廊下の隅から休み〳〵階段の處迄ヨチ〳〵運んで來る。

親父サンは亦二階の手摺迄出て來て、

『コラッ何しとる、早く持つて來ないか』

ハッ只今ッと汗を拭き〳〵二三段持つて上りかける。

『何を持つて來るのじや』

『へッ……コッ……コッピーで…』

『馬鹿！コーヒーと言ふたやないか、間抜け萬歳め……』と來た。

アッ左樣で、と民藏氏は太い眉毛と大眼玉をグリ〳〵、溜めいきをついて居る。下ではクス〳〵一同大笑ひ。

小僧日記

藏前に一冊の手帳が落ちてゐる。拾ひ上げて見ると福一と云ふ茶目な小僧の日記である。

△石井さんが電氣の心を少し引ッ込マセロと云つた、餘り可笑しいから一寸記す。

△昨日來た田印の小使吉藏が、煙管に煙草を詰めて電灯の玉に押し付けて、スパ〳〵やつて居た。

△宿直で庶務の廊下を廻つたら、瓦斯が非常に臭い。調べて見たら、吉藏の奴が吹き消したのだと云ふ、山猿。

△表番が菓子を買つて來て、電灯の下に置いたら、吉藏が變な聲で、それ油がたるゝ、油がたるゝと指さした、ウフッ。

△今日は庶務で小使の天眞爛漫が、役に立たぬとて暇を出された。ベソかきながら、桑名さんに證明書を書いて呉れと言つて居る。何の證明書だと聞いたら、不都合したのではないと言ふ證明だと言ふ、桑名さんが笑ひながらヨシ〳〵と何か書いて居る、見ると、『此男不都合有之事は有之間敷候へ共少々足らぬ處有之候右證明候也』としてある。知らぬが佛の明き盲目、大切さうに懷ろに入れて出て行つた。全く大きなをして、天眞爛漫な奴だ。

鐘どん

姓は岩崎名は鐘造、僕と同様幼にして三越呉服店裡の人となる。

判取りや！、オーと返事をしながら、判取箱を提げて駈け歩いて居たが、元來クレーパーな天品の所有者である。

誰れ教ふるともなきに彫刻をやり、油土を捻り、鑄金を造り、機械に趣味を持つて時計の手直しをやる、ショーウインドーの裝飾に廻轉する機械など工夫する。

今でこそ大小自由なモーターが出來合つて居るが、其頃素人が電動機など取扱ふ事は思ひもよらぬ。然るに彼れ何時の間に學んだか巧みに電動力を利用して動くものを工夫する、日比さんは其邊の事情をよく知つて居る。

其頃益さんと僕と鐘どんは、ショーウインドーの裝飾係を命ぜられて居た。ショーウインドーは店の看板同様で、苟くも店の開いて居る間は、チャンと飾つて置かなければならん

と嚴命せられて居る。大方は店を閉める時に取壞はして、翌朝開店する迄には、チャンと整頓して居かねばならぬ。其頃裝飾係が徹夜をするは毎度の事であつて、珍らしくない。

然し日比さんはチャンと夫れを知つ居る。突然夜の十一時頃に顔を出して、ヤア御苦勞さま今度は何が出來るかな、などと愛想を言つて行く。何か珍らしい飾でも出來ると翌日一同を呼出して、大いに奬勵の言葉をかける。少しクスグツたく感ずる事もあるが、決して悪い氣持はせぬ。我々の努力して居る事をチャンと見て居られると思へば、一層發奮する氣にもなる。此樣なわけで鐘どんが一種の天才である事や、益さんが得難き利器であることも宜く見拔いて居る。

丁度僕が室内裝飾の設計主任をして居る時であつた。鐘どんは兵役を了へて家に歸つては居るが、彼は呉服屋の商賣が自己に不適當である事を知つて、一層此際辭職し、他に自己の天才を延ばすべき職業に轉じやうと考へて居る樣子であつた。

此事を知つた日比さんは、僕を呼んで、岩崎は除隊になつた筈だが、未だ出勤せんぢや

ないか、君一つ彼を説いて出勤せしむる様にせんと出來んな、彼の天才は實に得難いと思ふよ、何か彼の天才を生かして用ゆる道が有るであらうと言はれる。

そこで僕は答へた、彼を洋行せしめて家具製作の研究をさせたならば、必ず三越のスペシヤリテーを出す事が出來るであらう。取りわけ西洋家具に對する塗工業は、現在の狀態が甚だ幼稚で到底西洋と同等の品を造り出す事は不可能である、大方の西洋家具は、木地の上にラックを塗つて仕上げをするのであるが、オークにしてもウォルナネトやマホガニーにしても、西洋から買求めて歸つた實物を示した丈けでは、腰切り袢天の職人が如何に頭を捻り智惠を搾つても、同一な物、否似て否なる處迄すら及ぶべくもない。

殊にギルト(金色塗)に至つては、西洋の如くハイポントに磨きをかけ、低い谷には古びを付けて何とも言はれぬノーブルな味を出して居るが、日本の夫れは只金箔を置く丈けであるから、上滑りの生々しい光りが、テラテラする丈けで其品位に於て到底比較になるものではない。是は是非本場を踏んで、テクニックを研究し、材料を適法に用ゆる事を學ばなけ

れば進歩するものではないと縷々申請した。

夫れなら適當な時に洋行せしむるとして、兎に角早速出て來る様に話して見よと言はれる。僕は早速彼の家を訪ねて日比さんの意を傳へ、百方説いて遂に出勤せしめ、家具工場附きに役付けして貰ひ、其後益さんが仕入の爲め洋行する時、彼を英國に同行留學せしめる事となつた。僕は嘗てメープル商會で設計の研究をしたが、彼も亦メープルと並び稱されるウエヤリングギローといふ、室内裝飾商の家具工場長の家に下宿し、其手蔓でウエヤリングの工場へ見習生として入場する事が出來た。

彼は極めて無口である、英語は取わけ不得手の様であつたが、誰が手を取つて教へずとも、彼の趣味に合致したる事ならば、人の仕事をギヨロツと一と眼見た丈けで大概了解して了ふ。或る時、ウエヤリングの工場でも、勞働爭議が起つてストライキが始まつた。然し無自覺な日本の勞働者とは違つて、皆自覺の行動であり、團體的統制がある。極めて靜寂にして更に過激なる事はせぬ、只要求が折合ふ迄は出て來ないで、代表者と當局者とが交

渉を續けて居るに過ぎぬ。工場長と彼とは組合員でないから一向おかまひなしに出勤、只一人工場に這入つて、急ぎの注文品の仕上げなどズン〳〵やる。大いに工場長に愛せられて、様々な便宜を與へられ、思はず多方面の研究を遂げる事が出來たと云ふ。彼は二年足らずも英國に足を留めて、目的を達し、歸朝して家具工場の主任となつた。

以來三越の家具は面目を一新して好評を博し、ラックの塗方、木材の色付けなどは次第次第に同業者を教育する結果となつて、家具工業の進歩に貢献する處、蓋し少々ではないと信ずる。僕はつひ外道に反れて出來そこねたビジネスマンに成つて了つたが、彼は今も尙工場に依然として彼の趣味に浸りつゝある。

心機一轉

百貨店の仕事は紛々として小面倒臭い事夥たしい、たまには心機一轉の爲めに、健康を害ねぬ範圍に於いて、法外に逸した笹棒な一遊を試むることも宜い。

或る日食堂で顔を合せた藤田君の提議で津田君と僕との三人で、將棋旅行を三日間試みやうといふことになつた。勿論是は初めての試みではない、前年の夏には箱根の日比さんの別莊を借りて、三日間差し暮し旅行を一回試みた事がある。今度は冬の熱海へ行かうとある。議一決し日を定めて、二月末日出かける事になつた。僕はロンドンで買つた小形のドレスケースの横腹へ、鉛筆でひいた木炭紙の將棋盤を貼付け、ドテラ一枚、兵兒帶一本手拭、齒刷子位をケースに押し込み、外套のポケットに駒を入れてブラリと出掛ける。

三人東京驛で落ち合ひ、國府津行きに乘り込み、二等車の片隅に陣取つて、例のドレスケースを横様に置いて、先づ藤田君と僕と差し初める。何方か負けると津田君が代る。勝てば何回でも續けるが負けると代る。手の空いた者は自由行動で、新聞雜誌を見たり、物を喰ふたりするうち、やがて國府津へ着くと、電車に乘り換へて又初める。小田原で輕便鐵道に乘り換へたが、其窮屈なる事は非常なもので、向ひ合つて腰かけたら、膝と膝とが突き合せになる。幸ひ僕などは人並外れて足が短かいから割合樂に納まるがKクンの樣な人並外れて手が、いや足が長からうもんなら事だ。名は輕便鐵道であるが、甚だ以つ不輕便

極はまるものであつた。そこでF君と僕は向ひ合せに腰をかけ、兩方の膝の上へ、列のドレスケースを横様に置き、偖ポケツトから駒を出して差し初める。誠にコンパクトで工合が宜しい、差すなら結局此方が宜い、乘合ひの客は此珍アイデヤを而白さうに見て居る。

小田原を出た輕便鐵道は、バケツを伏せた樣な貧弱な汽罐車から、眞黑な煙を吐きながら、伊豆の海岸線卽ち山の中腹を、右に左に縫ひながら進む、我々は此窮屈な箱の中に三時間を費さなければならない。中々景色の好い處もあるが、手に汗を握る樣な危險な箇所もある。これあるが爲めに、當時熱海への客が極めて少なかつた。僕等は此退屈な車の中の三時間を、將棋のおかげで無關心に過す。やがて熱海に不愉快な車を乘り捨てゝ、大湯の前の玉久と言ふ、二流の溫泉宿に投宿する。座敷が極まると早速F君とT君が差し初める。手空きとなつた僕は、早速一と風呂浴びてから茶代を置いたり、晩飯の注文をしたりした。見れば二人は未だ差して居る。僕は湯上りに宿の下駄を突かけて、海岸へ散步に出る。甘鯛や鰺の干物の間を拔けて、生溫かい鹽風に吹かれ、そこはかとなく漁師町をブラ

付く。藥屋根に橙が枝も撓わになり下つて、黃金の色も豐かに木の股から軒下に掛け渡した竹竿には、大根が重さうに干してある。懷から寫生帖を取り出して一二枚スケツチを試み、小一時間も過して宿に歸れば、二人は未だ夢中に差して居る。やがてF君は湯氣の出る程握つて居た、角や銀を投げ出す。早速僕が代つてT君と差し初める。F君は漸く手空きとなつて風呂に行く。三人三ツ巴となつて、今朝から休まず差し暮らす。夕飯には流石に一時休戰して、初めて三人一緒に食事をする。一と渡り雜談の後T君と僕は湯に漬かつて上つて來ると、サア！やらうと、薄暗い電燈の下で亦差し初める。F君は少し形勢が宜いと馬鹿に御機嫌で、先づ煙草の煙を天井に吹き付け、ニヤ〳〵僕に話かけながら、頻りに考へて居るT君に向つて、オイ金でも一枚貸してやらうか？などとやり出す。形勢一變して怪しくなると、煙草を火鉢の灰にヤケに突き込んで、眉を寄せる。……アツ！、あんな處へ金を、持ち駒か？……汚ね——手を差しやがる、なぞと相手をそろ〳〵罵倒する、愈々望みがなくなると、……ウム……つまらネー〳〵、……大急ぎで彼の銀をカツ拂

いやがつて、掏摸見た様な奴だ。

お客様お床を延べませうかと女中が來る。ウムそつちへ頭を向ひ合せに敷いてくれ、床の中で又差すんだから。やがて僕は縮尻つて非番となり、聊か疲れて床に這入る。二人は向ふで戰鬪開始、暫らくするとF君が僕の向ふ側の床に這入る。Fさん一番床の中で長枕しとね合戰と行きますかな?、ヨシツと計り腹ばいになつて一二番差したが、流石の四王天但馬守、今朝程よりの一騎がけ、生死の程も計り難く、……終には角を眞直に突て見たり、端の香が上つたり下つたり、やがて其まゝ夢に入る。

明くれば女中が廊下の雨戸を繰り初める、流石に熱海は暖かい。東京では今嚴寒の眞最中、朝は床の中に足を縮めて、衿をかき合せ、衝く息さへ眞白く、體をくの字なりに潛つて床離れの甚だ惡るい時であるが、此處は溫度が十度も違ふ。

オツ!Fさん一番、サア來い、未だ顏も洗はぬ中から床の中で腹這ひになつて又初める。T君はニヤ〳〵煙草を吹かして居る。其中に朝日が一杯座敷にさし込んで、女中が床をあ

げに來る。差しかけの將棋は其まゝそつと床の間にのせて、三人朝風呂に浸り、上つて朝飯がすむと、無爲にして暮すは罪惡なりと又初める。はて偖、淫亂とでも申すべきでがな御座らうか。

差して差して差し暮らし、三日目の晝頃勘定を拂つて、輕便鐵道に乘る。僕は例の通りF君と向ひ合せに乘り込む。僕のとなりへは津の上坂か道玄坂あたりのSが二人、藝妓屋のお女將らしいのが一人、向ふ側のF君の右はT君で、左は大阪邊の商人らしい贅六が一人乘り込む。例によつてF君と僕は、近所かまわず御互の膝にドレスケースをのせて指し初める、二人興に乘ると思はず駄洒落を連發する。

其處は一とつ金と行け

ハツハツ!金は金とて通用せず……だ

フム……日蔭に居れど色黑し ……?

ブラ〳〵すれど落ちもせずだ……夫れ

いやそいつは痛いぞ……金銀に離れ娼妓は不あしらいと行け
いやふとしたそれは出來心かね
ホラ、……桂馬の高飛びや歩の餌食
フム、角成り果つるは理の當然と行くんだ
ヤツ、さうか飛車とつぶれて角成りにけりと來やがつたのかい……然らば銀を一枚はず
んで、暫らく雪隱に隱居させやうと存ずる
箆棒めい……カツ拂つちまえ、氣前が宜いんだ、ハツハ……
さりとは狹い御了見、死んで花實が咲くかいなと頂いて置け
オー一寸待つた〳〵、とは言ふもの〻可愛やなあだ、……君の御爲め兼てよりと、王
手の方を先へやるんだ。
フム考へたね、下郎推參スサリオローと一本參る、そこじや善六茶の袴
放言漫語勝手次第、口から出任せの駄洒落の連發に、向ふの贅六も、となりのSも釣り込

まれて口を出す。
オホ〻、大層御隣さんは洒落の内の御祖師様でいらつしやる事ねー
オー、大層オモロさうなエー勝負やな。
ハハアー、アー行けば角がきいたるしと、難かしい處やな
ウム眞鍮のパイプと言ふ處さ
エー面到臭い、眞向梨割空竹割だツ！夫れ
フム、局面轉回と來たか、善哉おしるこ
其儀ならば某は風に柳と受け流し、ヤワ〳〵のグイ〳〵コツペーサン銀流し
半ば洒落か諧語か頓と取止めもない、出物腫物處きらはぬ放談振り、平常の生眞面目を
今日一日で取返す。
贅六いやにジロ〳〵僕等とSを等分に見比べてニヤ〳〵しながら話しかける。此方は
面倒臭いから生返事、聞く樣な聞かぬ樣な態度で相變らず戰ひに熱中して居る。贅六も張

合拔けして今度は女連に話しかける。

『アンタ方は東京だすか?、東京どつちやだす、あゝさうだつか、上方へ行かはつた事をまつかいな?、ハア行きやはつたか、大阪はどつちへ泊りやはつた?、アツチャの御料理はどうだす?、はあそりやアンタエー處知らんのや、お連れはんがシミツタレやつたらだめだつせ、わてがエー處へ御案内しまほうか?

厭にチラ〳〵人の方の氣色を窺ひながら止め途もなく駄辯を弄して居る。察するに此贅六僕等一行を此不見轉の旦那と思ひ違へて居る、そこで此樣な貧弱な旦那では碌な上方見物もさせては呉れなかつたであらうと言ふ樣な意味らしい。藝妓連も此贅六には少々手古摺つて、いけ好かない奴よと腹の中で思つて居るらしい。兎角贅六の話には氣の乘らぬ生返事をして、用もない我々の勝負や駄洒落に口を出したり笑つたり、果は蜜柑をむいて呉れるやらキャラメルをよこすやら待遇して呉れる。拙者等も亦此いけ好かない贅六を一番かついでやるも旅の一興と、呉れる蜜柑もキャラメルも遠慮せずにムシヤ〳〵頬張る。贅六想

像愈々的中と見て、盛んに當擦りの厭味を並べる。一寸面白いとは思つたが、將棋を差し〻居た爲め惜い事に何を言つたか覺へて居らぬ。

此樣な余興で車中割合に退屈せず、輕便が小田原に着く。僕等は駒を外套のポケツトへ拾ひ込み、鞄を提げて三人サツサト下り停留場に電車を待合せる。不見轉連れは是又別に挨拶もせず、勝手にキャツキャと言ひながら、箱根方面に連れ立つて去る。贅六はと見れば、怪訝な顏付きで僕等の脇に立つて居る。

『彼の方々はあんた方の御連れさんやをへんのだすか?まあさうだつか』

ときまり惡るさうに向ふをむく。僕等は三人揃つてワツツハツハ——。

かくて亦歸りの車中で差し暮し、東京驛で別れて各家路に向ふ。三日間の將棋差し、格別疲れもせず飽きもせぬ、自由な閑さへ有れば、まだ何日でも辭する處でない、一手の動きに、一時間を費す名人もあれば、一時間に五六番も片付ける達者もある。我が濱田君は名づけて是を迷人と言ふ。

將軍

雨上りの初夏の空、朝日は既に高く順天堂の新綠を照らして、湯上りの樣な爽やかさ、昨夜の雨は未だぬかる道に名殘を止めて居る。

本郷の高臺から半個聯隊程の少年團が、二列縱隊に行儀よく、お茶の水方面に向つて進行して來るのは、今弓町の寄宿舍を出た三越の少年隊が出勤の途中である。眞先きに旅團長然と闊步するは、言はでもしるき〇〇將軍である。彼は頭にアンペラ製の苦力(クーリー)型帽を阿彌陀に戴き、カーキ色のマントをフワリと着流し、靴には鐵棒を折り曲げて足駄の齒の如き格好に取り付けたる珍物を穿きしめ、晒木綿の袋を下げて居る。爆彈でもと伺ひを立てると、何の事ッた、之はアルミニユム製辨當の空箱、大一番といふ奴であると言ふ。何の爲めに其樣な物を持つて通ふかと聞て見ると、賄の器具は洗ひ方が行き屆かぬから不衛生であるといふ。然り而して此辨當の空箱を賄に渡して、一個には飯を詰めさせ、他の一個

には菜を入れさせて喰べる。

賄方が見えぬ處で、如何なる不潔な事をしやうとも知らぬが佛、夫れは構はぬとある。

胡麻が體の爲に宜いといふ事で、お茶の罐に胡麻鹽を入れて置いて匙で喰べる。大きな口をパクリと開いたまゝ、匙でサク〳〵胡麻鹽をすくつて投げ込む有樣は、火夫がボイラーへ石炭を放り込むと同樣、喰べると云ふよりは無理に押込む方である。決して甘い氣閑へないがこれも衞生の爲めとある。

果して何日間長生きするであらうか？

ある田舍者が將軍の高靴を見て感心し、西洋の足駄は馬の爪に五德が付いて居る樣だと言つて居た、將軍の颯爽たる風貌は、遠く之を望めば苦力の如く、近付いて拜すればルン……。

コラ！失敬な事を言ふな！

カツターのベントレーが彼は生潛の酋長かといふ、

インヤ、

馬賊の頭目か？

否々失禮千萬な、彼は帝國陸軍教導團出身の將校にして、日清日露の兩役に參加し、滿洲の野に轉戰して祖國の爲めに勇奮敵膽を奪ひ、上官皆戰死して氏は之に代り赫々たる武勳正？位勳？等功五級、武人の最高名譽とする金鵄勳章を胸間に輝かし、今や功成り名とげて後備役陸軍の中尉殿にておわすと知らずや。

お名前はと言ふなら、英譯してやる、リューテナント、ビー、マウントロードと申上げ奉る。

將軍は福澤先生に私淑し、嘗て慶應の寄宿舍に舍監たりし時、今の重役中の某々氏等は未だ學生の頃で、可なり閣下に油を搾られた人もある。春風秋雨幾星霜、世の中は味氣なく變つて昨是今非地位轉倒、昨の乳臭兒今は爲政者となりて閣下を左右し、閣下當年の意氣漸く衰へて胸中平らかならず、時に齒勃の獨語。

『彼等重役市井の町人遂に何する者ぞ、宮中の席次に至りては遙かに我輩に及ばず』……と怪氣焔イヤ御尤も。

今小供を集めて一場の訓示が初まる。

『汝等は起床ラッパと共に直に飛び起きる、躊躇するんじやないゾ、汝等は皆未だ若かいのであるから何でも元氣にやる、顏を洗つたならば手拭をキチンと元の所にかけて、授業の用意をする、汝等はラッパと共に教室に這入つて、靜肅に學科を學ばなければならん。夫れが濟んだならば出發の用意をする、汝等は號令と共に各班に分かれ、二列縱隊に進む各班の間は凡そ五米突を保つて進む、外見をせず雜談をしてはならん、汝等は電車と自動車に注意して宜く班長の命令を守る』と、曰く何曰く何と汝等を繰返して訓示が終る。

愈々出發となると自慢の號令がかゝる。音吐朗々として鐘の如く、どこを叩けばあんな音がするかと思ふばかり、是丈けは正眞、板について居る。『汝等』に至つては教導團の昔を其まゝアリザリンの堅牢染めとあつて、洗つても晒しても容易に落ちるものでない。

『汝は此雨の降るのに傘も指さず草履を穿いて來るとは何事か、アー、そんなに着物が濡れては亦洗はんけりやならんじやないか、雨の降る時にはチヤント傘を差し外套を着て高下駄を穿かんければ駄目である、ウム、高下駄を、其位の事が判からんか？汝は今年何歳になる？途方もない馬鹿者であるなア』と極め付ける。

『イエ、今朝寄宿舍を出る時には宜いお天氣でしたが、店から歸る時には降て參りましたので、只今、そのー、傘と下駄を取りに參りました。是から店へ歸つて、高下駄を穿いて雨傘を差して外套を着て、出直しましたら……如何で？』

『ウムさうじやな、いや待て？？？』

將軍元是れ一介の武人、錢を愛せざるにあらずと雖も、錢嬢恐れて閣下に親しむを好まず、閣下胡麻鹽の滿面笑みを崩づして錢嬢に秋波を寄すれば、彼女は友禪の袖を翻して、アラコワイわと逃げて行く、是ぞ鮑の片思ひ……。

今や閣下巷塵を外に、湘南の海岸松林の中に起臥し、オゾンを滿喫しながら尙ほ未だ浮

世の紛々を捨てず、町會議員となりて會議に長廣舌を振るひ、町會の業績振はざるを慨して町長の無能を痛罵する。

町長恐れをなして印綬を閣下に呈し、代つて町長たらん事を請へば、將軍は旗を卷いて去る。

經濟の原則に隨つて、最小限度の勞力を費し、最大限度の効果を納むる爲め、某々の會社に關係して錢嬢の鼻息を窺つて居るとやら、老滿痴苦な將棋を一人で差して居らるゝとやら……。

太公望

世間によく釣道樂と云ふがある。平常は無精にして縱の物を横にもせぬ癖に、いざ釣となると夜の三時頃に飛び起きて、道具を揃へるやら蚯蚓や沙蠶の餌を汚ないとも思はず、水を含ませた砂の中に仕込んで、辨當と隣り合せに包んで出かける。假令寒からうが暑か

らうが更に意とせず、星かげ闇き未明の空を眺めて目的地へと急ぐ。

惚れて通へば千里も一里……とばかり寒風に吹き晒され、炎熱に焼き付けられ、艱難辛苦を更らに意とせず、終日奮闘努力の結果、時利あらず、僅かに細鱗兩三尾を得るに過ぎざるの結果に終るとも彼は尚悔ゆる事なし、世にこれ程採算に合はざる商賣あるべからず。普通の人情より考ふれば、失望落膽天を恨んで自殺をもしかねまじきを、尚悠々として樂んで止まず。實に此境地を人間處世の道に移したらんには、偉大なる人格を作り得べきものを。

高橋忠さんは釣道樂の一人、釣の講釋となると滔々數千言微に入り細に亘りて至らざるなし、但し夫れ程、結果に於て收穫を得た事はあるまいと思はれるが……。

鵠沼休養所の前を流るゝ境川には手長海老多く棲みて、是を釣るは中々に興味がある。一日の休暇を利用して海老釣りの會を催さんと同君の勸議、F、G、T、S等五六人を說いて廻る。拙者氣短かにして釣を好まず、忠さんの勸誘餘り氣乘りもしなかつたが、忠さん

その面白きを說いて止まず、遂に釣り込まれて俄か太公望となる。但し萬事向ふ任せと堅く約して行く。高橋さん、其夜は二十本の短かき釣竿を買求め、糸を結ぶ、浮きを付ける針を付ける、餌箱に砂を入れて、沙蠶を仕込む、中々以て並大抵の事にあらず。

翌日約束の時間に甲乙丙丁東京驛に集まり、鵠沼に向つて出發する。忠さん既に先發して舟も竿も餌も準備悉く調ひ、流石々々と感服せしめる、もし商賣にかけて此熱心と此注意とを以てすれば、此男必ず成功したらんに、洋服屋の若旦那勢ひに乘じて飲み且買ふ。時に官省の入札には三越の藤田君を向ふに廻して鎬を削り、敵の納品の荒を探して、祕かに役人に告げ、之を買收して納品不能に陷らしめて、藤田君を手古摺らすなど、碌な事をせざる報ひか、自己の商運意の如くならず、今は店を疊んで膝を屈し、三越呉服店裡の人となり、然かも洋服經驗者として藤田君の下に働く。いや是は横道〳〵、舟は向ふの河につないであります、ウムさうか。

やをら一同舟に乘り移り、少し流れを下つて、一と群茂る木蔭につないで、忠さんの敎

ふるまゝに只釣ればよい、やがて命令通り釣にかゝる。こちらは一向氣が乘らぬから、餌を取られても知らずに何時迄も竿を睨んで居る。忠さんはチョイ〳〵手實に釣上げて、早や七八尾は籠の中でピン〳〵跳ねて居る。此樣な約束ではないがと段々樣子を聞いて見ると引掛かつたとて格別先方から、報せが有る譯ではないとある、針をあげて見れば餌はない

『オイ餌を付けてお呉れ！』

『自分でつけ給へ』

『いや汚ない、萬事君任せと言ふ約束だ』

『仕樣のない奴だね』

其中に一尾眞黑な手長が引かゝつてピン〳〵跳ねて居る、手許に引寄せてつまむと、チクンと指先を刺された、……痛い。……是は又どう外せばよいか、エー面倒だと忠さんの方へ投げ出して、

『オイ高橋君釣れたよ』

『ウム釣れたか、……其籠へ入れて置き給へ』

『君取つて入れて餌を付けてくれ給へ』

『冗談じやない殿樣の釣じやあるまいし』

『いや今日は殿樣同樣の取扱ひだ、何しろ今日入門未だ不馴れとある、何時迄たつても上達する氣遣ひはなささうだが、マア君嫁に行つた晩だと思つてあきらめて言ふ事を聞き給へ』

先生何かブツ〳〵言ひながら、夫れでも獲物を外して餌を付けて呉れる。

『オイ高橋君又釣れた』

其日は朝から晝頃迄に五六人で釣つた奴を甘煮にして食膳に上ぼせた。格別甘いとも思はぬが、一人悦に入つて賞翫して居るのは忠さんである。其後は殿樣釣に閉口したか、頓と釣の勸誘を受けなかつた、よく〳〵外道と見はなされる事であらう。

ある夏の事であつた、阪部君が横須賀の漁師に知り合があつて釣に案内すると言ふ。間

のよい時には迚も間に合はぬ程釣れて面白いから是非來いとある。鈴木、中村、永峯などの連中も同行するといふ。餘りに感心した事ではないが、本職が釣るのはどんな風か、是を見るも亦一興と出掛ける事になつた。一同新橋の停車場で落合つて見ると、中村君が箆棒に大きな花籠を下げて居る。はて釣には邪魔な物を持つて居ると思つたら、是に一杯獲物を詰めて歸るとある、フツ大した抱負に驚いた。

兎角して横須賀の船宿に來て見ると、漁師は氣乘りのせぬ顏付きで、折角御客樣が見えたが、今日この潮工合では釣れますめえとある。見れば天氣はカラリツと晴れて、浪風も靜かで、此好天氣に海へ漕ぎ出したら、さぞ宜い氣持ちであらうと思はれた。

左樣か夫れなら何れ又出直してと言ふわけに參らぬ。兎も角も、折角來たものだ、舟を出してくれ、と釣舟に乘り込む。幹事、食料の用意は宜しいかと聞いて見ると、ウム若干用意してあるといふ。相變らず萬事向ふに任せて乘り込むと、舟には莫蓙を敷き、一文字の日除けを張つて、前後に舟子が乘り、一同は胴之間に微風除ろに面を撫てゞ誠によい心

持であつた。やがて小一時間も漕いで舟は大分沖へ出た、とある島かげを望んで錨を投じサツ！まあやつて御覽なさいとある。此處は大分深いと見えて竿などは用ひぬ。糸卷きに各十尋もある糸を卷いて、先きには三十匁位な重りを付け、廻りに針が四本、眞中に小袋が付いて其中にアミを入れ、ポント投げ込んで糸卷をほどす、スル〳〵糸をやつてトンと底に到達する迄下す。そこで、若干手答へがあつたら急いで引上げろとある、どんな手答へが有るか知れたものでない。漁師はと見れば、テンで糸を垂れやうともしない、パクリパクリ煙草を輪に吹いて、彼等は既に達觀して居る、此潮に糸を垂れても無駄であることをよく承知して居る。

然るに我々は東京からわざ〳〵來たもので、亦のチヤンスは到底待てるものでない。さればとて折角の御出だから、引掛つて上げやうと愛嬌を振りまく樣な魚は、横須賀の海廣しと雖も一尾も有るものでない、そこに若干の無理がある。兎角素人は自分の都合で無理押しをやりたがるが、自然は如何とも致方がない、駄目なものは駄目と有つて更らにかゝら

ぬ、小半時も上げては下し、上げては下して漸く僕の糸に二尾の小鰺が引掛かかつたので勢を得て夫れ釣れ初めたと計り、一同馬力をかけて見たが、其後更らに二三の細鱗を得たるのみ。

扨愈々釣れぬとなると、腹の空いたことを思ひ出す、オイ幹事何か喰べる物をと催促すると、是は亦皮肉千萬、幹事不行屆きと有つて、食ぱんと餡ぱんの袋を投げ出したきり、喉は乾いても飯む物はない、食ぱんは既に乾燥し切つて、ガサ〳〵して居る．是を一とかけ頬張れば口中の唾液は悉く吸收せられて、たまつたものでない。一同ブツ〳〵口小言を言つて見た所で舟の上では何と勘辨が付く物でない、厭氣がさすと暑さは一としほ身に染みて、折角の休日却て此苦しみに逢ふ、何の刑罰か是に過ぐるものあらんやと憤慨する。サツ其處等漕ぎ廻つて歸るとしやう僕はやをら一本の棹をとつてフワリ〳〵浮いて來る、人を馬鹿にした樣な海月を望んでヤツ！と突き刺す、寶藏院が月影を望んで、禽を訓錬するも斯くやと思はるゝ計りに。

ウフツ！罪もない海月こそよい面の皮だ。中村守君は茫然として再び大花籠を下げて家に歸る。

僕は愈々釣がきらひになる。

エロ、グロ

B君は堀越商會の支配人、永く巴里に在勤して、其ブライトサイドもダークサイドもよく心得たものである。僕とT君が巴里の用件を終へて去るに當りB君はダークサイドも一ペン見て置いたらどうかと云ふ。探險する位なら大した損もあるまいとあつて、三人打連れて怪しげなる裏町の横丁を右に左に、青いペンキ塗りの扉を押し開くとケタタマしい鈴が鳴る。すぐに階段があつて、トン〳〵〳〵と上つて行くと、階段の途中に切符賣場の樣な小窓がある。五十格好の油切つた女將が顏を出して、B君に何か御愛想を言つて居る、相當お馴染の間柄と見える。やがて女將は蕎麥屋のお通し見た樣な聲を出して、オデスサー

ン（聞えた）と上へ向つて聲をかける。階段の突當りの扉がギーツと開いて、遣手婆の樣な女が出て來る。三人はヅカ〳〵と一と間に通ると、十五疊位なサロンの中央に丸形のローンヂが置いてある。其廻りへ各腰をかけると、遣手の年增がビールを持つて來て一パイづゝついで行く。やがて向ふのドアがパツト開くと、腰間僅かにシフォンの輕羅をあてたる赤裸々の女が、足を揚げたり、手を振つたり、或は腰を捻つたり、凡そ十五六人程緩るやかに踊りながら出て來て、僕等の腰かけて居る廻りを二三回ぐる〳〵廻る。夫れがすむと、今度は何か頻りに話しかけるが、一向に解らぬ。多分自分を今晩買つて呉れとでも云ふのであらう。隣りへ割り込んで腰をかけたり、ビールを飲ませろとねだつたり、果ては女同志戯れて叩いたり、キヤツキヤと嬌態を演ずる。拙者未だ以て君子にあらずと雖も又以て長く此席に堪ふべけんやである。ギラ〳〵と表面を飾る文化の光を、裏面に於て存分否定して居るから笑はせる。結局西洋人が幾ら偉らさうな事を言つたとて、錦に包まれたる野獸に過ぎぬと思はせる。

一體パリジヤンはスラリツとした、腰の細い意氣な姿をして居るものと思つて居た僕は實に一驚を喫したものである。實に彼女等の肉體の偉大なる事よ、其下腹部の便々たる、其大道臼の巨大なる、是が皆彼女の所有物かと疑ふ計り、ボチヤ〳〵と言はんか、デブ〳〵と稱せんか、其油切つて暑苦しき事言はん方もない。芋虫といはんか、鮟鱇と言はんか、豚か、家鴨か、將亦象か、夫れでなければヒツポポタミスの行列でも見る樣である。之をエロテツクと言はんには餘りに線の太きに過ぎたり、グロテスクと評せんには聊か以て物足らぬ心持もする。いや見る人によつて各異るであらう、又腹工合によつても違ふであらう。兎に角相撲部屋でとりてきが戯れて居る樣である。いや餘りに物が大味である。デリケシーなぞと言ふ文字は、此家の字引には無いであらう。

ビール會社の社長で有名な豪傑〇〇翁は、巴里見物の折、此處に案内せられたが、流石の好き者もフラ〳〵ツと辛棒する氣になつて、今晩はよしやせうと退却に及んださうである。命有つての物種、さもあるべし。ビー看觀料各十法、金貨の樣な御土產を貰つて歸

る。

ロンドンで散々僕を挺子摺らせた常陸山は、通譯の野邊地君を引連れて巴里に出かけた。然し天下の横綱、何を視察したからとて、餘り參考になるものもあるまい。結局赤毛布のお上りさんに過ぎない。ルーブルの博物館にミケロアンジェロの名作、筋肉隆々たる羅馬人のフュギアを見たとて、格別相撲の參考にもならず、グロテスクな黑人のボクシングでも見る位が精々といふ處であらう、誰やらの案内でエロ町のエロ相撲を見る事にしたといふ。

扨てチョン髷の上に山高帽子を戴せて、ブラ〳〵とグークサイドに這入り込み、拾法の金貨一枚を投じて階段を登ると、或部屋の廻りは覗き眼鏡が幾つも並んで付いて居て、既にロスキーやヤンキーの鼻下長先客が大勢並んで、熱心に覗いて居る。御大もやをら其一つに眼を押し付けて見て居ると、中は明るい部屋であつて、其處には赤裸々なる×と×が虚々實々千變萬化組んづほぐれつ元始時代をそのまゝなる、否々文化の爛熟、腐敗の極致、

野獸的活動のエロシーンが展開せられつゝある。四十八手の裏表にもない取り口を、呆然として見入つた巨人、感嘆之を久しうして、嗚呼三十六俵天地廣しと其門を出た。

夫れから今度は徐ろに動物園へと足を向ける。變な氣持ちになつてボンヤリ象の前に立つて、此奴の腹と已れの腹とどちらが大きいかしらなどと考へたかどうか?、象は傍らの水桶に鼻を突き込んで、スーツと水を吸ひ上げた樣子が變だとあつて、野邊地通譯はヒラリと計り身を交わしたが、巨人常陸山は平然として立つて居る、象は鼻を延ばしてグツと突き出すや否や、ブーツと計り滿含の水をはぢき出す、流石天下の横綱もアツと云ふ間に、滿身鼻水を浴びてズブ濡れになる。

象も已の腹に似た樣な變な奴が立つて見物して居やがると、餘程癪にさわつたものと見える、御大常陸極りは惡るし癪にはさはる。傍らに立つてクス〳〵内密で笑つて居る野邊地君を、グロテスクな面でグツト睨み付けて、大喝一聲、なぜ早く俺に敎へねーんだ!馬鹿野郎!と言つた處が、なんぼ通譯でも象語なんぞが解るものでない。

邪運剣

營業部へ廣告の取極めの交渉に來たのは、〇〇新聞廣告部長のS君である、廣告料の定價は一行七十三錢であるが、月極め一ページ契約として廿八錢位に負けて貰へまいかと、掛合ひに及んだ。S君色をなして餘りに踏み倒し方が非道いじやないかと大いにプラフをかけて來る。互に折衝數刻に及んで段々歩み寄り、僕は三十一錢迄買ひ進み、S君は三十二錢迄讓歩する。最後の一錢に及んで丹那トンネルは、一大斷層にブツツかつて挺子でも動かぬ、S君は興奮して泡を飛ばして論ずる、もう五厘づゝ歩み寄つてはと提案したが、頑として應じない、僕も今更ら兜をぬぎ兼ねた。

さればと言つて、此處迄堀つて來たトンネルを、斷念するわけにもゆかぬ。只一錢の問題で物分れも餘り名譽でない、何としたものかと一考に及んだが、窮すれば通ず、ハタと名案が浮かんだ。

『ヨシ！もう彼れ是れ言はぬ、此解決は一劍(拳)に誓ふることにしやう』

『エツ！決闘でもしやうと云ふのですか』

『いや、ジャンケンさ、僕が負けたら讓歩する、君が負けたら三十一錢』

S君頗る難色が有つたが、かうなつては刄の手前引くにも引かれず、思ひ切つてヨシー と計り、五十面下げた奴が、子供の様な拳を固めてジャンケンポン！。

僕はパツと拳を開く。

S君は握つたまゝ、ニューツと突き出す。勝負有つた！一行金三十一錢也。

S君恨めしさうに自分の拳を眺めて頭を掻き、嗚呼サツキ五厘づつ歩み寄つて置いた方がよかつたなアと苦笑ひ。

タツタ一錢と笑ふ勿れ、一行一錢一頁千八百行、一ケ月十八圓一ケ年二百十六圓。此の一劍正に黄金二百十六枚也とある。

暑中休暇

紛々たる連日の俗務に倦んで、圓かなる眠りに落ちぬ夜も少なからず、輕い神經衰弱と云ふものであらうか、是は今の中に心機一轉を計らぬと飛んだ事になるかも知れぬ。

僕は群馬縣に生れて、未だ上野の三山を踏んだ事がない。この機會に赤城山にでも登つて一と汗かいて來たらと考へた。序でに無沙汰勝ちになつて居る桐生の親戚へも顏を出し、義兄のKが雷電山の中腹に植物園を營んで、今年は溫室も出來たと聞く。先づ二三日はそこにでも暮して、故郷の誰れ彼れに久々の話も亦面白い事であらう。兎に角、トルストイもシェークスピヤも結構だが、又ふる里の杢兵衞や田子作も面白い。

紛々に倦みて野人を懷かしみ

などと勝手な事を考へながら、田舍で四五日暮す食料品の材料に、果物や肉類の罐詰、小魚の味淋干、乾海苔に菓子、若干の西洋酒、手土產には手拭の浴衣地など、手當り次第

に取纏めて、先づ鐵道便で送り付けた。

自分は羊羹色のアルパカにボーラの縞ズボン、三年ビネの古パナマを戴き、浴衣と兵兒帶と寫生帖などを、スーツケースに詰め込み、飄然として出かけたのは、大正十二年八月三十日である。

東京を離れると、身も心も輕く十五年ぶりの一人旅、桐生の停車場に降りて、三丁目の原勢を訪ねると、僕の如き天下の無精者が、是は又何の爲めに一人でブラリと舞ひ込んだか、はて陽氣でも變らねばよいがと、誰れやらが云ふ。二日の後には大地震が襲來して、關東の天地を覆がへさうとは、神ならぬ身の誰も知るまい……と言つた處で地震は僕のせいでもない。

今夜は此家に一泊して、あすは赤城へ登山すると言へば、夫には丁度よい事がある、CとS子が學校の休みで遊んで居るから、案内させやうとある。Cは今桐生中學の四年生でS子は女學校の二年生、何れも山國育ちの健脚揃ひである。

この甥と姪を前驅後從として、お伽噺の乞食の王子様見た様な格好をした僕は、故郷の靈山へと罷り登る。御み足には縞ズボンの上から、茶色綾木綿のゲートルを三十五錢で停車場の雜貨屋から御需めになつて、御卷き付け遊ばし、靴では御滑りになる懼れがあるとて、ゴム底の裸足足袋を九十五也錢御奮發遊ばして御召しになり、桐生のステーションから恐多くも三等の赤切符で、御車を水澤の驛で御乘り捨てになり、爪先き上りに三里の登り道、碎石の角突き出して嶮しき中に、小砂利の鋭きやつが、王子様のゴム底の下から、御み足にチク〳〵御痛みを送る。恐多い事ではあるが、是が爲に王子様の御み足は、右の親指の爪を悉く御痛めになり、後日に至り御肉付きの爪が御指先きの半からとれてしまつた。

其御痛みは又格別で、一層裸足々袋を脱いで、御捨てにならうかと御思召た事も、一再ではなかつたが、代りのお履物を御用意してなかつた爲めに、夫れもならず、とう〳〵山を御下りになるまで、何とも仰せられずに御辛棒遊ばされたのは、誠に恐懼をく所を知ら

ぬ次第であるが、前驅後從を初めとして、誰れ一人恐多く感じた者の無かつたのは、無禮の極みである。

況んや王子様が、御苦痛の間にも、尙綽々として餘裕を御示しになり、

山みちや誰れがすてたか花の束

猪は留守なり萩は花盛り

山深く人や住むらし紅の花

などと天下の御名吟を連發なされても、誰れ一人御感服申上げる者の無かつたのは、返す〳〵も恐懼の極みではあるまいか。

御汗だく〳〵として全身を汚し、赤城三里の登り坂をお越えになつて、鳥居峠をお登り詰めになると、靜かなる事眠れるが如き大沼が見える。王子様は、クレヨンと寫生帳を御出しになつて、此美しき景色を、紙の上へコスリ付けて御出でになる。餘り御永いので、前驅のCや後從のS子は無作法にも大欠伸をして居る、王子様の御丹精を拜しても、一向

感服した様子もなく、御天才的御藝術で、誠に恐入りましたとも何とも言はない、何と無禮な奴ではあるまいか。

漸く一枚の寫生を御すましになつて、徐ろに歩を大沼の方面に運ばせられ、〇〇屋と云ふ木小屋の様な粗末なホテルに御投宿遊ばす。ホテルの亭主と云ふは、三十五六才になる一寸高襟な運動家らしい男で、ホテルの前には不完全ながら、テニスコートが二つ並んで居る。土間には大きな圍爐裏が有つて、其前に運動ジャツの様なものを着て、大胡座をかいて居た亭主は、

『ヤー御出でなさい！』と挨拶をする。

王子様も仕方なしに、一と晩頼みますと、平民的な挨拶をなされ、先づ何より先きに、裸足足袋をお脱ぎ捨てになると、右の御み足の親指は、眞黒に生爪の下に血が滲んで居る、バケツの水で御み足を御洗ひになつて、やれ〳〵と上へ御上りになる拍子に、ハツ！、と一發。畏くも黄金の玉を御落しになると、一陣の臭風之に伴ふ。無禮にも山家育ちの賤の

女が手の甲で口を押へて、ホ、〳〵と笑ふ。是はしたり、前驅後從の兩人迄、無遠慮にもアツハツハーと大きな口を開いて笑ひこける。そこで乞食の王子様は忽ち一平民と成り下る、ヤレ〳〵。

女中の案内で貧弱なる八疊の間へ這入らうとすると、暗い廊下の方から褞袍を着た背の高い、髪を河童の様に刈込んで、採上げを馬鹿に高く剃落した工合、何處か見知り越しな顔だと思つて見ると、向ふから、ヤアーと聲をかけられた、後ろには一寸小粋な細君らしい人が立つて居る。

成る程判つた、Y君といふ洋畫家で、四五日前から避暑を兼ねて寫生に來て居ると云ふ。世間は廣い様で狭いものだ。此淋しい赤城の山で、知人に遇ふとは思はなかつた。

やがて女中の運んで來た夕飯の膳に向ひ、沼の魚や、罐詰物の貧弱な料理で、腹をふさぎ、外は未だ明るいので、浴衣に着換へて散歩に出かける。十五六間先きの雜木林の中には、粗末な一軒の木小屋が有つて、其處には露西亞人が一人滞在して居る。如何なる種類

の男か聞いても見なかつたが、食料品や飲料水などの供給を此の宿屋にあふいで居る。片言の日本語を、覺束なくも饒つて、滑稽な身振り手振りで人を笑はせて居る、此の淋しい異郷の山中に遠く赤い故國を離れて一人住む、抑も物ずきか不運の亡命兒か?、但しは深く野心を包藏して風雲を待つ曲物か、などと餘計な事を考へて見る。

十數歩にして赤城神社がある、風雨多年大分荒れ果てゝ居る。其昔、塚原小太郎や、樋口十郎左衞門等といふ劍客が、刀法の妙技を鬪はしたと云ふ有名なる神苑であるが、今は武藝も衰へて、詣づる人も少なく、自然のまゝに神さびて居る。大沼は大小の峯に取りまかれて、水晶の如き水を湛へ、綠滴たる山の影を逆さまに寫して居る。汀に乘り捨てた小舟が三艘程、人の使ふに任せてある。

試みにS子を乘せて手頃の板を取り、水をかいて見る。鏡の如き水面は波紋をゑがいて舟は靜かに動き出す、透き通つた底の見える樣な水をすかして見ると、小魚の戯れて居るのが見える、四面寂として鳥聲も人語もない。

紛々擾々たる都の巷を捨てゝ、此仙境に入れば、俗人と雖も亦心機一轉せざるを得ない。王様も平民も金持も乞食も、一切平等靜寂の幕に包まれて、大自然に歸するを得る。

フト赤城神社の老杉を見上ぐれば、一抹の霞がスーツと一と刷毛現はれたと見る間に、一段々濃厚になつて、空にはただならぬ黑雲さへ天の一角を覆ふて氣のせいか、生ぬるい風さへ吹き初めた。

はて天氣が變らぬばよいが、……どりや宿に歸つて、此水晶を湧かした風呂へでも浸つて、俗塵を洗ひ落し、天に昇つた夢でも見ようか。

怪し氣な板の間を踏んで、薄汚ない風呂場に浴衣を脱ぎ捨て、風の吹き廻しか減法煙たい風呂に顔をしかめて浸たる。如何に水晶をとかした樣な水でも、かう小汚なく取扱はれては有難くない。

窓の外を眺めると、ポツリ〳〵雨さへ落ち初めて、空は愈々墨を流した樣に變る。風は段々加はつて雨は益々烈しい。靜寂仙境の如き場面は、忽ち一變して惡魔襲來の場面とな

りさうである。

先づ今日は早寢と極めて、八時半といふに枕かついで横に立つ。臥床は變る旅枕、窓外の風雨益々加はり、怪し氣な木小屋は、風を孕んで今にも舞ひ上るかと怪しまれ、山堂夜半夢結び難く、千叡萬峯風雨の聲といふ光景である。

となりはと見れば、前驅のCも後從のS子も口をあいて既に鼾の聲が高い。彼等は未だエンジェルである、僕の如き外道が仙境の神聖を犯すから、神の御怒りに觸れて此樣な目に遇ふ。マヽヨと思ふ中に……ムニヤ〳〵〳〵。

フト眼が覺めて見ると、相變らず烈しい吹き降りで、部屋の中迄濕つぽい、此分では今日一日降り込められて、下山の程も覺束ないであらうか。女中に聞けば、今里から來た人の話に、谷は激流となり道といはず澤といはず、烈しい流れと變じて通行危險とある。いや早や弱き者よ汝は人間である、況や後從のS子は今年十五歳の少女である。

海苔と鷄卵と味噌汁で朝飯がすむと、新聞が有るではなし、雜誌が有るではなし、話相

手はCとSで、格別時間を潰す程の話題もなし、此の雨では寫生も出來ず、全く世間と絶緣して、玆暫らくはロビンソンの樣な氣になつて見る。成つた處がどうにも仕方がないので、ついゴロリとなつて、天井の棟木の歪み方を眺め、裏板の節穴を數へ、蜘蛛の巣を氣にして見たが初まらぬ。外では嵐の畜生、尙未だ盛んである。起き上つて帳場の前の圍爐裏に腰をかけて、同宿の甲乙が皆此天氣に運動は出來ず、外へは出られず、家の中は陰氣だしなどと愚にもつかぬ話を聞いて居る。中には今にも拔け落ちさうな板の間で、飛んだり跳ねたり、キヤツチボールなどやつて居る學生もある。やがて外からズブ濡れになつて、飛び込んで來た旅人が

『嗚呼非道い目に遇つた！、少し休ませて下さい』

と裸になつて着物を絞り、圍爐裏の前で尻を焙つて居る。聞けば途中は大分危險な樣子である。

兎角して風は次第に靜まり、雨は止んだり降つたり、稀には雲の切れ目から、チラ〳〵

太陽の光が見え初める。此分なら午後には下山も出來るであらう、山中で降り込められる位ゐ惨めなものはない。一時も早く桐生へ下り、雷電山のガーデンで都から御持參の美酒でも酌んで、野人を相手に罪のない話でもして、野趣を滿喫するが上分別と考へた。晝飯がすんだら、直に出發の用意！と前驅後從に命令を下す。

赤城の震動

やがて出發の用意が出來て、晝飯の膳に向ひ、箸をとるや否や、是は又如何なる事ぞ、ドスン！と計り異樣な音がして小屋が持上つたかと思ふと、忽ち大搖れにギー〳〵上下動と水平動と交々搖れ初めた。天井裏を見上げると、棟を組合せた縱横の木材が、口を開いたりふさいだり、今にも外れて落ちはせぬかと怪しまれた。

『それ出ろ！』

と、三人等しく帳場の前へ駈けて來ると、皆既に外へ飛び出して、茫然として驚いて居

る。

其中に第一回の震動は止んで、ぞろ〳〵家へ這入つ來る。同宿の相客異口同音に生れて初めての大地震であると恐れをなし、多分近く搖れ返しが來るであらうと噂をして居る。其中に果せる哉、又々前と同じ樣に烈しく搖れ出した。

此處で潰されたら始末が惡い。

雨は小降りだ夫れ飛び出せ！、

若干自尊心を傷けられる樣な心地はしたが、下駄を突かける遑もなく、前のテニスコートへ飛び出した。

其後三四回、或は烈しく或は緩く、屢々膽を冷やさせたが、結局家も潰れず雨も止んだので部屋に歸り、喰べかけた晝飯を詰め込んで、長居は無用今の中にと、勘定をすませて怪しげな空を望んで、厩やな裸足足袋を再び穿きしめ、着莫蓙を羽折つて、手拭を衿に卷き、古パナマを阿彌陀に戴いた格好は、大した王子樣が出來上つたものだ。

今一度赤城神社に參拜する。昨日迄何百年來嚴然と苔蒸して、型も崩さかつた石造の獻燈は、さきの地震で石垣が崩れて、臺石諸共前に倒れて、哀れな樣になつて居る。

震源地はどの邊か、各地被害の狀況はなどと考へて見た處が、斯う浮世とかけ隔つて居ては一切萬事知る由もない。

足を速めて鳥居峠を下り、羊腸たる山路の曲折を滑りつゝ下る。夜來の雨を集めて臨時に出來た溪流は隨所には現れて、或は瀧の如く横樣に道を乘り越へて、傍らの斷崖に飛び込み、或は脛を沒する深さに急流をなして、岩角を嚙みつゝ走る。浮かゝすれば足を取られる。

其中に通り雲が、又パラ〳〵と時雨を叩き付けて去る。昨日は急流の中に背を現して居た石　石を飛び〳〵に渉つた谷川も、今は飛び石が悉く水の下にかくれて、矢を射る如き急流と變じ、物凄き泡を飛ばせて居る。

先づ前驅のCを先きに渉らせ、各自の紐を解いて合せ、後從のC子を中に狹んで其紐を

握らせ、杖を突張らせて萬一を警戒せしめた。

山國育ちのS子は、存外勇敢に平氣で此急流を越して了つた。先づ安心と最後に自分が渉つて、心にかゝる難所は無事なるを得た。

午後三時水澤の停車場から桐生へ向ふ頃は、一天拭ふが如く晴れ渡り、僅かに殘りの雲が、赤城の山の頂きに二片三片。

遙かに東を望めば、瑠璃色の空に、一團の乳白色の雲が夕日に照されて、オパルの樣に輝き、得も言はれぬ美觀であつたが、不思議な事には、モクリ〳〵と擴がつて、少しも流れず、何といふ美麗な景色であらうと、乘合の客が皆窓から首を出して、感嘆の聲を放つて見とれて居た。豈圖らんや此美しき入道雲の下では、東京の市中に於て前代未聞の慘事が展開されつゝあるとは、神ならぬ身の誰れか知るべき。

桐生の宿

疲れた足を引いて桐生の宿に歸り、一と風呂浴びてよい氣持ちになり、濡れ手拭をぶら下げて裏の田圃へ出て見ると、流石に稻の浪を越へて來る風は凉しい。

何やら大勢人立ちがして、東の空を眺め、がや〳〵噂に華が咲いて居る。見れば東の空は眞赤に燒けて、物凄い迄に照りはえて居る。足利あたりの大火が空に映じて居るのではあるまいか?。宿に歸つて、足利の親戚へ電話をかけて見る。極めて無事であるといふ。夫れなら東の空の非常に赤いのは何の爲かと聞合せると、確かな事は判らぬが、今東京は大火であると言ふ專らの風聞であると云ふて來た。はて、東京の火事が桐生から見えるかしら……。

さのみ氣にもかけず、至極呑氣に夕飯を了へ、雜談に夏の夜は更けて行く。

ふる里に昔を語る一夜かな

梅酒飲め卵も喰へと暑さ哉

町の夜は蛙の聲に更けてゆき

警察署から、御主人に一寸御出でを願ひたいと使が來る。何事か?と主人は前かき合せて出て行くと、入れ違ひに三越出張所長のF君が來た。

聞けば東京市中は今大火で、三趣も類燒し、然かも其火が宮城に飛んで、恐多くも宮城の一角が燒けつゝある……と、途方もない噂さである。

眞僞の程は判然せぬが、何分電話が不通であり、甚だ不安である。何としたものかと相談に來た。三越の建築は現代科學の粹を集め、鐵骨鐵筋コンクリートの建築で、防火シャターは有り、スプリンクラーと稱する自働消火設備も完備して居る。我等の金城鐵壁と頼む處のものである、外の事ならイザ知らず、火事なら大丈夫心配する事は萬々あるまい、」先づ靜かに樣子を見る事だと僕は主張する。F君も成る程と安心して歸つて行く。僕は先づ萬事明日の事と寢てしまふ。

ウツラ〳〵して居ると、主人が歸つて起しに來た。僕が今起きた處が仕方もあるまいと

は思つたが、漸々起きて店の方へ來て見ると、此夜更けに新宿から大澤兄も來て居る。聞けば警察からの知らせに、東京は本日正午の大地震に次で火災四方に起り、今尙大火の眞最中、而も市中大半延燒して手の下し樣もない、地方の官權に對し、出來る丈けの援助を需めに來て居るといふ。中々以て是は容易ならぬ火事と、僕の心も稍々動いて來た。

三越の方は金城鐵壁、必ず難を免かれて、天晴れ現代科學の威力を發揮する事であらうが、拙者の御殿、いや邸宅、ウム住宅、マアお長屋の方かな、兎に角其方はボーッと近所から赤い風が吹いて來た日には問題ではない。殊に七十餘歳になる此家の老母堂と、七十四歳になる拙者の母親と、十三歳を頭に六人の子供が、不安に惱んで居るであらう。

いや既に燒出されて、路頭に迷つて居るかも知れぬ、是は斯うしては居られない。あすは早く歸るととしやう、行ける處迄は汽車で行き、夫れから先は足に任せて。さう決心すると原勢も、僕の家に滯在中の老母が心配になる、大澤も共に行くとある。多々益々結構、さらば三人一緒に打連れて參らうず。

火の都

翌日はズボンの上に、昨日山登りに用ひたゲートルを卷き付け、カンガルーの老人靴をはきしめ、ワイシャツの上に、例の羊羹色のアルパカを一着なし、古びたりと雖もパナマを戴き、町の藥屋で寶丹、仁丹、ビオフエルミンなど若干の藥を買ひ調へ、百圓札を小錢に崩して胴卷に捻じ込み、ステッキ一本を携へ、一切の手荷物を殘して、三人身輕に出發した。

桐生の停車場で樣子を聞けば、汽車は板橋驛迄開通して居るが、地震の爲めに赤羽の鐵橋が彎曲して汽車不通、夫れから先きは皆目判からぬとある。兎に角先きはさきとして、板橋驛迄切符を求め、三等客車にゴチヤ〳〵と乘込む。乘合客の噂は想像に臆測を加へて何が何やら知れたものでない。僕は兩眼を閉ぢて、是から先きを如何に處すべきかと考へに耽ける。全身に注意を集めて、萬事手ぬかりのない樣にと冷靜に思案して見る。

やがて列車は小山驛に着き、此處で乘換へを要する。プラットホームに下りて見ると、見舞の人やら彌次馬やら、東京に向つて人の浪が押寄せやうとして居る。フト傍らを見ると、辨當屋が山と積んだ折詰めを肩から下げて、辨當！壽司！と聲を枯らして客を呼んで居るが、群集は只前へ前へと氣をとられて、顧みる者もない。

僕はフト考へた、東京では定めし食物に窮して居る事であらう。家でも無事なら左のみではあるまいが、若し燒け出されて居た時には、愈々以つて困難だ、我等自身と雖も亦相當に食ひ繼ぐ覺悟を要する。是幸ひと三人で背負る丈け、壽司や辨當の折詰を買込んで行く事にした。

やがて汽車を板橋の驛に乘り捨てた時、傍らの線路には、東京からの避難民やら、荷物やら、疲れて線路枕に横たはつて居る者もある、そろ〳〵光景が眞劍になつて來た。

汽車で渡れば、何の雜作もない鐵橋であるが徒歩で渡つて見ると、箆棒に長い。此長い赤羽の鐵橋が、弓の様に彎曲して居る。如何に地震の震度が強力であつたかゞ想像せられ

て恐しい。レールの枕木の間から、脚下を見下せば、利根川の清流間い遙かに渦を卷いて、藍を溶かした様に青々と淵をなして物凄い。原勢は大兵肥滿な體格の持主であるが、念流の劍客、竹刀で鍛へ上げたるだけに身もかるく、曲りくねつた枕木をヒョイ〳〵と小きざみに渉つて行く。僕も元來身輕に出來て居て極めて輕快であるが、三人の中大澤だけはさうは行かない。脚下の深く青い流れを見ては、足が竦んで動かれない。然しグズ〳〵して居ると、後から後からと押し寄せる群集の邪魔になる、僕等は先づ此の長い〳〵鐵橋を渉り終つて、大澤を待つ。然し待てど暮らせどやつて來ない、引返して見に行くも困難であるし、聊か案ぜられもする。とつ追ひつ小半時程すると、ハア〳〵言ひながらやつて來た。

彼は下を見ると恐しいから、足許だけを注意して、そろり〳〵這ふ様にして來たと云ふ、やがて三人打連れて、赤羽の停車場に來ると、避難者は一層悲慘である。老いたる者幼き者、傷付たる者、眼の色かへて誰れやら探し求めて居る者、失望落膽見るも氣の毒な人、

一々擧ぐれば際限もない。

列車は線路に止まつて居るが、何時發車するとも定まらぬ、何れ東京に向つて何時かは出るものと思はれる。最早切符を買ふ者は一人もない。ズン〳〵乘り込む、僕等も程よい處に座を占めて、氣永に發車を待つて居る。如何に氣永に待つても、何時か發車するものなら歩いて行くより早いに相違ないと見當を付ける。

僕の隣席には今朝東京から來て、又再び東京へ戻るといふ、三十才前後の會社員風の人が居た。其人の目擊談を聞く、是は比較的確實と思はれる。

其人の曰く、下町は大方全滅であるが、山の手は無事な處が多いと云ふ。山の手が無事とすれば、拙者の家も或は難を免かれたか、夫れ共西洋間は去年新築したばかりで、聊か頼みになると思ふが、日本屋の方は既に十四五年前の建築であり、殊に二階はよく搖れる家で有つたから、或は潰れたかも知れぬ。甘く逃れて居れば、今頃は洋館の方で雨露を凌いで、僕の歸りを待ちこがれて居るであらう。それより平塚へ避暑にやつて置いた老母と

子供等三人は、今東京に戻つて居るやら、未だ平塚に居る事やらと、心配すれば限りもない。

その人は三越に火の這入たのは確實で、自分は親しく目擊したと言ふ。然し自分は例ひ火は這入つても、スプリンクラーが働くから、部分的の損害は有つても、全滅などの心配はあるまいと未だ自信が有る。兎角して二時間の後、列車は徐々に動き出した。夫れでもどうやら日暮里迄辿り付き、是から先へは危險で行けぬとある。途中迄例の會社員に案内せられながら足を早めて、段々東京へ近付く。此邊は大した損害も無いと見え、倒れたる家もなければ、大破したる跡もない。心ある人の家の前には、水を汲んで置いて、通り行く人の飲むに任せ、麥湯など出して置く家もある。

非常の時に當つて發露する人情の美は又なく嬉しいものである。

流言

何を怒るか若き人々の騒ぎ罵る一團が、何か頻りに探し求むる樣子であるが、其又後からはたゞならぬ顏色物凄く、木刀提げた自髯の老翁が、腰は梓の弓と張れど、塚原卜傳是に在りといひた氣な面構へ、物々しなんどいふ計りなり。

何事かと聞いて見れば、此天災に乘じて不逞鮮人の一團が各所に出沒して、或は井戸に毒藥を投じたり、家に火を放つて內亂を企つるといふ。然かも夫れらしい怪しの曲者が今近所にかくれたとある。さりとは早手廻しな事ではある、眉唾ものよと思ふたが、今はそんな事に掛り合つて道草喰つては居られない。

途上の風說と聞き流して急ぎに急ぐ。兎角してどこをどう廻つたか、何時しか案內の人に別れて、小石川の砲兵工廠脇に出て來た。見れば流石に廣い工廠も無慚に燒け落ちて、煉瓦と鐵材の殘骸を留めて、殘火の煙りが尙ほほそ〳〵と立登つて居る、飯田町や三崎町の方面は只見る荒凉無限、昨日に變る哀れな有樣、正視するには忍びない。

飯田橋附近も大分類燒して、線路の上には電車が數臺連らなつて燒け失せ、鐵材の土臺

と車輪のみ殘れるも哀れである。筑土八幡に寄る方面は火災を免かれて、段々神樂坂方面に登るに隨つて被害も少ない。稀れに立ち朽れ同樣な古い家が、醉ひどれて人に寄りかゝつてをる樣に、隣家にもたれかゝつて突かい棒に支へられ、僅かに倒壞を免かれてゐるもある。

電車の線路には、下町の避難者が疊を敷き、戸板を圍ひ廻らし、燒け亞鉛の板など日除けにして、手荷物を中に納め、蒲團を敷いて假りの住宅を形ち造り、昨日來の疲れを休めて居る、恰も臨時に仲の町が出來た樣に、ヅウツと何處迄も續いて居る。

鮮人出沒の噂は此處にも不安の空氣をみなぎらせて居る。

家內安全

此樣子なら僕の家も助かつて居るであらうと、一同聊か明るい感じになる。段々若松町に近付くに隨つて狀態が宜い。得たりと心も勇み立ち、踏みしめる足も宙を飛ぶ樣に、我

が家の門の前に立つたのは、其の日も既に落ちて、黄昏の夕闇、灯火もなき家内は靜まりかへつて音もない。ハテ誰かやられたかなと、先づ胸は踊つて神經過敏になる。

ガラリと玄關の格子を開けて皆無事かッ?と怒鳴つて見る。其の聲を聞き付けて、走り出たのは揃ひも揃つて一人の負傷者もない。

やれ〳〵、一時に重荷がガラリと下りた。

然し聞けば三越は完全に燒け落ちたとある。

そんな筈はないと思ふが。

偖て……あすは何としやう?。

保險は充分付けて有る……。

何とかなるであらう……。

三人草鞋を脱いで上がる。壁に若干の龜裂が出來た位ゐで、瓦一枚落ちもせず、牛込方面は地山の上に位ゐしてゐた爲か、被害の最も少ない處で有つたのは、偶然ながら仕合せ

であつた。

停電、斷水、瓦斯、電話總て不通、あらゆる人間の建設したる文明の利器は、天變の一震に奪ひ去られて、原始時代の狀態に歸る。

而も餘震屢々襲ひ來つて、家の中は危險とある、前の空き地に戸板を並べ、夜は其上に布團を敷いて寢るといふ。幸な事には殘暑が永く續いて、今年に限つて寒さが餘程遲かつたのは不幸中の幸ひであつた。取分け僕にとつて好都合であつたのは、母親が七十四歳の老軀に、十三を頭に三人の孫を連れて、平塚の海岸に滯在して居たのが、先月限りで切上げて、丁度戻つて居た事であつた。

是で家族の方は一と先づ安心であるが、あすは早速店の方へ出かけて、善後策を相談せねばならぬ。眠れぬまゝに近所の人達の話をきゝながら空を仰いで枕につく、蒸暑い晩である。

ブーンと蚊がたかる、ピシヤンと横面を打つ。隣りの戸板に野宿して居る連中に、一人

科學者が居るらしい、落付いた調子でボツ〳〵話を進めて居る。

『諸君、今度の地震は震幅百八十粍と云ふ事で地震としては安政以來の大震であるが、僕等にはもつと大きな心配が有るのサ、是はね、高が極東日本の一小部分に起つた小さな現象なんだよ。少しく宇宙の大觀に眼を注けば未だ〳〵寒心に堪へない事がある。遠き他の恒星に起る問題は別として、近く吾人の生活して居る地球の大陸は、ある學者の說によると、バサルトの海に浮いて居る……。

エツ、バサルトといふのは、丁度玄武岩の樣なもので、今は幸にして冷却硬化して居るが、刻一刻と溫度を加へつゝある。之がやがて熔融點に達すると、地球全體に大變動が起る。此バサルトといふ物質中には、ウラニユムとトリウムの二元素が含有せられて、アトムの核から絕へず小さな物質を發射して居る。かくしてエネルギーと熱とが發散される。此働きに對しては、人間力など何の働きもなし得るものでない』

今でもバサルトが熔解して、地球の表面に流れ出すのを屢々見る。之をラヴア(熔岩)と

呼ぶ。布哇の噴火口から流れ出して固まつたのが、龍に似て居るからとて、ラヴアドラゴンと云ふて居る。

かくて此バサルトの海が、熱を受けて熔解し、液體化する時、煮えくり返へる自熱の液體岩の上に乘つて居る大陸は、必ずバサルトの海中にめり込む事になる。大陸が下降して海洋が下降しなければ、大洪水が起る。此大洪水は、過去に於て已に六回起つて居るが、將來も亦起る、かくて地球の表面は異狀な膨脹によつて張り裂け、海底より自熱の液體岩が流れ出すであらう……』

『君一寸待つてくれ。一體其バサルトが液體化して地球に大變化を起すのは何日頃の事かね?』

『さア、夫れはね、一グラムの岩石が一秒毎に十萬億分の三カロリーの熱を發するといふ計算からすると、先づ三千萬年位ゐ後の事であらう』

『ヲイ〳〵閑話休題、それは一寸俗界の事ではないよ』

『ワツハツハツハ——』

九月一日

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如一大强震は震幅百八十粁とあつて安政以來の大地震、關東の天地を震駭し、鐵骨もコンクリートも物かは、地上百尺の七階は激浪に飜弄せらるゝ汽船の如く、つり下げたる電灯のグローブは、天井に衝突して粉碎し、硝子のケースも棚の商品も、皆床上に倒壞散亂して危險いふべくもあらず、數千の顧客、周章狼狽先きを爭ふて階下に殺到し、下足をとるに遑もなくして店外に飛び出す者、地下室の下足場に押し合ひ揉み合う者、雜踏織るが如き中に、店員の心きゝたる者は、聲をからして、此建築の安全なるを叫びて、喧傳しつゝ店内を巡る。又ある者は顧客中に負傷者もあらんかと、繃帶藥品等を持ち廻りたれど、幸ひにして一人の負傷者もなく、一同無事に退店せられたるは、誠に不幸中の仕合せと感謝する所であつた。

屋上に登つて遙かに市中を展望すれば、各方面にボツ〳〵火災起り、店員各自の私宅もそれ〴〵案ぜらるゝ狀態となり、婦人店員の如きは、續いて襲來する餘震に生きたる心地もなく、恐怖して爲す處を知らず。

幹部は忽ち臨時集會して、議一決し、一と先づ店内を整理して午後三時閉店休業、一同歸宅せしむる事となる。此日の宿直長は、加藤氏に當りたるが氏は、近頃入店して未だ店内の事情に精通せず、非常の場合に臨機應變の處置は困難なるべしと聊か不安を感じたる幹部は、物馴れたる島田氏に臨時應援を命じてを後事を託す。

去る程に、本所、深川、淺草、下谷、京橋と各方面に起りたる火災は、水道斷水の爲めに益々猛威を奮ひて延燒擴大し、飛び火は更らに飛び火して停止する處を知らず。午後八時に至りて、瀨戸物町塚本合名會社の近邊に火災起り、特に三越のギヤソリンポンプの出援を希望し來る。警防長土田氏は重役の許可を得て出動し、消火の應援に努めたれども力及ばず、遂に防ぎ得ざるものと斷念して引揚げ來る。

既にして八時半に及んでは、猛火愈々四隣に迫り來つて、到底宿直員の店内に踏み止まるを許さず、周圍の出入口を鎖し、各々身を以つて逃る。此時宿直員等は、本兩替町より西河岸通りに出れば、旋風砂礫を飛ばして面を向けん樣もなく、各々上着をかぶつて走り僅かに呉服橋を渡つて逃るを得たりといふ。

隣家高松屋は九時半に類燒し、續いて南館と本館との間に介在せる木造館に延燒し、夫れより更らに南館及東館に及ぼせるもの丶如し。斯くて我等の金城鐵壁と賴める、三越の全館は、鐵骨とコンクリートとの殘骸を止めて、烏有に期せしこそ恨みなれ。

食料問題

殘存の米鹽が段々缺乏して來る。

米の配給は震災直前愛護會の購買組合に賴んであつたが、配達の途中に於て大地震に遭ひ、僕の家へ屆かぬ中に何れへか消えてしまつた。據ろなく、近所の米屋へ買ひにやつて

見たが、平常の御得意樣以外には賣れぬとある。

此方の問題も何とかせずばなるまい。あすは早く起きて、先づ食料の買ひ集めを先決とすべく、萬感交々眠られぬ枕につく。

翌朝は早く起きて、水を先づ向ふ隣りの緒方さんの井戸へ貰ひに行く。既に先客が大勢待つて居る、平常は顧みる者もなき此深井戸も、今日は水道斷水とあつて大繁昌、終ひには井戸水が涸れるとあつて、鍵がかけられ、自由に使用する事を許されなくなつた。

今朝は昨日小山驛で買求めた辨當の殘りで、僅かに朝飯をすませ、ズボンの上に例のゲートルを捲き付け、ワイシャツの上にアルパカを一着なし、胴卷きに小錢を捻ぢ込み、女中一人を從へて大久保の通りへ出かける。蓋し濱田常務を訪ねる途中、食料品を買へる丈け買ひ求めて、喰ひ繼く工夫をせねばならぬと考へる。道〳〵喰へる物は何でも買ふ、ビスケットよし、小麥粉よし、罐詰よし、蓄へ得る物は豆でも乾物でも、手當り次第買ひ込んで、女中の風呂敷に包み持たせて家に歸へす積り。

然し適當な物は少なく、各店共に賣り惜しみして中々要求に應じない。未だ此邊には何か若干あるが、市中には殆んど賣る者はない。斯うなれば、金は遣ひたくも使ふ事が出來ぬ、貧富平等である。

一と先づ女中を家に返して、濱田氏を訪ねると、店の自動車が門前に待つて居る。自動車は其速力を利用して火災を免がれ、一臺も燒いたものは無かつた、是は後の活動に非常なる助けとなつた、是なかりせばあの當時、手も足も出ないのであつた。

既に中村氏が來て居られる。段々話合つて居る中に、地震に對する火災の損害は、保險會社で一切責任を負はぬ條項があるといふ。平常無關心で氣が付かなんだが、一大事に陷つたものである。

彼れ是れする中に飯野氏、山口氏など、近所の居住者が追々集まる。そこで一同自動車に乘り込み、打揃つて本郷の青年寄宿舍に向ふ。蓋し本店も丸の內別館も燒失したが、本郷の寄宿舍と青山デポーは類燒の難を免かれて居る。そこで本郷の青年寮を假事務所と定め、一切の命令は此處に發し、毎日重役會は此處に開かれる。

然し交通不便の折柄とて、何時に集まるとも定まらぬ。それは物狀騷然として、未だ何等の秩序もなく、市內で燒け出された店員の家族の避難者は續々詰めかけて、落付いて相談すべき部屋もない。

是等の避難者に供給すべき食料もない。

燒け跡

僕は兎に角、一應本店の燒け跡を訪ふ事にした。行く〳〵本郷の高臺から下町を見渡せば、何と慘澹たる有樣であらう、總ての木造建築を初めとして、樹木電柱悉く燒け盡して灰となり、其間に蟲々と亂杭齒の樣に取殘された、煉瓦やコンクリートの建物が、骨だけ殘つて幽靈の如く立つて居る。外見異狀無ささうに見える土藏の窓から、プス〳〵黑い煙を吹いて居るも哀れである。大通りは燒け切れた電線が算を亂して散らばつて居る。

赫々たる炎天一滴の水もなく、殘火のほとぼりを加へて熱い事夥だしい。

お茶の水橋は半燒けの穴だらけ、之を僅に打渡つて駿河臺から濠端に出る。龍紋の氷室は、倉庫の外面が燒け落ちて、中なる氷が巍然として炎天に光つて居る、通り行く人がぶつかいで渴を癒やして居る、時に取つての助け船、僕も一とかけ失敬して、嚙りながら店へ行く。

右手に見ゆる丸の内別館は、螢籠の樣に骨もあらはに立つて居る。而も正面バラペットの一角、エレベーターのベントハウスは、其重量に堪へず、鐵筋諸共に千切れて、ズドンと許り玄關前に落ちて居る。

本店はと見れば、遠目には何の異狀もない樣である、而も東京中最高を誇る高塔は、舊態依然として聳えて居る。どこか少しは無事なる個所も有るであらうと、段々近付いて見ると、成る程鐵骨錢筋コンクリート丈けあつて、二階のカーテンウォールが、窓と窓との間に、×形のクラックが有る外、さしたる事もない樣に見える。然し內部の燃燒物は、無

慘、完全に燒け盡して一物を止めず。一階西館食料品部の如きは、未だ罐詰食料品が燒けつゝあつて、時折ボン〳〵罐の爆發する音が聞える。

到底未だ足を踏み入れる事も出來ない。前へ廻れば、表玄關に嚴然と下されたシャツターは、燒錫の如く曲りくねつて延びて居る。大理石の柱は色つやも失せて、大きな一片は將に落ちさうになつて居る。花崗石はと見れば、攝氏三千度以上の熱に燒け爛れてビチビチはぢけて居る、嗚呼恐ろしの火災よ。

玄關前のペーブメントには、男か女かも判然せぬ丸裸の死體がローストチキンの樣に、自分自身の油で蒸し燒きになつて倒れて居る、如何に空腹でも是では食慾が起るものでない…。燒け亞鉛の板を一枚其上にかけさせた。

裏に廻れば、建築中の正金銀行の足代が、一部燒け落ちて、他の部分まで算を亂して崩れ、今にも倒れさうになつて居る。近寄る事も危險至極である。又其の下の道端には、是も燒鳥に等しき死體が橫たはつてゐる、大火の瓦斯に窒息して、人事不省になつた處を遠

火でコンガリ焙られて、ローストマンとなつて終つたものらしい。

日本銀行の鐵の扉には、大小三人の立ちすくんだまゝ、燒けたらしい跡が、有り〳〵殘つて居る、親子三人固まつて、最期をとげたものであらう、人間の油が鐵の扉に焦げ付いて、見るも無慚な光景である。

木造館の燒け跡から店内に這入つて見る、既に店員甲乙四五十人、二階三階に悄然として立つて居る、誰れを見ても皆失望と落膽の色を浮べて、力ない挨拶も暗然として居る。貴金屬賣場の長谷川、三浦、河本、などいふ人達も見えて居る。取あへず貴金屬係の人達には其賣場の跡を探して、金銀器の溶解したるもの、銅器其他の地金として役に立つ金になるもの等を拾ひ集め、どこかに物置を作つて仕末して置く樣に賴む。

美術部の遠山、金澤、櫻井等の諸君には陶器や美術品のまだ役にたちさうなもの、彩壺會出品の尙ほ形を存するものなど、取纒めて置く樣に賴む。（震災直前名家所藏の古陶器を出品して貰つて、彩壺會陶器展覽會と云ふのが開會中であつた）

更に歩を屋上に運んで、歪んだ鐵の扉を押し開けて出て見れば、猿小屋や鳥小屋の鐵格子は、舊態依然として居るが、中なる動物は影も形も止めず消え失せて、不思議にも一片の肉塊に猿の毛らしいものが喰付いたのと、鳥の喙らしいものが一つ殘つて居る外一片の骨も見えない。流石コンクリートの上には、動物の油が焦げ付いた樣な跡が見える、彼等のケージの扉を開いてやる餘裕もなかつたと見えて哀れである。

一段高い處へ登つて見れば、ア、何たる光景であらう。見渡す限りの燒野原、煙突の如く立つて居た淺草の十二階は、途中からポツキリと折れてゐる、昨の榮華も一朝の夢と消え失せて何れを見ても涙も出ぬ。

灰　掻

さ

此際大切なるは現金である、出納係の金庫はどうなつたかと來て見れば、二個共壁ぎわに立ち並んで、窓近くにあつた爲め、どうやら火氣を吹き拔いて助かつて居るらしい。貴

金屬部の金庫はと見れば、是も存外無事らしい、何れ機械係の人を探し出して、破壊せしむる事にしやう。

何れにしても、各階は木材の上床を初めとして、造作物や商品ケースの灰となつたもの金物類の半溶解、硝子類のとけ屑やら、瀬戸物の毀れやらが山をなして、流石に足もふみ入れ難い。是は人足を雇ふて灰かきをさせること、裏の空地を片付けて受付のバラツクを建て、何くれと事務を整理する必要もある。何や彼やと思ひ煩らふ事ばかり、一物も殘さず燒け盡したる今日は、僅かに燒け殘りの木片と、燒け亞鉛のナマ子板を以て、不器用な乞食小屋の樣なものをたて、其下に日を除けて、石ころに腰を下す位が精々である。

新らしい材料とては一物もない、兎角して晝も過ぎたが、喰ふべき食物もなく、飲むべき水もない。ポンプさへ働けば、一日三千五百石の水を得べき掘抜きの深井戸はあれど、其動力となるべき電流がない、モーターもポンプも皆燒けて役には立たぬ、嗚呼思へば思へば無いもの計り。

人間の建設したる文化は果敢ないものである。

あすは皆申合せて、鋸、ハンマー、シヤベル、何でも持合せの道具を持參する事、又見付け次第買求めて提供する事、今や喰ふべき物も覺束ない時、さりとは聊か無理な注文である。而も此無理な命令とも依頼とも付かぬ命令を、不平も言はず唯々としてきく。一朝有事の時に當つては、各々犧牲の精神に燃えて居る。

日も西に傾く頃、本部から濱田君が自動車で見廻りに來た、之に乘れるだけ便乘し、外の踏み板から、窓にまでしがみ付いて乘り込む、辨當箱に蠅がたかつた樣である、何せよ自動車の他には頼むべき交通機關はない、取殘されゝば空腹を抱へて、山の手迄は夜が明ける。各自々分の塒に近い處で一人下り二人下り、僕も若松町で下ろして貰ふ、あすは自動車が出かけに僕の角に寄つて呉れる筈。

家に歸れば停電とあつて、眞暗な奥の方に、使ひ殘りの蠟燭が心細くも光つて居る。何やら有合せの食物を、モグ〳〵やつて、僅かに晝食兼夕飯をすませる。

扨あすはどうしてくれやうと、闇をにらんで思案に耽る……。時々ガサ〳〵と餘震が來るが、棚から物が落ちる迄は大丈夫と高をくゝる、大分地震ずれがしてヅウ〳〵しくなる。

武裝青年團

門前で唯やら大勢ガヤ〳〵と喧しい、出て見ると若松町の青年團員とあつて、各々武裝した連中が、肩肘を怒らして、今怪しい奴が緒方中將の屋敷へ多分かくれた樣だ、キツト不逞鮮人に相違ない、此邊は火災を免かれて居るので、火を放つて燒拂はうとするに相違ないとある。

此獨斷的な想像に騷がされて、さなきだに動搖しつゝある人心は一層戰々兢々となる。

日比さんの次男の雷音君は、山岳旅行でもしさうな服裝で、右の手にピストル、左に太やかなステツキを携へて、彼方此方と庭木の間を探して居る。不逞鮮人が出たら、僕が一發の下にヤツツケルと云ふ。間違つた鮮人でも出やうものなら飛んだ災難、かう氣の立つ

て居る時は何をするのか知れたものでない。

幸ひにして鮮人も出ず、負傷人もなしに濟んだ。ピストルの持ち主は、張合ひの無ささうな顏付をして居る、是が張り合ひでもある樣な結果になつたら一大事である。

狂人に刄物……桑原々々。

結び兼ねたる夢に夜は更けて、開け放したる家の外には、虫の聲が悲しい秋の曲を合奏して居る。

カンガルー

短か夜の明るを待ち兼ねて起き出で、風呂桶に汲み留めた水で顏を洗ひ、朝飯の後に今日は晝の辨當を用意し、水筒にはカルピスを薄めて肩にかけ、例のゲートルを卷き付け、カンガルー製の老人靴を穿く。

抑もカンガルーなどは贅澤極まるもので、平常でも餘程の金持ちか、酒落者でもなけれ

ば穿かぬ物で、此燒け原に踏み込むには勿體至極もない事であるが、此柔らかくて工合のよい靴のお蔭で、難儀な炎天の遠道や、毎日の馴れない勞働に非常なる便宜を得た。然し此の上等の靴は、燒け釘や針金の中に踏み込んで外部は傷だらけ、實に二た目と見られぬ迄に無慚に汚なく成つて了つたものではあるが、中は何ともなく、穿いては實に氣持ちが宜い。震災前注文外れの値引物を買つて置いたのが、非常に助けとなつた、平常用ひるにはちと贅澤に過ぎるが、此非常の時には結構なる實用品であつた。

自働車が來たとの報せに早速出かける。

青山本部

本部が本郷寄宿舍では、位置として都合が宜しくないと、今日から青山高樹町のデポーに變つた。

先づ一應本部に行く。

赤坂見附から青山にかけては、火災を免かれて居る。青山通りの金物屋で、シヤベル五丁とハンマー二丁を買込み、又眼鏡屋では塵除け眼鏡を求め、七人の同藝で本店の燒け跡へ自動車を飛ばす。

途中で、ハツト手を擧げて、警官やら軍人やら右に左に飛び附いて便乘する、誰でも殆んど手當り次第である。

中には早くも荷車の上に板を敷き、札を立てゝ上野方面行き一人十錢とやら、極めて簡易な乘合馬車が出來る。誰れを見ても皆土方の樣な風をして居る。妙齡の婦人でも尻を端折つて、白粉など粧ふ者は一人もない、生か死かと眞劍味が横溢して居る。

打てば益々堅く、叩けばピンとはね返す、此意氣を以て、貧富强弱、賢愚老幼、官民上下、一致團結して復興の事に當る、何時かは目的を達せざる事あるべきと思はしめた。

金庫破り

自動車が本店の燒け跡に到着すると、既に先着者が二三十人、中にはシヤベルかついだ人もある。今買求めたシヤベルを、夫れ〴〵手の空いた人に與へて、店内の邪魔になる灰を掻き除けさせる。

今日は福山君や今成君などの機械係が居る、早速地下室から燒け殘りの鑿(たがね)やハンマーを探し求めて、ナマに成つて居る鑿に燒きを入れ、萬事の用意を調へて、先づ先立つ物はお金であるから、出納係の金庫を破る事にした。

猛火の爲めに若干鎔解した扉は、鍵があつても開きにくい。況や文字合せのハンドルなど、右にも左にも動くものでない。鑿とハンマーで要所々々を目がけて强引に打壞す。抑も打破るとなつては、中々以て嚴重なる厄介物である、機械の專門家が小半日も汗を絞つて、やつと開いた。

中は果して吉か凶か？

幸ひにして無事であつた。紙幣、銀貨、小切手取交ぜ六七萬圓、いや是だけでも此際大

助かり。

早速本部から廻してよこした空き櫃に納め、第一便として、責任者をつけて本部へ送り込み、更らに又他の金庫を打破る。

出納係では平常、ニツケルと銅貨は金庫内に納めきれぬ爲め、木造櫃に入れてある。木造の京櫃が燒けた爲め、中の硬貨が崩れ出して、半ばは灰の中でメルトして居る、甲乙丙丁溶けついて、歪んだまゝ算を亂して散らばつて居る。是でも形が現存して居る以上は、此まゝ通用するのもあらう——、秩序が立てば日本銀行で交換もするであらう。兎に角小判の端しだ粗末にするなと、大きな空き櫃に二杯程、叮寧に拾ひ集めて本部に廻す。

やがて他の金庫も開く事が出來たので、是亦前同樣本部に送る。都合二個の金庫に納めた現金が、拾四五萬圓無事に手に這入た事は時にとつて大助かりである。

あすは早速人夫を雇ふて、灰掻きをやらせる事にしやう、本職でなくては拂取らぬ。

南館の計算係の金庫には、賣上げのカードや、總勘定の元帳などが一杯入れてある。觸

つて見ると未だ熱ぼりがあついので、今開くことは危險である。四五日冷まして開いたら或は助かることもあらうかと專門家は云ふ。此方は兩三日待つ事にして今日は歸る。

大阪支店詰めの小田常務と田中君とが、震災直前に本店轉勤と決して居たが、震災と同時に愈々東京へ赴任する事になつた。

今度の地震は東海道沿線を荒らして、小田原から横濱方面にかけて特に非道い。勿論鐵道も不通とあつて、兩氏は中央線により更に兩毛線に乘り換へて東京に這入り、今朝漸く東京に着いた。

重役會の結果、大阪支店と京都支店とに有る現金を、出來るだけ掻き集めて、東京に現送する事に一決し、今着いたばかりの田中君は、再び京阪に引返し、京都、大阪兩支店の現金をリュックサックに詰め込み、屈强なる小使某を護衛として從へ、山岳旅行者の樣な風をして再び本店に引返すと云ふ。

場面は急轉歩で樣々に廻轉する。

整　理　係

今日は本部に行つて見ると、デコ〳〵掲示が張り出してあつて、其前に店員がウヂヤウヂヤ立つて居る。見れば震災前の役付けは此際悉く解職し、必要に應じ、追つて役付けすべしとある。

續いて某々は本部附き、某は會計係、某々は賣掛代金整理係、曰く何〳〵、僕と飯野君は本店燒け跡整理係とある。夫れでなくとも既に毎日やつて居る、さう決まれば先づ不取敢事務所を建設して……と云つたが碌な材料もない、貧弱な木材を郊外から馬鹿な相場で買集めて、型ばかりのバラックを建てる。本郷寄宿舍から卓子、椅子等を取り寄せて、大工の下小屋然たる事務所が出來る。

是でも燒け野原には金殿玉樓、結構上等である、以て風雨炎熱を凌ぐべく、帳簿を整理し諸道具を納むべく、來客に應接し事務を處理し得べく、湯を沸かして食事を爲し得べ

く、夜は宿直を置いて寢泊りせしむるを得べしとでも言つて置かうか。

能書きは先づ其邊に止めて置いて、今日は貴金屬部の金庫を開いて見ねばならぬ、機械係を督して開函に取りかゝる。

元來此金庫は輕量にして防火用ではない、或は全滅かとも氣遣はれた。是も亦三四時間を要して開いて見る、內部の桐箱は悉く眞黑に焦げて炭になつて居るが、焦げたといふだけで燃燒しては居ない。抽斗の中に敷いてある天鵞絨などは完全なる部分もある。然し非常なる高熱の爲めに、眞珠や翡翠などは悉く色を失つて、一文の値打ちもなくなつて居るが、貴金屬類やダイヤモンドは、流石に何の變化もない。お蔭を以て大部分は助かつて居る、是を取纏めて金銀塊や銅器と共に本部に送る。

目ぼしい物は大概拾ひ集めて全部灰掻きとなる。先づ營業部に僕の机を置いた處を見る此處を金城鐵壁と賴んで、家に置くより安全と思ひ、あらゆる有價證券や預金の通帳、實印とを納めたる机、今は何一つ形を存した物はたく、僅かに床の上に、五十錢銀貨が三個

と白銅が二三個、それでも現形を止めて灰の中に落ちて居る。蟇口の口金らしい物も見える、金は記念に拾ひとつたが、外には何一つ見當らぬ、火災は全く徹底したものである。

防火建築

抑も我等の金城鐵壁と賴んだ此建物が、現代科學の粹を集めた鐵骨鐵筋コンクリートの防火建築が、スプリンクラーといふ自動防火裝置さへ備へた此建物が、なぜかう脆くも燒失したのであらうか?、段々當時の有樣を聞いて見ると、先づ第一の激震に於て、地下室から一階に立上つて居たスプリンクラーのメーンパイプが、バルブのエルボーの處からポキリと計り折れて了つた。此處では既に百ポンド以上に壓力の加つて居る水が、折れた處から、流れを千仞の谷に決するが如くに噴出して、七千ガロンのタンクの水が滔々として地下室に流れ込み、數萬圓を投じたる文明の消火設備は、其建築の當時、徒らに工事の進

行を妨げたるのみ。而も此大火災に對して、一滴の水をだに注がざりしのみならず、地下室を洪水の如く浸して、進退の自由を妨げ、後に全館類燒したる時には、此水が逃げ場所なき爲め、蒸氣となつて爆發し、一階の床を吹き上げて破壞を助くるに至つた、何たる皮肉な事であらう。又第一震と同時に、防火シャツターのレールが歪んで、途中迄下りたシャツターが閊へてどうしても下りない、止むを得ず其まゝにした個所も有るといふ。更に激震と同時に各所の電線が切斷して危險の狀態となり、遂に停電の止むなきに至つた水道も亦根幹に破壞の個所を生じ、是亦斷水となつたのである。

東京の火災をして斯く大いならしめたのも亦此斷水が大いなる原因となつた。各所に火災が起ると同時に三井銀行のコ形を成した廣場は、三越と相對して、絶好の避難所と思はれ、群集は各々荷物を運び來つて、薪なき處に薪を積み重ね、更らに類燒の原因を作つたのである。

全市に亘る火災は、市街全體の空氣を瓦斯體となし、一片の火の子が落下しても、直にボ

ツと火がつく、之を消すと更らに火の子が飛んで來る。遂に燒ける道理のない筈の日本銀行も、三井銀行も燒け落ちて、獨り我が三越のみ全かるべき道理がないとある。

夫れもさうかな……。

品川町に面して南館がある、間口三十間、奥行七間の細長い建物であるが、將來は本館と接續する積りで、柱間も構造も本館と同樣に出來て居る。然し品川町は一層地盤が惡かつた關係上、災害の程度は本館より更らにひどかつた。屋上のスラブは、梁間々々に龜裂を生じ、火災の爲めに防水のアスファルトは流れて、五階の天井に迄垂れて居る。

計算係りの賣掛けカードを納めた金庫は、もう開いても宜しからうと、鑿を以て先づシャツターを切落し、更らに中なる鐵の扉を開いて見る。是は又豈計らんや、棚も賣掛けカードも完全に燒失して灰となつて居る。段々調べて見ると、金庫とは名ばかりにて御念の入つた馬鹿〳〵しい構造である。

此金庫は南館の東北隅の四階にあるが、丁度其上の五階と、其下の三階とは便所になつ

て居る。此上と下との汚物を流す鉛管の太とやかなるが、眞中の金庫の一隅を貫通して、極めて薄弱なカバーが施してあるに過ぎぬ。火災と同時に此鉛管が鎔解して、猛火が金庫の中へ工合よく通ふ樣になつて居る。前面は二重の防火扉で物々しいが、肝心の中が頭かくして尻を丸出しにして居る。鎧着てコレラ病に罹つた病人見た樣なもので、實によい氣なもんである。

人間の智惠なぞといふものが大方此位な程度で、餘り保證だの斷言などはせぬ方が確かだ。

鼠が天井裏でうるさいとて、天井裏をブリキ張りにした人がある、四方ハンダ付けにして、先づ是で大丈夫と思つて居た。處が大きな天井の一角に、どこか小さな穴が有つたと見えて、初めの程は誠に靜かで大得意であつたが、四五日の後に此穴が鼠公の發見する處となり、是は結構な運動場があると計り、我も〳〵と這入り込んで駈け廻り、オリンピック競技をやり出した、其賑やかな事は一と通りではなかつた……とある。

人間の仕事には大方此樣な尻拔けが有る、鼠公天井裏で笑つて居る。

寶の山

店内の灰掻きは、初め日當貳圓宛で百井組の人足を使つて居たが、考へて見れば店員の手の空いたのが大勢何か仕事は無いかと待つて居る。勿論能率は本職の方が遙かに高いに極つて居るが、此際店員に金を取らせる工夫をするが當然である。

そこで斷然百井組の人夫を排して、店員の灰掻きに從事するものには、日當貳圓を與ふるといふ事にした。翌日から實行して見ると、果して我も〳〵と志望する、何れもやせ腕のフラ〳〵腰で、今出來のルンペンばかりである。少し風が吹いて灰が舞ひ上ると、眼をふさぎ口を押へて、能率の上らない事夥だしい。然し皆その日の糧を得るに道なき友人である能率などは問題でない。

皆やれ〳〵つとシヤベルを與へて、灰の山へ突貫せしむる。

三越の灰には、寶石や金銀の鎔解屑が澤山交つて居る……と誰云ふとなく、世間の評判となつた。

事實銅鐵眞鍮、アルミニューム等の鎔解したるもの、陶器硝子器類の破片、其他何くれとなく、百般の商品の燒けたものが、灰となつて店頭に山と積まれてある。

其中には勿論、洋傘の柄や、ステツキの握り、文房具や化粧道具、袋物の金具や髮飾りなどに、金銀を用ひたものがあるであらう。

然し各賣場の床は、鐵筋コンクリートで、火災にも依然として居るから、ケースの中の商品は燒けても、鎔解たものは床の上の灰の中にチヤント殘つて居る。

貴金屬や美術品部の床は、各々其係の人が拾ひ集めて、灰迄振るつて見て、愈々殘りなしと見極めて捨てた灰の中に、寶を探し出すは至難な事に屬する。

僕が灰の中から、金と銀のとけ屑を拾ひ出し、貴金屬係りの三浦君に渡したら、先生クス〳〵笑つて居る。

聞けば金だと思つたのは眞鍮で、銀と思はれたのはアルミニュームの塊りであつた。眞鍮の鎔解たのなどは實に美麗なものである。大方の人は僕と同樣に、ニュームの塊りを銀と思つて、拾つて行つた事であらう。

何せよ朝は暗い中から、夜は暗くなる迄、入り代り立かはり、灰の山に眞黑にたかつて頻りに掘り返して居る。

塵捨て場に蠅が集まつた樣に、震災の爲めに用のない盲者がウヨ〳〵して居る。傍から見れば狐につまゝれた人が、馬糞をお萩と思つて喰べて居る樣だが、本人達はなか〳〵以て眞劍血眼である。寶の山に入りながら、手を空うして歸らんやと計り、馬力いや人力を傾けて居る。

ヘン、さう甘くは問屋が、イヤ三越がおろさぬ。

宿直

事務所の宿直には伊藤三平君を頼む、此人元來困難を屁とも思はぬ、一寸痛快な男である、國許には親兄弟もあるであらうが、東京には何の係累もない。下宿屋も持物も全部燒けて丸裸、何日間どこで暮さうが、心配する者などない、殺されて見た處が夫れつきりと言つた樣な、誠にサツパリしたものだ。

先生嘗て非常に熱を出して、毎日四十度に及んだことがあるが、一向平氣で更らに苦しまない、可笑しいとあつて、大學病院へ診せた所が是は不思議な容態だ、是非研究の爲め入院して貰いたいとある、勿論官費である、若干の給料を呉れたかどうか、それは判からぬ。貰つたとか、いや貰はぬとか、マチ〳〵な評判であつた。

兎に角大分永い間入院して居たが、結局判然せず、其中にフラ〳〵ッと又平熱に成つてしまつて、無駄飯を喰つたまゝ退院に及ぶ。

此不思議な肉體の持主は、毎日燒け亞鉛の天井裏を眺めて眠りに落ちる。寢ると云つた處が、蚊帳なんて洒落た物があるではなし、僅かに本郷の少年寮から運んできた、煎餅蒲

團に柏もち、蚊なぞ喰ふなら、序に命まで喰つてしまへと云つた樣な調子である。朝はムツクリ起きると、夫れでも顏を洗ふらしい?、直ぐに机に向つて事務を執る……と言つた處が、見舞客に應接したり、色々な質問をして來る店員に答へたり、何でも來いの手當り次第、それでも腹は空ると見えて、時折何かモグ〳〵やつて居る。何を喰つて居るかハツキリせぬ、之も大方あるもの手當り次第であらう。物を苦にせぬ處は實に痛快であるが然し、人の思惑も何にも考へずに、自分の思ふこと、言ひたいことは、何でもかまはずガン〳〵捲くし立てる、之で大概な人は閉口して、ウム〳〵マアいゝよ、さうか〳〵と云つた調子に敬遠して、なるべく相手にならぬ樣にする、物云ひは感心せぬが主張は中々正しい。

嘗て滯り貸の殘金が、甘く整理が付かんので、伊藤君を整理係にした。同君嘗て外賓係に居て、集金の狀態や不始末の筋道を、よく呑み込んで居るから、此照魔鏡にかゝると大概な不始末が直ぐ知れる。

集金係が不性して、取立てに行かなかつたり、受取つて置きながら未入金にして置いたり、色々な綾が手もなく發見せられて、遠慮なくガン〳〵やられるからたまらない。

其後買合せ係に任命せられて、各店同業者の商品を見て歩く。黑毛朱子の作業服を着て帽子もかぶらず、一直線に値段を調べて、手帳に控へて歩く、舶來品など、英字はよく讀めずとも、何かの印で覺えて居るらしい、內外價格の比較を間違ひなくやつて來る。

同業者間でも、此一ツ風變つた服裝で、調べに來るので忽ち知れ渡り、中には妨害する者もあれば、顏馴染みになつて、戯談など言ひ合ふ樣にもなる、果ては同業者に餘り賣崩しをするとおれの方にも覺悟があるぞ、など丶威嚇して歩く。徹底したる變り者であるが、又人に眞似の出來ない痛快味のある男だ、なり振りは一切かまはず、美食や女や贅澤などは一切趣味がないらしい。

但し蓄財には大いに趣味があつて、店內屈指の〇持ちである。是で女房でも持たしたらあたりまへの人間になるかしら……?。

エッ！大きにお世話だ?、

いや御尤も——。

殘金整理

伊藤君と共に殘金整理を託したる人に石合君あり、氏は信州の人、前名を道助と言ひ後に平右衞門と改む、抑も何の故なるかを知らず。

之が忠臣藏ならんには、成駒屋のお輕を向ふに廻して、七段目に活躍し、六代目音羽屋の妙技大向ふをうならする處なるべしと雖も、同君はさる隱し藝もなく、極めて勤儉質素贅澤は罪惡と心得、一家の見を持して世俗の風に倣はず、江戸つ子の錢を笑ふて一錢を苟もせず、慕口にキチンと整理して常に其所在を亂さず。

友人某、一日休暇に遣ひ過して懐ろ勘定の合はざるを嘆ず。僕彼に教へて曰く、行け、而して之を石合先生に問へと、相見て呵々大笑したる事ありき。

閑話休題、彼は喫煙せず、美食せず、飲酒せず、觀劇せず、美服を求めず、稀れに友人と打連れて地方に旅行し、或は故山に歸りて檜杉を植林し、只管禁慾枯淡の生活を營む。妻子なきにあらずと雖も故郷に留め、單身東京に間借りして人の二階に燻る。書物は新聞を讀むに止め、食は辨當飯を詰め込むを限りとす。默然として眠り、飄然として起き、切々として働くのみ。政友會の政策を左袒し、梅ケ谷を最負にすと雖も、嘗て一錢を政治運動に寄附せず、拾錢を角力の見物に投ぜず、只新聞の論説に言議を左右し、三面記事の勝負に力を入るに過ぎず。趣味として財を集め、故山に植林し、平凡將棋を闘はし、赤毛布の旅行を樂しむ。其生活の經濟的なる點に於て、是に過ぎたるはなし。獨立の念篤くして他人の厄介となるを好まず、常に正しきに左袒して、曲れるは煙管の雁首だも許さず。

君、元外賣係に屬して市内の地理に明るく、何町何番地には八百屋あり、其隣家の豆腐屋、材木屋、菓子屋等の所在迄知悉せずといふ事なし。殊に人事關係の詳かなるに驚く。何某は何々男爵の乾分にして何々會社に關係し、相場に手を出して失敗し、今は何々會社

の腰辨となる。何某の奥様は何某の娘にして、何年何月何某の媒妁にて結婚し、今は三男二女ありて、巨萬の富を有する等、微細に亘りて記憶す。驚くべき一種の天才なりと云ふべし。誠に滯り貸殘金整理の適任者にして、集金係の放任を許さず、居ながらにして華客の住所經濟の内狀を諳んじ、注意、教導、懇切を極む。

好漢惜むらくは、狹量人を容るゝの度量に乏しく、交譏妥協の融通性に缺くるを、侃々として人を罵り、諤々の毒舌人をして座に堪へざらしむ。正しからざる者は彼に近付くを恐る。

要職にG某あり、好んで柳花の春に親しみ、二號を擁して店内に私語し、Gの口座に記して買物を二號の住宅に送らんとし、之を外賣係に託す。石合君奮然として怒り、店員の買物は自ら持歸るを原則とす。宜しくG自ら屆けよと突き返す。Gは上席なりと雖も、返すに言葉なく、恨みを呑んで凹む。

或時、宿直規則の改正により、石合君宿直免除の特權を失ひ、老齢病を得て宿直の夜勤

に堪へず、心中甚だ平かなる能はず。怒髪冠をついて……と言へども禿頭髪なく、圓頂湯氣を立てゝ義憤を喰ひしばり、時の營業部長濱田四郎君に其不當を迫る。

濱田君曰く、誠に氣の毒なりと雖も、規則は一人の爲めに曲ぐ可からず。宜しく同僚に代理を依頼して代らしむべしと。

否一度與へたる特權を奪ひ、病軀事に堪へざるも尙ほ夜勤をしゆるは、爲政者の不德なり斯の如んば辭して故郷に歸らんのみと、懷中の辭表を卓上に叩き付けぬ。

賣言買語。

君誠に辭職せんとならば、予は之を取次ぐの外なし。

僕傍らに在りて、風雲急なるを見、徒らに雲烟過眼視するを許さず。卽ち辭表を取つて彼の懷中に捻ぢ込み、短慮功を成さず、勘忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ、勝つ事を知つて負くる事を知らざれば害其身に及ぶ。

と暫時家康となつて彼の癇癪の虫を押へ、暫く退去を命ずる。

斯くして合議の末、病氣の故を以て宿直夜勤を免除する事に決し、一件の解決を見る。

氏は常に和田豊治、日比翁助の二君に私淑し兩氏に接すること親に仕ふるが如かりしが兩君今や亡し。彼快々として樂しまず。

風雨多年圓頂愈々光り、口角益々健にして、兩脚之に伴はず。今は紛々たる都塵を後にして、故山の林中に歸り、閑雲野鶴を友として、樹齡の加ふるを樂しむ。

僕の友人中、三平君と共に、變り種の一人として指を先づ君に屈す。

我が山の檜肥えたりと村夫子

兵　糧

今朝は青山の本部に行つて見ると、伊勢崎から貨物自動車が白米の俵を山と積んで、取引先きの機屋サンから見舞に贈つて呉れた。時にとつて誠に結構な見舞品である。それに楓で造つた戸棚ともデスクともつかない樣な物を四個くれた。是亦家具類缺乏の折柄、戸

棚兼用のデスクとして、重寶なる贈り物である。そこで戸棚は本部で事務用に使用し、米は本郷の寄宿舍に送る。其處には店員の青少年、及市内在住の避難店員が、食料缺乏で困つて居る。夫こそ實に大旱に雲霓を望むが如きものであつた。

拙者自身の家庭に於ても、段々食料は缺乏する。田舍からは見舞やら尋ね人やらで、泊り込みの客が段々増えるが、食料の續くあてがない。中村守君が、自分の近所で玄米を手に入れる事が出來るから、五升位ゐなら買つてやると云ふ。不取敢五升買つて貰ひ家にかついで歸る。

飯野君の説に從へば、玄米は何か丈夫な鉢に入れて、ビールの瓶の底で、根氣よく搗けば白米になるといふ。

早速敎へられた通りに、やつて見るが、なか〳〵以て白くならぬ。徒らに勞多くして少しも効果がない。是を白くするまでやれば、腹の方が先にへつて、やり切れたものでない。丁度下手な石炭山を堀る樣なもので、到底引合はぬ。掘り出す費用が掘れた石炭の代

價より餘計かゝる。是は寧ろお隣りの餅臼を借用して、搗いた方が宜からうと、庭に莫蓙を敷いて、其上に借りた餅臼を置き、大上段に杵を振り上げて、ドスンと計り打ちをろすと、其震動で、大切な米は大半外にケシ飛んでこぼれ出す。之ではならんと段ボールを高く臼の廻りに打ち付けて、こぼれぬ樣に塀を結ひ廻らし、今度は手加減してヤワ〳〵と搗いて見る。

何が扨て、素人の悲しさには米が白くなるより前に、玄米はコナ〳〵に碎けて始末におへない、とう〳〵是も斷念する。

玄米ばかりの飯では、何としても咽喉に通らぬ。白米を半分交ぜたら、と猿智惠を絞つて交ぜ飯を炊いて見る。然るに玄米の畜生なか〳〵柔かくならんので、水を入れてはグタグタと何時迄も煮て見る。すると白米の方が、柔らくなり過ぎて始末にをへぬ。よい加減な處で下ろして、喰べて見る。白米は粥の如く玄米は小砂利の如く、恰もぬかり道に砂利撒いた樣な飯が出來た。是が亦我慢にも食へたものでない。いとゞ食料缺乏の折柄、半泣

きの面を蜂が刺した様なものだ。なんぼ神様の惡戯でもよい加減にせんと……ヲイ！、……承知せぬゾ！、

愛護會の富田君に遇つたら、僕の家へ送り屆ける途中で、米がどこかへ消えて無くなつたが、配達者を調べて探してくれと頼んだ。

其翌日、新宿のデポーに預けてある事が判つたので、早速深川から避難して居る居候の大工に、車を挽かせて取りにやる。一斗入りの袋が、五個有つたとて車に積んで來た。いや是で大助かり、當分矢でも鐵砲でも持つて來い！昨日迄の半泣きの面はカラリと晴れて玄米なんぞ糞面白くもネー。……そつちの方へやつて終へ！。

翌日になつたら、新宿デポーへ米を預けて逃げたといふ車力が、車を挽いてやつて來て『昨日御もちになつた米の中、二た袋は他所へ屆ける分ですからどうぞ御返し下さい』とある、ヤレ〳〵。

誰れの困るも同じ事、誠に以て致方がない。五袋と喜んだはほんとの糠喜び、二た袋だけ

返却に及ぶ。

『オイ！昨日の玄米はチャンと仕まつて置けよ、捨てちやならんぞ！』

探れ人

原勢と大澤は向柳原に住んで燒け出された川上が、何處に居るか探し出すとあつて、毎日草鞋穿きで、燒け跡をテク〳〵探し廻る。

又避難者の集まつて居る所を廻つて、

『川上は居ないかアー！』

『川上ッ！』と怒鳴つて歩く。

一方川上では、足利の姉の娘S子が、からだの工合が惡くて、山の長兄に連れられて上京し、あすは順天堂へでも、診察を受けに行かうと相談中、グラ〳〵と來た大激震に驚き續いて襲ひ來るたび〳〵の餘震に兢々たる折柄、各方面に火災起り、斷水の爲め火災は

益々猛威を奮つて擴大し　近所に飛び火して愈々危險の迫るを覺え、こりや斯うしては居られぬと、自轉車のうしろに若干の食料と、手廻りの荷物を積み、雇人に挽かせて一同上野の山へ避難する。

其中に、鮮人出沒の噂は、夫れからそれへと擴まり、疑心暗鬼を生じ、さらぬ事だに疑ひの種となり、混雜の中に兒戯に等しき爭ひを生じ、爭ひは更らに波紋を擴大して、此處に彼處に亂鬪が起る。混雜は一層混亂となつて、親子は離れ、夫婦は別れ、甲は乙を呼び丙は丁を探しつゝ、亂麻の如く亂れて行く。實に恐るべきは流言蜚語であり、愼むべきは輕擧盲動である。

上野の山の混亂に、川上夫人は一行にはぐれ、互ひに探がし求むれども遂に遇はず、其夜は安全地帶をもとめて一夜を明かし、區々なる人の噂さに、何れを眞と定め兼ねる。全市全滅と言ひ、山の手方面は無事と言ひ、何れも見て來た樣な嘘の言ひ合ひ。思案に餘つて兎も角も、無駄と思つて牛込へ辿り着いたは三日目の夕方である。

原勢と大澤は、足を棒にして探し求むれども遇はず、斷念して家に歸れば、計らずも其中の一人に巡り逢ふ。之を思へば昔の仇討ちなどは、日本國中を廻つて探ねて歩るく。北海道に逃げた奴を九州など探して居た日には、一生涯逢はで此世を過ごしてよとやである。

扨互ひに無事な顏を見て一と安心はしたものゝ上野の山ではぐれた主人と、娘と、S子の一行が、どこにどうして御座んすやらと思ひ、たゞ〳〵案じ煩ふ計り、何と仕樣も泣いじやくる。

一方川上氏は夫人にはぐれ、探しあぐねて見當らず、群集に押され〳〵て、上野の山の奥に入り込み、谷中を越して根岸も過ぎ、段々にそれから夫れと、安全地帶を求めて深か入りし、川口の町に弟の嫁の里のあるを思ひ出し、足を延して川口町の某家に、一と先づ落ち付いたとある。是ではいくら東京中探し求めても、見付かる筈のものでない。

足利のS子は、初めて東京に出ると、直ぐに地震にあひ、火災に追はれ、驚きと恐れと奔走に心機一轉し、體の方も思はぬ運動に工合よく、見ざりし月のものも、忽ち見る樣に

なり、如何なる名醫の診察より、地震火災が一ツチキク〳〵と云ふ、妙奇天列な結果となつた。

死線

雷電山の長兄は、足利の妹龜田に頼まれて、娘S子を向ふ柳原の川上に托する爲め、九月一日の朝、連れだつて足利を出發し、晝前に向ふ柳原にS子を送り屈け、外に所用あつて横濱に赴く途中、神奈川附近迄來ると大地震にあひ、横濱方面の被害激甚を極め、次で火災は四方に起り、鐵路には故障を生じて前進は不可能となり、途中から引返して、其夜は濱町に住む娘Y子の家が心配になり、訪ふて先づ其安否を確かむる積り。

東京に引返して見ると、下町は一面の大火災、避難者の雜沓揉むが如く織るが如く、進退の自由を得ざるのみならず、最早濱町方面に足を踏み入るゝ事は絶對不可能となり、止むなく向柳原に、再び川上氏を訪ねて見る。是亦近火に包まれて、刻々に危險は迫りつゝ

ある。川上氏は已に一同避難したるあとで、表戸は釘付けとなつて居る。

失望して牛込に向はんものと、須田町迄來た頃は、四方既に火となつて進退此處に谷まり、廣瀬中佐の銅像前にうづくまる。

火焔の惡魔はゲラ〳〵と、物凄い笑ひをもらしながら、此處にも亦一塊のローストマンをクツグせんとしつゝある。

元來頑健を誇る人なれど、朝から夜にかけて飲まず喰はず、大氣は熱して瓦斯體となり渴すれども水はなく、餓ゆれども食物はない。右往左往に狂奔して、疲勞、困憊共極に達し、遠火は段々近か火となり、ジリ〳〵と熱して來る。今は全く討死と覺悟を極め、力の限り堅き大地を爪で堀り起し、顏面を其凹みに押し付けて徐ろに死の運命を待つ、誠に悲慘の極みと云ふべきである。

幸ひにして、天未だ此老武者の一命を奪はず、彼が最善の努力は、遂に彼自らの生命を救ひ、翌朝ほの〴〵と東天の白らむ頃、若干の冷氣は土中より立上つて、萬死の彼を窮地

に助けた。周圍の火焔も漸く怒りを治めて、一方の活路を彼が爲めに開く。

燒け落ちた家屋と、累々たる死屍の間にヨロ〳〵として彼は立ち上り、慌てず、騷がず靜かに一歩〳〵を踏みしめて、這ふ如く飯田橋の方面に歩を移し來る。流石に彼は日清日露の兩役に、國家の干城として、屍山血河の間を往來したる當年の勇士である。

霜光三尺玉に塵なく、嘗て盤根錯節に試み來るの慨がある。

其日も漸く晝に近い頃、拙者の住宅に辿り着き、門に這入ると氣が緩るんで、バツタリ玄關の三疊に倒れて、

『ウムー〳〵何か甘い物をくれ、砂糖でも飴でもよい』……と要求する。

澁紙へ微が生へた樣な鬚無茶な顏を、モグ〳〵やりながら、角砂糖を頰張つて靜かに元氣の恢復を計る。

兎角して渴も癒え、空腹も充たして、漸く元氣の常態に恢復したのは翌日の事である。

是から草鞋脚絆に足を固め、今年十三歳になる僕の長男を、後學の爲にと燒け跡視察に

引き連れ娘Y子の行方を探しに出る。

先づ濱町に其住宅の跡を訪ね、何か書き殘したるものともや、見れど探がせど何の暗示もない。僅かに燒け跡の灰を搔き起して、見覺えの陶器一個を拾ひ取り、力なく〳〵あきらめて歸り來る道すがら、見知り越しの人に出會ひ、娘の行き先きを漸く突き留めることが出來た。

嗚呼矢張り來た甲斐が有つたと、大いに喜ぶ。

廻り合ひ

Y子の夫は商用で桐生に滯在中、留守は五歳の次女と妻君のY子とたつた二人である。手足まとひの次女を背負ひ、近所の人と諸共に、着のみ着の儘逃げ延びて、上野の森に恐しい一夜を明し、翌日は近隣の人に伴はれて、其知人なる日暮里邊の某方に避難して居ると知れ、稍安心の胸を撫で下して歸る。

震災に引續き、恐しき火災に驚き、更らに又不逞鮮人の噂に怯えて、都大路の警察權は火災と共に消え失せて、軍隊の力に戒嚴令は布かれ、各區各町には申合せた樣に、有志青年自警團が屯して、通行人を誰何する。

長兄は娘にあつて先づ安心と、スタコラ黄昏の道を急いで、川田町に來かゝる。

『待テ！』……と、一聲青年自警團の一人が、腰間に傳家の長刀を横たへ、眉を上げ肘を張つて詰め寄り、

『何處へ行くか？』

『ウム、若松町へ行くんだがね、何だいお前さんは？』

『コラッ！樣子が怪しい、貴樣鮮人だらう、アーと言つて見ろ』

『ウーと言つて見ろ』……

『語尾が曖昧なら怪しいぞ』と來た。

『箆棒め！日本人が日本の町を歩くに不思議が有るかい。一體貴樣何の權能があつて、

通行人を誰何するんだ、フザケルない』。なぜゝごた〳〵やつて居る。」

其處へ後から子供の手を引いて來た娘があきれて

『まあ何です貴方は、是は私の父ですよ』

『あゝさうですか。いやそれなら宜しい、御通り下さい。アッハッハア〳〵〳〵』

『此頃頻りに不逞鮮人が出沒するのでどうも……』と頭を搔いて居る。

勿論夫子聊か變手古な風體をして居る。而も其御かんばせが、少しく日本人離れがして居る。夜眼には怪しと見るも、あながち認識不足とのみは言ひ得まい。

斯かる事ありとしも知らぬY子の夫柳三君は東京の火災を聞いて打ち驚き、妻子の身の上を案じ煩らひ、自轉車を飛ばして桐生から東京に馳せ付け、大久保の親類を根據として、濱町の住宅所在地を初め、避難者の集合する所を、此處か彼處かと毎日〳〵探ね廻れど、容易に見當らず。負傷したか燒け死んだかと安き心もなく、尋ねて探して探しあぐね、通りがゝりに僕の家へ見舞ひかた〴〵立寄つて、思ひがけなく尋ねる妻子に廻りあひ、親

子夫婦互に抱き合つて涙にくれる。

抑も此涙は、悲喜交々錯綜混亂、叮寧に分折しても、なか〳〵説明し難い涙である。

十三艘飛び

ふき女は十四歳の時から二十二歳迄、足かけ九年の永い間僕の家に働らいて居た、越後出身の女中である。

兩親はあれども無きが如く、彼女の給金は何時も前借りして、嚴重に忘れずに親父が持つて行くが、嘗て彼女の爲めに、手拭一と筋半衿一とかけ買つて與へたことがない。可愛さうな彼女は、親の借金の爲めに、常に働いて居る。何時迄働らいても、一文の貯金も出來ぬ。如何に親父に意見しても糠に釘で、張合ひのない事夥しい。年頃になつた彼女の緣談など、心にかける筈もない。

そこで僕の家の普請に來た大工に話して見たら、極めて簡單に話が纏まつたので、兩親

にも交渉し、僕が親許になつて嫁にやつた。

彼等二人は、小さな家を深川に、細い煙を立てゝ居たが、九月一日、主人の大工は仕事に出かけ、留守は彼女獨り晝の仕度をして居る時、突如として例の激震にあひ、近邊に火災起り、身の廻りの品を風呂敷に包み、近隣の人達と共に逃げ出したが、火の足速く追ひ詰められ、川端へ出たなり、後へも先へも行く事叶はず、通りがゝりの舟に飛び込んだ。

船頭は頻りに拒んで居るが、今や九死一生の場合、外に避くべき道もなく、舟舷に嚙り付く、火の子は盛んに舟の上へ落ちて來る。船頭も一生懸命安全地帶を、いや安全水帶を求めて漕いで行くが、其中に火の子はバラ〳〵落ち來つて忽ち舟に燃え移り、危險は刻々に迫る、船頭も今は早や是迄と、我が舟を見捨てゝザンブと計り水中に潜り込む。

然し、彼女は中々さうはゆかぬ、今は愈々危しと見えたる時、折よく船足を速めて通りかゝつた他の船に飛び込み、ホツと一と息つく間もなく、此船も亦前のと同じ運命に陷つた。それからそれと船を渉つて夜を明かし翌日も亦終日同樣の艱難辛苦を繰り返して、結

局一日二夜十三艘の船を飛び歩いたとある。

かくて三日目の明け方、流石猛威を奮つた火災も納まり、稍安全と見るべき燒け跡の河岸に這ひ上り、喰はず飲まざる事既に二日間、燒き拔きだらけの浴衣に、跣足のまゝ上陸はしたものゝ大地は熱しきつて歩くことが出來ない。路傍に落ちて居た破れ靴に足を突き込み、命辛ら〳〵山の手を目がけて來る途中、飢と渴きに堪まり兼ね、パインアップルの燒けた罐詰を拾ひ、食べたい一心に叩き潰し、僅かに流るゝ汁を吸つて咽喉を潤し、午後の三時頃に僕の家へ、涙と共に轉がり込んだ。

見ればこれでよく生きて居たものと戰慄するばかり。色は眞黑にやけて、息も絶え〳〵の有樣、涙なしには見られない。

かくて彼女は四五日皆に介抱せられて、漸く元氣を恢復したのである。

義經は壇の浦で、八艘の船を飛んで助かり、能登守は九艘飛んで義經を逸し、彼女は深川で十三艘飛んで死線を越へた。後世二十艘も飛ばなければ、助からぬことになるかも知

れぬ……と、釋師は言ふ。

パラック問題

燒け跡の整理は追々片付いて來るが、如何にして商賣を開始すべきかが問題である。

商品は大阪の市場を主とし、船便を利用して海路芝浦に揚陸し、他は尾洲、兩毛及近東の商品を加へて、どうにか方法はつく。たゞ困難なるは材料缺乏の今日、如何にして逸早く建物を得べきかである。

田中君はバラックを空地に建築せんとし、僕は燒殘の本館に手入れをして、假營業を開始せんとす、意見は此處で二つに別れる、何れにしても極端に材料缺乏の今日、兩方共に容易の業でない。

そこで兎に角、各自實際について研究するが宜いと、僕は横河の宍戸君と打連れ、深川の木場へ材料を探しに行く。

如何な火災でも、水に漬かつて居る角材は、殘つて居るであらうと思つた、自動車を飛ばして木場に行つて見る。

行つて見て實に一驚を喫したのである。家屋、倉庫、製材場、機械器具等の燒失したのは固より怪しむに足らぬが、水中に繫いで有つた何萬石の角材が、一本殘らず奇麗に無くなつて居る。

段々樣子を聞いて見ると、火災の爲めに、木材の水上に現はれて居る部分が乾燥して燒ける、段々燒けて輕くなると、下の分も上に浮き上る、浮き上つた部分が又燒ける。かくして下積みの材木は段々上積みとなり、跡方もなく全部奇麗に燒けてしまつた。

是は机の上で想像のつかぬ事である。誠に一片の使用し得べき木材もない。材料がなければ如何なる名案が有つても、實行不可能で案なきに等しい。

一方田中君は、市中を馳せ廻つて居る中に、歌舞伎座が丁度建築中で、コンクリート工事を終つた計りで火災に遭ひ、足代木材や、外部に出て居る材料は燒けたのであるが、建

物の內部に有つた木材が、風の吹き廻しで助かつて居る。其外にも未だ芝浦に揚陸したものが有るといふ。

工事は大林組が請負つて、工人の出入りも烈しく雜踏して居る。主人の大林氏は大阪で顏馴染の間柄であつた關係上、話は意外に早く進行し、バラツク建造を引受けるとある。

遂にバラツク建設の計畫は進行一決して、田中君を委員長とし、家具裝飾部員の甲乙數名を助手となし、工事は大林組に請負はしめて、本店バラツク工事は着手せらるゝことになつた。

疾風迅雷、忽ち人足を督して、木造館燒け跡の取片付け、コンクリート造り煖房汽罐室の破壞が、晝夜兼行で進行する。

一方益さんは命を受けて大阪に走り、商品の仕入に飛び廻る。大阪支店の仕入係は、此際若干の現金がなければ、仕入困難と主張する。

處が益さんは『箒棒め馬鹿な事を言ふな。長年の三越の信用は、かう言う時に光るんだ、

俺が買つて見せる」

と、自から取引先を説得して、何拾萬圓の商品を、一錢も仕拂はずして、船便芝浦へ向けて發送せしむる。

人生意氣に感ず。

首斬役

拙者は重役に呼ばれて首斬役を言ひつかる。

『君が一番公平だと思ふから、此際人事課長となつて、必要なる店員を銓衡して呼び出し、夫れ〳〵役付けし、老朽若朽は濱田常務を委員長とし、幾度、飯野兩君を委員とし、充分審査して止むを得ざる者は是非に及ばん、涙をふるつて馘れ！』とある。

仰の通り拙者の名は正に幸平には相違ないが、字は違ふ、此際馘洒落處の騒ぎでない。

こんな貧乏くじは實に閉口だ……と言つて見た處で、誰かやらなければ全く以て始末

が付かん。

今の三越は、立つか倒れるかの境目である。一人の私情など差挾むべき時でない。況や全店員、給料二割減を自發的に申請して、捨て身になつて奮闘して居る。三越の爲めに必要とあれば、何でも辭する事は出來ない。

嗚呼、厭だが仕方がない。『神様になつた氣で、一番冷靜にヤツ付けろ』

と遂に首斬役を引受けて、新身の一刀を大上段に振りかぶつた。

果して誰の首を打落す事ぞ、と言つた處が、首を切るのが目的ではなく、如何にして、全部の店員を無事に働かしむべきかである。

先づ第一に東北地方に行商隊を組織し、大阪支店の商品を揃へて二十人程繰り出す。

臨時外賣係は、茂木君を大將として、震災前の外廻りや賣場員の有力者を以て組織し震災前の賣掛代金は、各自の記憶や手控への傳票復寫などを根據として整理し、山の手方面の、火災を免かれた御得意様には御用を聞いて歩く。是等に凡そ百人程役付けし、續いて

西館内の燒け跡に、古亞鉛の生子板を廻らして間仕切を造り、椅子や卓子は駒澤の店員倶樂部から運ばせ、本部を初め仕入係、倉庫、庶務、計算係、外賣係、出納係などの各係を置き、夫れ〴〵の事務を開始する。

かくて段々必要なる店員を招集する。一方濱田、幾度、飯野の三君と僕は、或は濱田君の私宅に集合したり、幾度君の處に寄り合つて、甲乙丙の三種に人名簿を區別し、先づ第一に、甲に屬する人達を招集し、尙餘地あれば乙組をとる、丙に至つては誠に心細い次第となつたのである。

勿論之を決する迄には、或は係長の申告に聞き、又は人事課員の判斷により、種々なる方面より取調べて委員各自其意見を持ち寄り、さん〴〵討議して決するのである。

『丙』…と委員の意見が一致して、其人名を認むるとき、僕は實に冷汗の背を濕ほすを禁じ得なかつた。

同じ難破船に乘り合せて、逆卷く浪に漂流しつゝある三千有餘の店員、何れを見棄てべ

きかと銓衡するは、情に於て忍び得ざることであつた。

轉勤

近く本店バラツクも開店の見込が立つたのでそろ〳〵必要なる店員を招集する事になつた。然し今の處三千有餘人、悉く働らかしむべき見込みは立たぬ。

此際大阪の支店に、出來る丈け大勢、轉勤せしむるを得策とし、同店に對して、何人位如何なる種類の店員を受け入るゝ事が出來るかを問ひ合せる。卽ち其要求に當てはまる人員を銓衡して招集し、夫れ〴〵大阪轉勤を交渉する。

此際大阪に行かれぬとあれば、到底當分呼び出しは覺束ないと覺悟するを要する、と言つた樣に、半ばはブラフをかけて見る。

卽座に應ずる者、再考を要する者、閉口する者、此非常の場合に於てさへ、決し兼ねる者が中々多かつた。若し此問題で辭職する者があれば、新身の一刀振り下す必要がなく、

自然解決と言ふ事になる、などゝずるい事も一時は考へて見た。

婦女子の身を以て、即座に轉勤を快諾して、浪花下りの勸誘に應ずる者十數人。

當時大阪支店では此勇敢なる娘子軍を引受けて、合宿所の世話をしたり、監督者を置いたり、何くれと中々世話のやける事であつた。結局男子の轉勤者百十餘人、女子三十人を大阪支店に托することになつた。

黑　鼠

震災前に、エレベーターの運轉手であつたTを呼出した處が、煮しめた様な浴衣一枚によれ〳〵の兵子帶をしめて來た。

『君明日から出勤出來るかね？』

『エ、出來ます。』

『衣服は？』

『是れつ切りです。』

『何としても、夫れで出勤されてはたまらない、君もそつと何とかならんかい』

『どうも燒け出されて丸裸ですから、何とも仕方がありません』

止む事を得ず、僕が貧弱なる蟇口から、拾圓札を一枚拔き出して彼の前に置き、

『一時是を君に貸して上げるから、何か之で古着でも工面して、　も少し小ザツパリとした衣物を着て、明日から出勤し給へ』

彼れの氣慨では、そんな借金は御免蒙ると斷るかも知れぬと思つたら、有難うとも何とも言はずに、拾圓札を掴んで去つた。

彼は震災以前、運轉手ストライキの急先鋒となり、一同を代表して眉をあげ肘を張つて僕の處へ談判に來たもので、當時はなか〳〵氣慨が有る様に見えた。殊に弱き一同に代り犧牲となつて此折衝の役を買つて出た様な風にも見えた。此奴は甘く仕立てれば物になる？と思つたが、今日の彼は、聊か赤味を帶びて不良化して居る様だ。

どうするかと見て居ると、翌日から古洋服を着て出勤し、某分店に役付けせられて働らいて居る。二ヶ月たつても、金は返しに來ない。其中六、七ヶ月にして辭職してしまつた。……、今はどこにどうして居るやら。兎角ストライキなどの低氣壓を捲き起して、騷ぎ廻つたり、借金を返さぬ樣な奴に碌な代物はない。彼も矢張り怠け者であつて、表面(うわべ)を巧に飾つて居る、人間の屑に過ぎなかつたと見える。

外賣係の主任の中に、之もTと云ふ男が居た。部下の某が八月末日の晩おそく、客先きから集金して來た數百圓の金袋を、一時主任のTに預けて歸つた。Tは自己保管の手提げ金庫に納めて置いたが、翌日の地震騷ぎに入金する暇もなく、混雜に紛れて、終に之を懐中にして歸宅したのである。

爾來彼は知らぬ皮の半兵衞で居ると、殘金整理係が、外賣係の定廻りを呼び出して、一々當時の出入を取調べた。結局某定廻りは、客先より集金したる數百圓の袋を當時T主任に保管を托したまゝである事が明瞭になつた。

速Tを呼び出して取調べると、甚だ言語が曖昧である、段々追及せられて遂に包み切れず、預る事は確かに預かつたが、何れへ入金すべきか未だ秩序が立つて居らんので、其まゝにして有ると言ふ。ドサクサ紛れに知れなければ、其まゝ火事ドロを極める積りとは言はでも知れて居る。

元來Tは永年の勤續者であるが平常の成績宜しからず、兎角の評判もあつた爲めに、此時迄未だ招集の命に接して居なかつた。此際餘り辛辣な事も言はず、其まゝ入金せしめて不問に附した、然し腹の黑さは是で充分裏書きせられたのである。

星遷り物變り、彼は新宿分店の主任の一人として勤務中、店員の間に面白からぬ評判が立つて、集目の注意する處となつた。或る時は短氣な監視係M某が、鐵拳を飛ばして彼の横面を張り飛ばした事がある。

然し結局是ぞと言ふ確かな證跡も上らなかつたので、Mが不當であると言ふ事になり、Mはそのまゝ病氣と稱して暫く出て來なかつたが、格別處分を受けた樣子もない。然るに

脛に傷持つTは追及もせず、Mの處分を迫りもせず、其まゝ打たれ損で引込んでしまつた。

省みて正しければ、そんな手ぬるい事では納まらぬ筈。

其後Tは、部員に代つて出納のレジスターを扱ひ、金錢の出入りを手傳つて居たが、遂に五圓札一枚を失敬した現行を發見せられて動きがとれず、三十餘年勤續しながら、一錢の慰勞金も貰へずに追ひ出された。

神は昭々として誠を照らす、天網恢々粗にして洩らさず。あなかしこ。

店員食堂係にSといふ男が居た。火災後丸の内の別館地下室に、存外役に立つ食器やら雜品が仲々多く有つた。之を取あえず本店に移送して使用すべく運搬を命ぜられた。然るに其中一と車を秘に自宅に運んでしまつたとやら、又喧しくなつて運び戻したとやら。兎角此ドサクサ紛れに、吝な事をしたがる奴が有る。是も亦後日諭旨退店の運命に接する。

兎角大變に遭遇すると人の心の奥が知れるもの、人間に大切なるは平常の修養である。

被服廠

震災の當時、本所の陸軍被服廠は、廣大なる面積を有し、最も避難に安全なる地帶と目されて、近傍の住民大方難を此處に避けたものである。然るに災禍の狂ふ處、鐵壁も物かは、微塵も餘さず、旋風猛火を捲いて來り、あらゆる生物とあらゆる物質を燒き盡して、阿鼻叫喚の八大地獄と化し、前代未聞の慘劇は演ぜられたのである。

店員の住所は、各自必ず屆け出る樣に掲示もし注意もして居る。然るに未だ屆け出ずや或は行方不明といひ、被服廠でやられたといひ、又は恐れをなして國へ歸り、再び出て來ない者もあるといふ。

其中に稍々確實らしきは、山岸孝二氏である。彼は本所邊に住んで居て、震災と共に一家族打連れて被服廠に避難し、一家全滅の悲運に遭遇したといふ、誠に以て氣の毒千萬な事である。

澁谷恭二氏も亦、同じ運命に陷るべかりしを、不思議に免かれて助かつた。初め二週間程は、頓と其消息を知る者なく、只被服廠でチラリ見かけたと聞く計り、屹度果敢なく成つたことであらうと噂しあつて居た。然るに十五、六日を經て、ヒョツコリ東京に歸り來り、火傷に惱む妻君を、慶應病院に入院せしめ、四谷の友人村田氏の家に同居して居ると屆け出た。

段々樣子を聞けば、始め被服廠に夫婦と一人の子供と三人で避難し、混雜の中に夫婦別れ〳〵となり、澁谷氏は子供を連れて群集の中に迷ひ込み、右往左往する中に、山と積まれた避難者の荷物に火が付き、見る〳〵中に燃え擴がり、果は旋風捲き起つて、人も車も荷物も諸共に、空高く卷き上げられて叩き落され、婦人の髮には火の子が落ちて來て、忽ちパツと燃え移り、見るも無慚に物凄く、黑焦げとなつて打ち倒れ、手を下して助けん樣もない。母は兒を抱へ夫は妻を擁し、折重なつて共に倒れ、死屍累々として横たはる。如何なる惡魔の風の吹き廻しか、安全地帶と思はれた被服廠の庭は、一大ボイラーの如き有

樣となつた。

澁谷氏も子供を抱へて火を防ぐ中に、背後に飛び火して上着に燃え移り、忽ち之を脫ぎ捨てゝ逃れる中に、又下着に火が付いて之も脫ぎすて、果は結局猿股一つとなつて、うろうろして居る中に、旋風に卷き上げられ、やがてズドンと下水堀の中に、子供を抱へたまま落ち込み、打ち伏して苦しき時の過ぐるを待つたといふ。

初秋の短か夜も千秋の思ひ、漸くほの〳〵と明けそむる頃、被服廠の一角に、力なき萬歲の聲が起る、即ち僅かに免がれて、一命を拾つた人々であらう。

澁谷氏もやう〳〵子供と共に起き上り、餘りの渴きに水を求めて、累々たる死屍の間を彼方此方と探し廻る折柄、路傍に一人の婦人が、足に火傷を負ふて倒れ、もがき苦しんで居る、よく〳〵見れば自分の女房であつた。即ち助け起して肩にかけ、子供の手を引き安全地帶を求めて這ふが如く、群集に押されをされて、確かと定めたる的度もなく、次第〳〵に千葉の方面にさまよひ行く。途中路傍の人に同情せられて、何くれと惠まれ、辛ふじて

陸軍の○○病院に辿り付き事情を訴へて助けを求めたといふ。

而も同君の實母と妹は、是も近所に住つて居たが、火災と同時に同しく被服廠に逃げ込み、悲しき運命に陷つたといふ。

取引先きの井戸君も、震災當時は日本橋の安全地帶に居たものが、火災と同時に本所の工場が心にかゝり、見舞ひに出かけて計らずも、難を被服廠に避けて、却つてくやしき災難に陷り、果敢なき最後をとげたとある。

嗚呼、一寸先は闇である。

悲　劇

三越の專務倉知氏の家庭にも、大なる悲劇があつた。同氏の家族は、夫人を初め令息令孃打揃つて、鎌倉の別莊に避暑中、第一回の强震に逢ひ、夫人は末子を擁して逃がるゝ時棟の下に壓せられて、母子共に氣の毒千萬なる最期をとげてしまはれた。

一方倉知氏は東京に在つて之を知らず、三越復興の善後策に沒頭して居る。

程經て此事件を知るに及び、氏は涙をふるつて一切の處置を、一先づ家族の者に任せ、自分は一家の私事を拋つて、三越の復興に專念して居られた。誠に悲壯の極みである。漸く復興の曙光を認むるに及んで、初めて夫人と令息の法要を營まれたが、事情を知る者皆一掬同情の涙を禁じ得なかつたのである。世に凡そ、義務の二字程辛らいものはない。

九月一日の午後九時頃、店を最後に引揚げたる警防員野原君と、電工の湯山君とは一石橋を渡つて、呉服橋手前迄來た時、猛火既に道を塞いで一歩も進むこと叶はず、兩人共に傍のお堀に飛び込み、對岸に向つて泳いで行つたが、野原君は火傷を負ひながら僅かに目的を達し、石垣を這ひ上つて助かることを得たが、湯山君は遂に行方不明となつた。

翌日は人相も見分け難き水死人が、幾つも呉服橋の下に浮び、通行人の顏をそむけしめた、湯山君も恐らく、其中の一人となつたであらう。

嗚呼、運命とあきらめんには、餘りに悲慘なことではある。

南無、一首手向けん哉……。

なきがらは涙の川に浮ぶとも
浮びにねたる汝を悲しむ

丑さん

店の出入りに丑さんといふ左官の親方が居る。元來江戸子のチャキ〳〵で宵越の錢は憚りながら持たネーヨ、と言つた肌合の男だ。鏝一丁握つたら箆棒めえ、誰にだつて引けを取るんじやネーンだと、左の拳で鼻の頭を立てに擦らうといふ奴。

氣の詰まる窮窟な御挨拶でもする時には、膝小僧を締め付ける樣な、堅い股引で、西洋間の床の上へキチンと座り込んで、痛かア御座んせんと言つた樣な顏ッ付き、脇の下に汗でもかきながら、

『ウヘッ！お左樣さまで御座り奉る』……と、取つて付けた樣な格好が、如何にも落語の

材料に持つて來いの、稚氣愛すべき人物である。

深川方面に住んで、子供の時から水泳にかけては、是も憚んながら……と言ひたい程、兄弟分には河童が三疋居りまさア！とでも言ひさうな達者である。

今は寄る年波で鏝は握らないが、やかましい親方で通つて居る。畫は倅が若い者を宰領して、得意先へ仕事に出て居る。

丑さんは今晝飯の膳に向つて、例の御仕着せの一合を銅壺に入れて、一杯やらうと咽喉を鳴らして居る時、グラ〳〵ッと來た。

氣の早いのが江戸子の持前で、パッと表へ飛び出したが、隣り近所は大騒ぎ、續いて餘震の連續に、流石鼻柱の強い丑さんも、家へ這入つて落ち付いて、一杯引かける氣にもなれない、食慾も飲み慾も今の地震で何處かへスッ飛んでしまつた。

其中に近所から火事が起り、上を下へと大騒ぎ。近隣の人は荷物を纏めて右往左往に避難するが、丑さんは存外平氣で、大河の流れを睨んで自信のある笑みを洩らして居る。

萬一身邊危しと見れば、ザンブと計り白波を蹴り、抜き手を切つて、腕に年は取らせねー處を見せやうとある。家内の者は荷物を纏めて頻りに避難をすゝめるが、丑さんイツカナ聞き入れない。

俺は家の始末を見屆けるから、手前達は勝手に安全な處へ逃げネーナとある。それでは と避難所を打合せて皆逃げる。

兎角する中に猛火は四邊に迫つて、自宅も燒け落ち、活路は水の一方と極つた。今は愈々是迄と、豫定の通り大河に、蛙の如く飛び込んで、抜き手を切つて向ふ側へ泳ぎ着くと對岸も亦火災とあつて上陸相叶はず、今度は川下へと流れに從つて下つて見たが、安全な上陸地點がない。今は早や下町一面の火となつて川の水迄湯の如く沸き、船といふ舟に火が燃え移つて、川火事とでもいひたい程の焦熱地獄、水の底の魚でも之では安全と保證は出來ぬ。顏がほてるから水に潜つては頭を出し、呼吸をしては又潜る。橋杭にすがつて呼吸を休めたり、材木を抱へて流れたり、日ねもす夜もすがら水中に惡戰苦鬪を續けた。如

何な河童でも江戸子でも、エー面倒臭へ、命なんぞ欲しけりや持つて行きネーと投げ出しもしなかつた。

翌朝漸く火力が衰へて、家といふ家が皆灰となつた頃、半死半生の姿で丑さんは川岸に這ひ上つたが、顏面火ぶくれの如く腫れ上り、眼ぶたは塞がつて朝がほもどき。物のあいろも水鳥の、陸にさまよふ悲しき有樣、疲れ果てゝ寸歩も叶はぬ、川岸に横たはつて僅かに元氣の恢復を待つて居た。

折よく丑さんの倅が、せめて親父の骨でも拾はんものと、通り掛つて、變りはてたる哀れな姿を見出し、涙と共に肩にかけて助けられ、命だけは取りとめたといふ。

漸く元氣が恢復すると、ケロリツとして、拳固で鼻の頭を縱にこすりながら、

憚んながら俺なんざア……と怪氣焔。

假營業所

田中君の督勵する五百餘坪のバラックは、ズン〳〵進行して愈々十月十五日には、開店することゝなり、之に要する店員數百人を招集し、皆白たすきをかけて働く。小使の仕事も子供の仕事もあつたものでない、手當り次第何でもやる。男店員も女店員も見得も振りも顧みず、實に眞劍味の横溢したるものであつた。

高塔高く初めて㊫の大旗を朝風に飜した時は、バルチック艦隊を日本海に迎へた東郷艦隊が、三笠艦上に戰闘旗を飜した樣な氣分であつた。

未だ交通機關はなし、周圍は一面の燒け野原、バラックさへ碌々建つて居らぬ時に當つて、逸早く開店したる三越へ、果して何人が買物に來るであらうかと氣間はれた。

然し其結果は豫想外である、あらゆる物質が燒失して極端に物資の缺乏したる時、道の遠近は問ふに遑あらず、知る程の人は我も〳〵と押し寄せる。何でも賣れる、況んや極端に物價騰貴したる折柄、我が三越の商品は、殊更に利益を低くして、廉價に販賣しつゝあるに於てをや。

夫れに、此處に彼處にバラック建築は始まり、勞働者の懷中は平常に倍加して收入がある、腹掛けの井から、拾圓札を摑み出して買物をする、盥でもバケツでもどし〳〵擔いで歸る、配達をする必要がない、誠に手數が省けて、商賣が簡單である。

是より先き、幹部に於ては、販賣戰線を擴むる爲めに、市內適當なる場所に、二三百坪位な分店を設けることに一決し、候補地を物色する。

蛇にや短かし蚓蚯にや長し、中々格好な處がない。中に這入つた彼れ是れ屋が、濡れ手で粟の摑み取り、あわよくば此ドサクサ紛れに、お釜を起さうと、不當な權利金を要求したり、馬鹿に高い地代を要求したり、何時の世にも蟻は甘きに集まり、人は利に集まる、その五月蠅い事夥しい。

先づ第一に決つたのが青山學院の所有地、同學院の一隅澁谷寄りの一角である、場所は感心せぬが面倒はない。

第二が小石川の駕籠町、某取引先の所有地であるが、主人の爪が馬鹿に長い、地代を坪

當り二圓五十錢要求して挺子でも動かん。據ろなく夫れも宜しと、兩方共にバラックが出來て開店したのが、十月の十五日である。續いて新宿追分が十月廿八日、本郷が十一月十七日、銀座尾張町の角が十一月廿八日、牛込築土八幡町が十一月廿五日、淺草田原町が十二月二日、上野山下町が十二月十二日と、市中八ヶ所の分店は一瀉千里に出來上り、之に要する店員は、在來の店員全部を招集しても、尙若干の不足さへ生ずるに至つた。

首斬役の僕は有れ共無きが如く、腰間の秋水終に一滴の血をも見ず、目出度く鞘に納まつて居る。汗水たらして何の爲めに、厭な銓衡などしたものか、幸にして助かつたのは、丙に撰ばれた人達ばりではない。

首斬役の存在を失つた僕の仕合せは、實に二、三年分の賞與を一ペンに貰ふたより喜ばしい。重役會で一人も首を馘らぬと決した時は、二三の友人と共に、呉服町に逸早く店を開いた末廣で、心から嬉しい祝杯をあげた。

トタンの苦み

震災後の市民生活に亞鉛板程便利なものはなかつた、柱を建て、胴差しを入れて生子板を打ち付ければ、間仕切は勿論側壁でも外圍ひでも見て居る間に出來上る、梁を渡して荒く垂木を取付け、亞鉛板を並べてポン〳〵と打ち付ければ、忽ち屋根が出來上る。

以て日光を遮斷すべく風雨を凌ぐべく、家財道具を納むべく、寢食を便ずべく、安住の家たるべく、事務を執るべく、オフイスとなすべし、材料缺乏の際此位便利なものはない。

ルンペンに至つては燒け木杭を集め、燒け亞鉛の生子板を拾ひ來つて、忽ち假りの宿を造る、燒け跡から引摺り出した凸凹な生子板と雖も、死人にかける莚の代りともなれば急造便所の圍ひともなる。

其代り夕立ちがサツと來れば、バラ〳〵ザツと急霰の如きォーケストラが始まる。一と風吹けば無氣味な音樂を奏する。ジリ〳〵照り付ければ、天火の菓子燒き釜の如く、存分の傳熱炎天に勝り、秋霜の夜降雪の天、深々と冷え來つて寒さ骨に徹る、大概な病人なら早く極樂に行ける。

二つ宜い事偖ないものよと浪花節の兄貴は言ひ、

天二物を我に與へずと釋帥は言ふ。

僕は燒け亞鉛を廻らした事務室に、明日から小石川の分店に行く人を集めて、

『明日から小石川の分店が落成して開店することになり漸く諸君を呼び出して働いて貰ふ樣になつた、今や我が三越は諸君の働きによつて立つか倒るゝかと言ふ運命の岐路に立つて居ります。我々の先輩は、過去に於ける幾多の艱難と努力とによつて此大三越を建設し、我々お互ひに引繼がれたのであるが、如何に天災地變なりと雖も、我々の代に至つて、此大三越を倒しては地下の先輩に對して申譯がない。

諸君此際は非常なる大覺悟を以て復興の業に當らなければならんのであります、凡そ店に必要なりと認むる事は、誰の指揮がなくとも、小使の仕事でも、小供の仕事でも、夜警でも、便所の掃除でも、更に意とせず何でもやる、諸君の全力を傾けて努力して欲しいのであります。

凡そ店是に添はぬ樣な行ひをする人は、吾人共存共榮の敵とも思はなければならんのであります』

と熱辯を奮つて居る時、燒け亞鉛間仕切の外に、カラリツ、コロリツと悠長な日和下駄の音がする。

やがて一場の所感を述べて部屋の外に出ると、是は亦如何なこと、ドサクサな火事場跡には不似合ひな女性が二人見える。

聞けば本店バラツクへ買物の序に、知り合ひの人達がどうして居るかと、見舞ひかたがたお越しとある。

震災以前、某夜柳橋の宴席に、脂粉輕羅の粧ひ、三味の音色のさえたる中に、舞ひの扇をとつて立ち、差す手引く手の鮮かさ、滿場恍惚として魅せられた、柳橋の名花お琴嬢である、嬢と雖も芳紀正に六?、いや五十何才、あとの一人は其妹の琴次嬢である。

化粧した夜の遠眼には傾國の色ありとしも見たりし者が、是は亦何としたものぞ、色の

黒きことよ、勿論今時白粉などつげてシャナ〳〵して歩けば、氣の立つた民衆に毆られ兼ねまじき雰圍氣である、震災に燒け出されて彼女等は、其後どこにどうして御座んすやら詳しい事も承らず。浴衣がけに引かけ帶、グル〳〵卷きの髮かたち、如何に柳橋の名花でも、こう生地其儘をさらけ出せば、頭(かしら)のオツカーと相去ること甚だ以て遠からず、灰の中に落した黒パン宜しくといふところ——。藝妓の生地はお白粉やけでかうも黒いものかと感心する、然るに亞鉛の反射でやけると仰せある。

ハハア市民は今や塗炭の苦しみ……。

彼女等も亦亞鉛の苦しみ……。

チエーンストア

火災の爲めに、住宅全滅となつた下町の市民は、極端なる物資の缺乏と、物價騰貴に苦しみつゝある時、我等の本店バラツク及び市内八ヶ所の分店は、市價の暴騰などには眼もくれず、出來得る限りの廉價を以て、確實なる商品の供給に全力を傾けて居る。

水の低きに流るゝ如く、暴騰の市價も追隨し來つて、直札の付け換へを餘儀なくせしめらるゝに至つたのは、一寸痛快な事である。

當時あらゆる物資を失ひ、不自由その極に達して居た市民は、秩序の恢復と共に、盛なる需用が起り、交通機關の未だ不自由なる時、道の遠きを意とせず、適宜手近な此マーケットのチエーンストアに集まる。

販賣面積に於ては、九ヶ所の本支店舗を合算するも、尙ほ震災前の三分の一に及ばず、而も販賣高に於ては、震災以前に勝り、三越創業以來のレコードをさへ作るの奇現象を呈し、愈々復興の曙光を認むるに至つた。

燒け殘りの本店は西館の各階に、亞鉛板を以て應急のパテションを作り、本部を初め仕入係、計算、出納、外賣、庶務、倉庫等の事務室に使用し、東館は修理の用意に空けてあつたが、今は本店バラツクの販賣面積を擴むる爲め、或る程度の手入れを行ひ、不便を緩和

する必要を痛感し、鋭意工事を急ぐ。

斯くて東館の應急修理成るに及び、バラックの賣場を此處に移轉し、愈々室町街頭商旗を翩翻と朝風に飜すに及び、ボツ〳〵成績上らざる分店を閉鎖して、本店に引揚げ、散兵線を引き纒めて、元の軍國組織に歸らんとする。

茲に漸く本店の一部開店して、豐富なる商品を備ふるに至り、又一方追々交通機關開通して、山の手の顧客が容易に中央に出かけ得る樣になれば、最早貧弱なる分店の商品に滿足せず、豐富なる本店に集まること、震災以前と同樣になる。

此處に於てか、百貨店のチエーンストアは尠くとも、凡そ千坪以上の面積を有するにあらざれば、各個運動の戰鬪力に不充分であるといふ事を現實に敎へられたのである。假へば海軍の戰鬪の如く、砲艦や輕巡洋艦では、堂々たる戰鬪に參加して、少しも威力がないと同樣である。

何は然れ、首斬役淺右衞門となつて、新ら身の一刀大上段に振りかぶつた僕は、菊人形

の荒木又右衞門と同樣、屁ビリ腰のまゝで釘付けになつて居る。是では首を切る處の騷ぎではない。天井裏の鼠公が、チウ〳〵笑つて頭からシツコでもひつかけることであらう。事程左樣に間拔けな格好となつて、首尾よく免職。

ヤレ〳〵目出度い。

洋行命令

去る程に中間景氣は益々良好に、本店も愈々改築し得るの氣運を認め、横河工務所の中村工學士と共に、米國の各都市を駈け廻り、彼地同業百貨店の新設備を視察して來いとある。

僕が嘗て米國に一ヶ年程足を止めて居たのは、今より二十年も前の事である、日本に於ける二十年間の變化は非常なものであるが、米國では大したことはあるまい。

大なる收獲を期待する事は困難であるが、通風、煖房、冷房、製氷、發電、エレベータ

ー、エスカレーター、コンベヤー、配達の方法、發送の整理等々、内部の組織を視察するは初めてゞある。強ち收獲絶無とも限るまい。下足存廢の問題に就いては、曾て是を新聞紙上に問ひ、又印刷物を得意先に送つて、其可否を問ひ合せたことがあつた。然るに其回答は可否殆んど同數であり、店内の議論も亦同樣である、此問題についても、研究して來いとある。

考へて見れば、箆棒な話で、米國の都市をいくら視察したとて、下足の可否を判斷する樣な材料が有るであらうか?、火によつて水を求むる樣な注文である。

コラツ!グス〳〵言ふな。

無ければ無いと言ふ處を見て來れば夫れでよい!。

ハアツ!。

春洋丸

震災の爲めに、横樣に傾き、處々水に漬かつて、足許も危な氣な横濱の棧橋には、幾多の見送り人が、ぎつしり立ち並んで、今や徐ろに錨を揚げて動き出した春洋丸の甲板から投げ出す紅白綠紫の紙テープが、行く人と送る人との間に、スル〳〵と延びて、間は段々遠くなる。一つ切れ、二つ切れ、果は悉く切れて愈々全部海中に沈む時、互に帽子や手巾を振つて姿の見えなくなる迄立ちすくんで居る。

天氣は宜し、風はなし、海上波甚だ穩やかに疊の上を行くやうである。

僕は今中村君と共に米國百貨店視察の命を受け、往復三ケ月の豫定で、春洋丸の客となる。(大正十三年七月九日)

N君、乘船以來顏色甚だ振はず、夕刻に及んで遂に百貨店を開く。勿論之は極内にして一頁大の廣告に及ばず。蓋し視察に先立つて先づ之を開店してみるなどは、チト用意が宜過ぎると苦笑する。

喫煙室では船客のベージ君が、頻りに佛人のS氏を相手にチエスの戰ひを開いて居る

僕も久し振りに飛び込んで、二番美事に負ける。

翌日は朝來の小雨晝から晴れて、其夜は澄み渡つた半月が太平洋の中天に懸り、千里の涼風銀波を送り來つて、全身シットリとなる。

船は今北緯三十五度東經百六十度、故國を去る九百哩の海上を走つて居る。後部甲板には椅子を並べて、活動寫眞の映寫が初まり、蓄音機が頻りにハシヤイで居る。

喫煙室では、上戸黨が、ウイスキー、コルテルの滿を引き、麻雀が二組ポン、コン、チー、ガチヤ〳〵と支那町へでも行つた樣である、イヤ本物の支那人も大分見える。

夜中にウツラ〳〵して居ると、船室がバツト俄かに明るくなる。見れば扇風機の根元から洩電して、ペンキ塗の板壁がポツポと燃えて居る。スワ一大事と飛び起きて、タオルを振つて叩き消し、ベルを押してボーイを呼ぶ。アタフタと駈け付けたのが、寢呆け眼の支那人ボーイである。燒け跡を指して、電氣係を呼ぶ樣に英語で命じたが、要領を得ぬ。何やらチョンゴ〳〵言つて去つたが又暫らくして覗き込み、

『大丈夫ある。シットダウン、エーウーパア〳〵……』

何が大丈夫なのか、サツパリ判らん。其危險な事を說明しても判らず、スイツチを切る樣に命じても、何處にスイツチが有るか是も判らぬ。兎角して支那人ボーイは去つたが、どうやら不安に感ぜられる。

中村君はブツ〳〵言ひながら、宿直員を呼びに行く。やがて宿直員の某は、扇風機のワイヤを切り放し、最早大丈夫ですと言つて去る。

翌朝電工が來て、扇風機を取外し、電線を左右に開いて歸つた、其說明によると發火と同時にヒューズが飛んで居るので、壁の火さへ消せば、あとは大丈夫なんですと云ふ。

早くさう言へば餘計な心配はせぬものを……。

ホノルル

十七日の朝左舷に人聲がするので六時半に起き出て見ると、オアフ島が指呼の間に見え

る、一時間の後、ホノルルに着いて十時には上陸を許される。

同船の客五、六人と共に日本人の經營する自動車に賃して市中を見物する。車は熱帶の微風を突いて輕快に市中を通り拔け、ヌアヌパリといふ海に臨んだ懸崖絶壁の上に止まる

海上から吹き寄せる烈風は、其勢ひ猛烈にして世界强風の第三位に位するといふ、如何樣物すきに顏を出して見たが到底永く立つては居られない。

其昔、ハワイの英雄カメハメハは、寄せ來る敵兵を引摑んでは此絶壁から突き落し遂にハワイ全島を征服したといふ。初めカイルアといふ所から起り、各島の土民や酋長を平らげ遂に布哇八島を鎭壓して王政を布いたとある。

其銅像は今も裁判所の庭前にある。

偖自動車を引返してボンチボールに出る。此所は市の中央に突起した死火山であるが、頂上に噴火口の跡がある、全市を眼下に納めて眺望甚だ宜しい。

足許にはピンポンのラケットに角の生えた樣な野生のサボテンがニヨキ〳〵と蔓延つて

黃色の花、栗皮色の實など澤山付いて居る。孔雀サボテンに似たナイトフラワーも所きらはず野生して、夜は一層美しいことであらう。

更に車をワイキキの公園にやる、此處の水族館は有名なものである。フム〳〵だのキヒ〳〵だのといふ珍種の奇魚甚だ多く其色の美しいことは如何にも熱帶の動物らしい。

總じて熱帶に產する動植物は、共に色彩の强烈なるもの多く、花に、鳥に、蝶に、魚に如何にも美しい。然るに獨り人間のみは、甚だ以て美しくない、布哇ネーテーブなどと來ては一寸嬉しくない。

例令据へ膳でも恐れ入る、餘程造物主の虫の居所の惡い時に作られたものに相違あるまい、宜い面の皮だ！など〻考へて居る中に、車は更に市中を横さまに貫いて、モアナルア公園に止まる。

博物館に布哇土民の原始的藝術を見物し、更らに一轉して、砂糖及パインアツプルの耕地に出る。たゞ見る一面靑々たる耕地、見渡す限り砂糖とパインアツプル計りである。聞

けば砂糖が布哇第一の産物で、パインアップル之に次ぐと。然しやがてパインアップルの方が、近き將來に於て第一位を占むるに至るであらうと熱心に説明する。ウフフ！夫れはまあどうでも宜しい。

偖見物は此邊に切上げて、望月といふ料亭に行く。一と風呂浴びて浴衣がけとなり、ニヤビヤの滿を引く。禁酒國なるが故に、ビールに近き飲料を飲ませるとある、甚だ以て結構でない。狐にツママれて、馬の小便でも飲まされたのではあるまいか?。

やがて亭主手造りの日本酒といふのが出る、之も亦似て非なるが如きものである。

數種の日本料理に、日本服の美人?德利突き付けて、もう一ぺーお飲みなせえと來た。

食後に出たパパイヤは、甘く熟して一種の香氣深く、味ひも非常に甘く、何となく初めて暖國布哇の氣分に浸つた樣な氣がする。

ホノルヽの町は良く整頓して美しく、道路は碎石アスフアルトにペーブせられ、風は吹いても埃はなく、ヤシ、パームツリー、ハーブツリー、百坪に擴がつて花笠の日蔭を作る

ボインシヤナツリー、ゴールデンシヤワー、偖は曾て印度でお目にかゝつたバンヤン樹、枝の如く蔓の如く縱横無盡にエンタングルをなす何とやらツリーと、見るもの悉く珍奇。

熱帶とは云へど、寧ろ暖國の天惠豐かに、全島極樂公園の樣である。

希くば太平洋の眞只中に散在する、此パラダイスの島々に、永遠の平和あれ。

ヤンキーの鼻の頭に、世界第一主義の低氣壓を捲き起して、極東の爆彈を空中に運び來り、此平和の島の眞珠の港に投下すべく、餘儀なくせらるゝが如き機會なかれかしと祈りつゝ船に歸る。

日傾いて午後六時、船足緩るやかに此港を去る。

海上風靜かに波は穩やかに、一路しづ〳〵と金門灣を指して進む。

キヤリホルニヤ

七月二十三日午後二時、船は漸く桑港に着いた。新移民法執行後始めての入國者とあつ

て、取扱ひ手續きが未だ明瞭でない。移民官の間にさへ、各々意見を異にして、愚にもつかぬ議論やら證明やら質問やら、摺つた揉んだで五時間を費やし、七時頃になつて漸く上陸許可。而も船中に取殘されて、尙取調べを要する爲め、一泊ですむが歸國せしめらるゝか不安な船客も少なくない、排日の第一印象頗る不愉快を感ずる。

出迎への自動車で、フェヤモントホテルに投宿する。此處は市の中央小高い岡の上に位し、眼下に市中の眺望を納め、金門灣を隔てゝ五六哩の彼岸に、オークランド市を望み、出帆入港の大船巨船呼べば正に答へんとして居る。

オーチス會社の支配人、チヤーレス氏を訪問して商談の後、同氏に招かれてパレスホテルの晩餐に行く。

食堂の中央は楕圓形のダンスホールになつて居り、周圍は五尺巾位の雛段が三段程回らされてある。其處に食卓が並べられて、レデース、ジェントルメンが着飾つて卓に着く。ホールの一隅にオーケストラが有つて食事中に音樂が初まる。

有志の面々は喰べかけた食事をその儘に雛段からホールに下り立ち、相愛の男女互に手をとり抱き合つて踊り出す。やがて電燈がパッと暗らくなつて、挑發的な樂調に變り、暫しが程は何をするやら?。

物を喰べては踊り、水?を飲んでは又踊る、かくて夜は更けて、夜は明けて、パッションの焔が、どう狂ひ廻つてどう納まるやら……。

羅馬の末路とやらも、此樣な空氣ではなかつたか?。

インボリヤム、ヘールスプラザース、ホワイトハウス等は桑港百貨店中の大なるもの、一然し視察の結果、格別印象に殘る程の何物もない。

先づ大概にして羅府に行く。新開地ではあるが、四時溫暖なる健康地として、別莊地として、遊覽地として繁昌の土地である。

市中ムービーやトーキーの多きに驚く。

建築工事中の板塀など廻らしてある處などは、歩道に添ふて雜誌を地上に並べ、往來の

人を呼びかけて居る、夜になると、布を掛けて去る。格別嚴重な締りもせず、翌朝布を疊んで又店を張る、雜誌など盜む樣なケチな泥棒はないと見える。

オーチス會社の支店長ションナード氏の案内で、主なる百貨店、ハンバーガー、ブロードウエーストア、ロビンソン等の内部設備を見學する。格別參考となるべき目新しき材料もなく、結局豫想した通り、シカゴと紐育の兩都市を見れば足るといふ結論に到達する。

グランドキヤニオン

五日間の汽車旅行、ヤンキーレデーと並んで席でも占めやうもんなら迂濶に上着を脱いで汗を拭く事も出來ない。窮屈至極とあつて、中村君と二人でコンバートメントを奮發する。之なら二人の世界で、キツスしやうが抱き付かうが、否カラを外して、シャーツ一枚になつて、煙草を吹かさうが、靴を脱いで胡座を組まうが、扉さへ締めて置けば、一切餘計な小言なんぞ聞かんですむ。

そこで先づ二人向ひ合つて席を占め、煙草を吹かして本を開いて、讀み疲れて、睨み合つて見たが、格別話の材料もない。相手は碁を打たず、將棋を差さず、酒落は通ぜず。ドロツプを口に押し込んで、薄燒きせんべいをボリ〳〵嚙んで、汗を拭き〳〵、ウツラ〳〵と寢るばかり、退屈すること夥しい。

ロスアンゼルスから、サンタフヒイの線でシカゴに行く途中、グランドキヤニオンに着く。此汽車はキヤニオン見物の爲め、朝の八時から、午後七時半迄停車するとある。否やでも應でも一と先づ下りて、此暑いのに見物しなければならぬ。

乘合自動車に賃して、一行と共に數臺を連らねて一周を試む。名にし負ふ天下の奇勝、世界の大觀、地球の割れ目かと思ふばかりの懸崖絶壁、蜿蜒として見渡す限り遠く連り頂上はと云へば、殆んど起伏なき平面海拔七千尺の高原、ネバタ、ウタハの平野に連なる。

谷底を望めば、一條の山路かと思ふばかりに見ゆるは、コロラド河の濁流、其幅廣き所は五百尺に餘るといふ。

ドライにして濕氣といかもの少なき爲めか、樹木の大なるものなく、僅かに松樹の蟲々として散點するを見るのみ。松は日本の夫れと極めて宜く似たれど、其幹杉の如く直ぐにして甚だ趣きに乏しい。

炎暑赫々として燒きつくが如く、風を切つて走る車上に尙堪へ難きを感ずる。

谷底は正に百廿八度なりと案内者は云ふ、豈にウンザリせざる可けんやである。

夕方七時半、再び車中の客となつて出發する。明くれば我が列車はカンカラカンの荒野を走つて居る。ニューメキシコ、コロラド、カンサスのデザート、只燒け土の如き平野、樹木なく、清流なく、水溜まりなく、徒らに乾き切つた駄々廣き野原は、夜となく日となく打續いて何の旅情を慰むべき物とてはない。

あはれ一と雨降れかしと思へど、お天氣の畜生、毎日カラリツと晴れ渡つて、藥にしたくも雨など降らぬ。

思へば如何に廣き地面でも、水が無ければ草木なく、又生靈の住む由もなき、死の世界

と同然である。

水なくて何のをのれが地主哉

偶々燒け野原の岩かげに、珍らしや草が生えて居るかと思へば、鼠色の干からびた枯れ蓬の樣な、揉んで丸めて火を付けたら艾にでも成りそうな奴が、死にかゝつた病人の樣に這つて居る。

胸糞が惡い、拙者も何だか死にさうな氣になる。炎暑烈日燒け付くばかり、列車は鋼鐵製で存分の傳熱、シートでもピローでも觸れゝばボカ〳〵ムツとする。

停車場に止ると、ポーターのニグロが氷の破片を、飲料水のタンクにカラ〳〵と押込む旅客は蛇口を捻つて、其のとけた奴を飲む、全く以てドライの味を滿喫する。

漸くカンサス市に近付いて、遙かに西の空に夕立雲を見る。

黑雲墨を流したるが如く、九天直下、濃く薄く一と刷毛名工の刷いた樣に見えるのは、正に夕立が烈しく落ちて居る處であらう。遠く之を望めば、其範圍が明瞭に判る、流石に

大陸に見る大觀の一つであると思ふ。然し拙者の近邊には、雨のあの字も落ちて來ぬ。嗚呼、思へば暑いことではある、おかげを以て夢結び難きこと此處に三晩、何とか工夫は無いものかナア！。

シカゴ

やがてシカゴへ到着して、ブラックストンホテルに投宿すると、紐育のオーチスから、G氏とタイラーからT氏が、先着して迎へてくれる。

兩君の案内で、マーシヤルフイールド、ボストンストア、デビスコンパニー、フエーヤ、マンデルブラザース、カーソンピーリーなどゝいふ大商店の内部を見學する。

マーシヤルフイールドの如きは、裏面の設備はいくらでも見せるが、詳細を極めるには少なくとも、一週間は毎日通へと威嚇される。店員の案内に隨つて、地下鐵道貨物運搬の連絡、通風換氣、煖房冷房、發電、製氷、消火給水、洗濯プレス、エレベーター、電話、

コンベヤー等の機械設備から、出納計算、出荷配達、醫局病室、倉庫厨房等の内部設備等を一見するに及んで、其スケールの尨大にして、御手本として聊か大き過ぎるに一驚した

然し吾人の努力によつては、遂に此域に迄は到達し得るものであるといふ標準を、的確に示された事である。即ち小成に安んずるなといふ、教訓を受けた次第である。

試みに電力の使用量を質問すると、一ケ月百萬キロであるといひ、貨物リフトなども間口十二尺奥行三十四尺にして、十五噸を運び、大トラックに荷物を滿載したまゝ上下するとある。消火用としてスプリンクラーの設備があり、其屋上には三萬ガロンのタンクが五個並んで居る、總てスケールが一寸違ふので閉口する。

震災前に三越にも、スプリンクラーの設備は有つたが、例の激震と同時に、メーンパイプのエルボーが折れて用をなさず、エスカレーターも四十萬圓を投じて設備したものが、上と下に番人を要し（當時裸足のまゝ乘降せしめた爲め）時折は負傷者を出すなど聊か厄介視して居たが、全部燒失したので今度は此不經濟なる設備を全廢する積りで居た。

然るに今米國の各百貨店を見るに及んでエスカレーターは一臺一時間四千人の客を運び非常に有効なる働き振りを示して居り、スプリンクラーは何れの百貨店にも、設備せられて居らぬ處はない。

何事を置いても、これ丈けは是非必要であるといふ事が讀める。

ハテ、之はどうも、止めるわけにはゆかぬわいと考へ直させられる。

クリブランド

シカゴを出發して紐育に向ふ途中、クリブランドに立寄る。此處にはタイラーの本社がある、同社はエレベーターのケージ、扉、ブロンヅ類、鑄金、金網等に至る迄、各種の金屬類を製造する大工場である。

トラベル氏の案内で一見する、規模の大なる設備の完全なる、流石と思はれた。就中鍍金の進歩して居る事や、アートメタルのステインに至つては、未だ日本などの遠く及ばざ

るを思はしめる。

同社の支配人グリフヒス氏の部屋に案内せられて雜談中、職工長のD君が麥稈帽をアミダに、シャツの腕をまくり上げ、シガーを嚙みながら、汚れた手に圖面を持つて、ノソノソ這入つて來た。

支配人に向つて、ハロー、グリフヒス！ホワツト シヤル アイ ヅー アバウト ジス ケース？と、青寫眞を擴げて相談する。

グ氏は圖面を見ながら……フム〳〵……此所はこうして…ア、してと指揮して居る樣子が、恰も兄貴が弟に物を敎へて居る樣に非常に親し氣である。何等其所に階級的意識が働らいて居らぬ、やがて打合せがすんでォールライとD君は去る。

日本では一寸見られぬデモクラテツクな空氣であつた。

ユニオントラストビルディングは、最近の建築物であり、最新の設備が施されてある。

此都市に於ける、最大の建物の一つでもある。

オーチスやタイラーの連中は、此所に取付けてある、ブロンヅ製のギラ〳〵した、素晴らしい扉や、一分間七百五十呎を走る、ギヤレスエレベーターに乘せて、

サア工合は如何……とある。

御入用おかまひなしに出來た、最上等の品、誠に結構、もう澤山、とも言へず……。

シカゴ以來、エレベーターの見物には食傷して居る。

ユニオントラストの下の方は、コンマーシャルバンクが使用して居る。一寸日本と變つた點は、客の待合所の中央に一段高く床を張つて絨氈を敷いた二十坪程のオフイスがあり其廻りには、二尺五寸位な高さの手摺りが設けられ、中に卓子、椅子を並べて、副社長を初めとして、支配人セクレタリー等の幹部が詰めて居り、一般の來客に對して直接面會し如何なる相談にも應じ、不平も小言も聞いて直截簡明に處置して居る。傍ら廻りの營業カウンターで、クラークが客に接して居る狀態を監督して居る。之では店員が接客上、最善の努力を盡して、サービスを行はなければならぬ。

大將馬を陣頭に立てゝ觀戰して居る狀態が、如何にもキビ〳〵して要を得たものであると感心した。日本なら早速破落戸が、大勢强請に押しかける事であらう。

三階の一部に金庫室があり、一般市民の財產を預つて保管して居る。此方法は最近日本でも、三菱や三井信託あたりで採用して居るのと同樣であるが、金庫の兩側に三疊乃至四疊位な小さな部屋が十數室ある。何れも扉が開いたまゝになつて居て、中にはライティング卓子、文房具、椅子などが備へてある。

得意先きの信託者は、金庫から自分の引出しを持ち來つて卓上に置き、自由に出し入れして、引出しを卓上に殘したまゝ部屋を締めて出る。すると電氣仕掛で管理人の部屋に、シグナルが鳴る。管理人は早速合鍵を以て、其部屋を開き、引出しや書類を完全に整理して、秘密の漏洩したる事なく、嘗て少しの間違ひをも生じた事はないといふ、市民から絶對に信用せられて居る。

而も其間、一言の命令を要せぬとある、科學的管理の發達したるものと云ひ得る。

クリブランドでは、ヒグビーといふ百貨店が、最も良く整つて居るとあつて見學する。小チンマリとして氣持ちの宜い店ではあつたが、格別參考ともならぬ。

未だ發車には相當時間があるから、市中と郊外をドライブせよとて、タィラー會社の重役用自動車を貸してくれる。

一行四人が乘り込むと、ジョフアーが驚く勿れ芳紀正に二十才位のP嬢である。白地に黒き更紗模樣縮緬の袖無シブラウスを一着なし、黒に白の飾り付いたる帽子を眼深かに、ニッコリ會釋して、眞白な腕にハンドルを握る。其所へ小包を郵便局へ出しに行くポーターが助手臺に割り込む、實に無雜作なものである。

P嬢は四人の客とポーターを乘せて、右に左に混雜の中を巧みに運轉する、而も甚だ要領を得たもので、何等危な氣がない、嚴めしい髭面の男より遙かに感じが宜い。

日本でも此邊まで進めば、婦人の職業はまだ〳〵廣くなると思はれる。

紐育

紐育は百貨店を研究する者に取つて、最も重要なる都市であり、總てに於て代表的のものを、見學することが出來る。メーシー、ワナメーカー、ギンベル、ビォートマン、ローデンテーラー、マツクレアレー、スターンブラザーなどと數へ來れば有名なる店が非常に多い、設備も大同小異であつて、シカゴで見たるものを再び繰り返す樣なものである。

名高い店でも、古い建物はどうしても設備の點に於て遲れて居る。

フイフスアベニューに今出來上つたばかりの店で、來月開業するといふサツクス商店を見せて貰つた。是こそ最新にして又最美であり、設備が最も進歩して居て、非常に良い參考となつた。

滯在十二日間にして、ボストンに向ふ。

サービス第一

嘗て米國では、安全第一といふ言葉が流行して居た。然るに近頃では、サービス第一となつた樣である。僕が一日、某百貨店へ朝早く視察に出掛け、先づ五階の家具の賣場で安樂椅子を見て居ると、店員はスタ〳〵近付いて、三碼ばかり後の方から、

『イエースサー』

と呼びかけて、極めて輕快な明るい感じにアッテンドする。

今店內見物中ですから…と斷ると、彼は極めて自然に、オールライトサーと去る。次の階下に下りて、圖書の部に歩を進めて、表紙の模樣や本の標題など見て居ると年配の婦人店員がニコ〳〵しながらそばに來て、

『エニースペシャルライン?』

と聲をかける。今度は貴金屬の部に、ダイヤモンドのケースを眺めて居ると、若い女店

員が、

『シャルアイサービス?……』

聊か閉口して段を下りシャーツとネクタイの間を拔けて、帽子のケースに近付くと、今迄硝子を拭いて居た店員が右の指を上げて、

『ハット?』

と來た。之はたまらぬと思つて、足を左にそらせると、出口の扉に打つかつて其まゝ外に出てしまつた。

客を見たら逃すまいとする、其アクテイブな動作には感心せしめられたが、餘りに度が過ぎると、客を追ひ出してしまふのであらうと思はれる。然し何か買物が有つて出かけたら、さぞかし滿足なるサービスを受けることであらうと感心した。

是から思ふと、我々の店は品物を賣つて居るのではなく御客樣に買つて貰つて居るのである。日本に歸つたら此問題を店員に話して、せめては賣る店になりたいものだと思ふ。

夫れから歩を轉じて、ウールウオースの十仙店に行つて見る、二十年前に見覺えた店の體裁と少しも變らず、昔ながらに五仙、十仙を守つて居る。而も二十年前に買つた鋏も、今見る品も同一であり、同値である。勿論中にはレース半碼十仙、靴下手袋など片方で十仙などゝいふ、苦しい値も付いて居る。然し兎に角、二十年間に於ける物價の騰貴は、容易ならぬ物があるに拘らず、舊體依然として十仙五仙の賣値を崩さぬ處に、偉大なる經營の力が見える。是等は市民に對する大なるサービスであると感心せしめられた。

此頃非常に殖えた、カフエテリヤといふ簡易食堂に行く。簡易食堂でも、東京にある公衆食堂とは違つて、壁は大理石で張り詰め、床はモザイグを敷き、卓子は純白の大理石で椅子などは上等な革で張り、實に立派なものである。

ナフキンに包んだ、ナイフとフォークを、金屬製のトレーに載せ、硝子カウンターの前に設けてある、ニツケル製の二條のレールの上に載せて、滑らせながら進んで行くと、硝子カウンターの上には、色々な食料品が一人前づゝ皿に盛つてある。自分の欲する物をト

レーにのせて行くと、ホットデイツシエスの處にクツクが立つて居る。ステウーでもステーキでも、聲に應じて一人前づゝ盛つて渡す。是をキヤツシヤーの前に滑らせて行くと、婦人の勘定係は一と目見て、レジスターを叩いて其勘定の切符を呉れる。是を大理石の卓子に運んで、食事がすんだら出口で先きの切符を渡して、記入されたる代價を支拂つて出る。簡易にして又極めて安價である。

ホテルや料理屋で、ウエーターに給仕をさせながら、葉卷でも吹かして、勝手な事を言つて居れば二弗や三弗はぢきに飛ぶ。其上五十仙や一弗のテツプは當然である。若し夫れ之を、カフエテリヤに於て同樣の滋養分をとるとすれば、ホテルのテツプで二度や三度の食事が出來る。

又オートマツトといふ（此頃新宿二幸の地下室にある）簡易食堂は、更らに簡にして且つ一層廉である。

グロサリーが、市場で仕入れるキヤンタロープは、一個普通二仙五厘、之を五仙に賣る。

一般の家庭では、五仙で喰べられるメロンが、ホテルに行くと半分で三十仙が普通である。

肉屋のショーウインドを覗くと、牛肉の廉い處が一斤八仙から十仙位、其上十五仙二十仙とある。如何な牛肉でも百二十匁で二十錢や三十錢の品は、金の草鞋で探しても日本内地ではあるものでない。其外砂糖でもバタでもミルクでも、グロサリーの標準相場があつて、殆んど無口錢の競爭で供給せられて居る。生活必需品の廉いことは、短日月の旅行者にさへよく見える。

そこで收入の問題であるが、苟も手と足の滿足に付いた人間なら、働いて喰へぬといふ事はない。大きな聲では申上げにくいが、排日の原因となりつゝある日本勞働者の中には、五人位組合を作り、其中の一人が暫く働いて、外の奴がブラ〳〵玉でも突いたり、トランプでもやつて遊び暮らし、やがて先きの働いた者が遊んで、外の者が代つて働く。兎角一人が働けば三、四人位はどうにか消極的に喰へるといふ狀態に見ても、如何に收入が

多くして生活が廉いかといふ事が判る。

要するに人を働かせて、イエースサーと來れば、其イエスサー料がなか〳〵以て廉くない。つまり出せる者からはいくらでも取り、出せぬ者でも働けば食事には困らぬ。

未だ產を成すに至らぬ若者がオフイスに通つて、共稼ぎの女房と共に、一と間か二た間のアパートメントハウスを借り、朝は瓦斯か電氣のストーブで茶を沸かし、卵とパンでも燒いて簡單に朝飯をすませ、晝はオートマットかカフエテリヤで、輕い辨當をとり、夜は時間と場所を打合せて妻君と待合せ、一緒に夕食をすませて、トーキーでも見物し、散步でもしながら仲よく、一と間のアパートに歸つて寢る。夫婦互に收入を蓄積して、老後の用意をするのである、かくて適當なる時期に及んで、完全なるホームを形成するといふ事になる。

アパートメントハウスにも大小上下と階級が色々有つて、家族の數と富の程度に應じて、自由に撰擇する事が出來、贅澤な部類にはホテルと同樣、社交室もダンスホールも、讀書

室も遊戯室も、自動車庫も皆完備して、入口にはオフイスが有る、何でも居住者の用を一切便ずる、實に金持にも貧乏人にも都合よく社會が組織せられてゐる。

一日ロスアンゼルスの郊外を、ドライブして見ると、地面が乾いて赤茶化た、ボコ〳〵な濕り氣もない土で、とても花や果物が出來さうにもない。雨は十二月に少々降るが、夫れ以外は決して降らぬといふ。流れも河も水溜りもない。如何にして深綠滴たる所、黄紅紫白の花が咲き、綠草壇を織り成す庭園を造り、夕陽輝くほとり、黄金の果實累々たるを得るかと、不思議でならぬ。試みに之を米人に質すと、彼は得意然と、咳一咳して曰く、一人當り一日二十五仙位の費用を投じ、百二十餘哩の山奥から水を引き來つて、飲料雜用共に充分供給して居る。而も芝草青き所には必ず縱横にパイプが敷設せられて、日中絶えず噴霧せしめて居る、なんぼ土地が乾燥してゐても、これなら芝は青く生き〳〵として居られる。

町外れの野中の一軒家にも、水道や電氣は充分に供給せられてある、其尨大なる設備と

豐富なる供給力には感嘆せざるを得ない。

一日此羅市の某カフエテリヤに、簡易なランチを喰べに行つて、食事の勘定の切符を受取り、其裏面を見ると、此營業の利益の九十九パーセントは、從業員に分配せらるゝものである、と印刷せられてある、是亦大いに感嘆せしめられた。殘念ながら日本には金と太鼓で探しても此樣な思ひ切つた商賣振りの店は一軒もあるものでない。凡そ從業員に對して此樣なデモクラテツクなサービスを行ふ資本主は一人も有るまい。

オーチスはエレベーター製造業として、世界最大なる會社であり、三越のエレベーター及びエスカレーターは皆此會社の供給したものである、將來も亦注文する事であらう。そこで先づ此會社を桑港及び羅府に訪問して、同業商店の裏面の設備を見せて貰ふ紹介やら案内やらを賴んだ。

僕等一行視察の報を受けた紐育の本社では、輸出部支配人のグランジエラー氏と、姉妹會社タイラーの(裝飾金物製造)トラベル氏とを、シカゴのブラツクストンホテル迄出迎へ

に出張せしめてあつた。

大いに恐縮した次第であるが、シカゴ、クリブランド、紐育等の各百貨店を懇切に案内してくれ、如何なる質問も相當調べて敎へてくれる。御蔭を以て視察上非常なる便宜を與へられた事であつた。實に其サービスの行屆いて居るには一驚を喫せしめられた次第である。サービスと云へば、ジェネバにグランパツサージといふ百貨店がある。御客に對するサービスとして、一週間の中一日は、總ての商品を無代で提供するといふ、誰も信ずる者は有るまいが、事實であるから可笑しい。

グランパツサージは、猶太人の經營する百貨店で、各週間の初めに於て、前週中の何れの日かを主人が考へて定め、之を新聞に左の如く廣告する。

前週水曜日に、當店に於て御買物をなされた御方は、其請取書を御持ち下さい、現金と御引換へ致します。

之を實行したから、サア大變、非常なる評判となつて、我も〳〵と此店に押かける。少々値

段が廉くあるまいが、品物に多少不滿足な點が有ろうが、苟も買物が有れば先づグランパツサージへ行くべし、割戻しの日に當れば、何千圓の買物でも只になる。

是が爲めに此店は、毎日押すな〳〵の盛況で其賣上高が平常の數倍に增加した。其結果資本の回轉が激增して、結局非常なる純益を增加したといふ。

成る程よく考へて見ると、西洋の小賣商は、日本の夫れと異り、純益の割合が非常に多い、最も薄利なものでも三割から多きは五割以上に及ぶ。假りに之を平均三割五分として、平常の賣高が一日五萬圓とすれば、其賣益は一萬七千五百圓となる。割戻し制度によつて賣高が倍加したとすれば、一週間（日曜休業）の賣高は六十萬圓となり賣益は二十一萬圓となる。此賣益の中から一日の賣上高拾萬圓を割戻しても、尙且つ十一萬圓の賣益を餘す。

然るに普通毎日平均賣上高五萬圓の六日間の利益は十萬五千圓であるから、結局五千圓の賣益增加といふ計算になる。況や數倍の賣上增加となれば、其賣益も亦非常なる增加を計上すべきである。

此大膽なる商賣振りは、流石に個人の經營による、度胸一點張りのスペキレーションであつて決して正兵ではなく、奇兵を用ひたるもの、各店競爭の手段を盡して、結局行詰つた局面を、乾坤一擲のヤマコで轉回せしめたるものに外ならぬ。但し日本の百貨店の如く賣益率が精々一割乃至一割五、六分位の有樣では容易に決行せらるゝものでない。

然らば一ケ月に一回とか二ケ月に一回とかいふ事にしたら、と言ふ人もあらうが、割戻しの期間が一週間といふ短かい處に効果があると思ふ。何は然れ之が爲めに、他の百貨店は非常なる影響を受けて、上つたりの有樣となつた。

是ではたまらぬとあつて、各店夫れ〴〵工夫を凝らし、福引を付けるやら、景品を添へるやら、大割引大安賣と一勢に馬力をかけて、之に對抗した爲め、購客は買物するは今なりと計り釣り込まれて、銀行預金の引出額は忽ち激增して、一ケ月數千萬圓に及び、遂に政府が干渉を加へて、此競爭を停止せしむるに至つたといふ。

是等はサービスの中でも、振つた思ひつきで聊かインチキサービスに屬する。

紐育三井物産のT氏の家に、一人の日本書生が居たが、ある時盲腸炎に罹つたので有名なる博士に依賴して、立派に手術をして貰つた。手當も看護も充分行屆いて美事に全快したが、請求のビルが二千弗と有る。書生の身分でなか〳〵拂へぬから、事情を話して、今少し何とかならぬものかと相談に及ぶと、何？書生か、夫れなら宜しいとビルに棒を引いて呉れた。餘り氣の毒なので、二百弗計りの禮物を持たせて御辭儀をさせたといふ。

資産の有る者ならば幾らでも取るが、力のない者には只でも療治してやる。誠に明瞭なるソシヤルサービスが行はれて居る。

ツラ〳〵米國の社會組織を見ると、上は政府より自治團體、交通機關、學校、教會、病院、ホテル、劇場、クラブ、商店、工場等に至る迄、車に乘るにもレデースファースト、道を行くにもアフターユーと、個人の間にも行屆いたサービスが行はれて居るのに感心はする——。

と、斯う言へば、何でも彼でも亞米利加崇拜の樣であるが、必ずしもさうではない。頗

る感心せぬ事もある、蛇足ではあるが、以下其感心せぬ處を少しく書いて見る。

生活難結婚難

偖諸君！と言つて見た處で誰も居らんので甚だ張合ひがないが、考一考すべき問題がある、曰く生活難！

茲に紅顔の紳士と玉姿のレデーがある、豫て約束の時節到來して、樂しき結婚のシーンとなり、甘きハネームーンも濟んで、一つの家庭を結んだとする。歳月流るゝが如く玉の如きベビーが出來たとする。忽ち一人のメードが必要になる。給料が最低六十弗、別に一つのルームを與へ、食事を給する事勿論、毎日コーンビーフ計り喰はせて置けば、逃げ出す事勿論、サンマーベケーション位に連れて行かなければよい顔せぬ事も亦勿論である。

其中に手が觸り足が觸つて、又一人のベビーが殖えるとすれば、更にナースが必要となり、ガバネスが欲しくなる。隨て產すれば隨てサーバントの數を増すの必要に迫られる。

六十弗の給料は百二十弗となり百八十弗となる。茲に於てか紅顔の紳士も、玉姿のレデーも、其收入にして之に伴はざらんか、忽ちにして夫婦親子の干物が出來上る。

餘り感心した格好でない。

傍で見て餘り羨ましい樣な景色でない。

產兒制限法の行はるゝは當然である。

彼等に言はしむれば、正に是れ正當防衛である、殊に亞米利加の婦人は、郎君と相携へて、錦繡の輕羅を飾つて社交界を賑はし、舞踏會の音樂に夜の短かきを嘆じ、お芝居やトーキーに夢中にお成り遊ばす事は大好きであらせられるが、ギヤー〳〵泣く赤ちやんのオシツコの世話などは大嫌ひで御出で遊ばす。

夫れかあらぬか老孃が非常に多い、最早や四十か五十にも成らうかと思はるゝ大年增が何を喰べたか、雲岳女史よろしくといふ體格に、白粉をコテ〳〵と塗り立て、縮緬皺を埋め、品を作つてお出遊ばすのを、劇場やホテルの食堂などで見受ける。又五人三人パーデ

ーを作つてブラ〳〵して居る旅客をよく見掛ける。

此年頃まで獨身で暮すと、人間が稍々中性になつて、どこかウイルが強過ぎて、寄付き難い樣な氣がする、曰く結婚難。

大きにお世話とあれば夫れまで——。

然しアニマルパツションは何とか要領よく滿足せしめ……。

オーシヤツトアツプ！。

ヤンキーガール

凡そ世に、低級なヤンキーガール程小癪に觸る者はない、高慢痴氣で、セルフイツシで虚榮心が强くて、格別誇るに足るべき何物も無い癖に、男子を奴隷の如く考へて、男はレディをヘルプする爲に出來たものだと思つて居る。

又ヤンキーボーイなるものが、鼻の下の長いに驚く。有色人種に對しては、絶對優越權

を持つて居る樣な面をして、あらゆる壓迫を加へ、暴威を振ひながら、女に對しては頗る意氣地がない。公衆滿座の中で、女房の靴の紐を結んでやる、並んで歩く時には、手をとつてやる、外套を着せてやる、ショールを掛けてやる、女房の手荷物を持つて、赤ちやんを抱いて御供をする、何か御機嫌を損じて横面をビシヤリとやられても、其手にキツスして……アー胸糞が惡い。

偖又其駻馬の如きヤンキーガールが流行に對しては馬鹿に柔順で、八月の炎天汗をかきながら、流行とあれば毛皮の襟卷を肩にかけて、夕方になれば、衿と裾に毛皮のドツシリ付いた外套を着てすまして居る、冬のシベリヤでも旅行する樣な紛裝で……。

一體暑いのか、寒いのか.と言ひたくなる。

百貨店では八月毛皮賣出(オーガスト・フーセール)しといふ廣告を出し、店頭には盛んに毛皮が陳列せられてある毛皮は防寒用品とのみ考へたら、米國では大違ひ、暑中でも裝身用に毛皮を用ゆる、蓋し夏の毛皮と冬の毛皮とは違ふといふ。

格別用もないから、どう違ふか聞きもしなかつた。

靴は成るべく小さく見えるのがよいとあつて、甲の肉が靴の外に嚙み出しさうなやつを無理に嵌め込んで、痛いとも何とも言はずに我慢して居る。

之を要するに寒帷子であらうが、土用布子であらうが、流行とあれば其是非を論ずべき限りでない。實に米國に於ける流行の權威は絶對にして犯すべからずである。

夫れに此頃では、綠の黑髪、いや玉蜀黍の金髪銀髪を、衿足の邊から切拂つてモダン刈りといふのに刈り上げた、バーブヘヤーが流行して居る、活潑なのになると、男か女か見分けかねる。車中つれ〴〵なるまゝに、バーブヘヤー觀といふのを書いて見たから、一寸御覽に入れる……エヘン……

夫れつら〳〵米國の流行バーブヘヤーなるものを觀るに、前より之を望めば眼と鼻が顏の眞中に付いて居るから、散切り頭で濟んで行くが、之を後ろから見るに及んでは、或る者は松茸の笠の如く、或る者は毛ばたきの如し。若し夫れ、ニグローのバーブヘヤーに至

つては、摺り切れたる大砲の筒拂ひに似たりと言ふべきか。

一體どこが宜くつて、此樣な髪が流行り出したものか、尻の巾と來たら、三人前も有らうといふ、偉大なる肉體の中婆さんが、むく毛だらけな肌に白粉をコテ〳〵と叩き付けて大風が吹いたら白煙りが上りさうな面に、バーブヘーヤーの散切髪を燒鏝にチヾらせデブデブと豚の如く油ぎつたる肉體に、袖なし上半身半裸かのコスチユームは、紅地白上りの更紗縮緬とある。而も偉大なる尻の上で、付け紐の如きやつをチヨキンと結んで、殘りをだらりと下げたる寢間着の如きを一着なし、わざ〳〵御苦勞樣に、脇の下の毛迄拔き去つて、そばかすだらけな腕を自慢さうに肩から放り出し、綠蔭深き處、ビヤ樽の如き藥罐頭のスキートハートを擁して、私語喃々する有樣は、二た目と見られたものにあらず。どこを押せば、此樣な氣まぐれな事が、人前で出來るものぞ、人間といふ奴は一體氣の知れぬ動物である。

若し夫れ、此ミスターピツグと、ミスグツクのスキートハートが舞踏室に相擁して、挑

發的なる音樂と共に、ヨチ〳〵と大道臼を振り廻すに至つては、何と形容の仕様もない、踊ると云ふよりは寧ろヨイ〳〵が運動に出て、自動車に轢かれ損ねたといふ格好である。

かやうな所が所謂

はたの見る眼じや可笑しいけれど
迷はにや其理が判からない

とでも云ふ處である。他人の尻ならとうの昔に見放して居る所であらうが、御自分の所有物とあつて、どうにか斯うにか持堪へて居る。

何？小人島の旅人だ？。

箆棒め！只今拙者の事を兎や角言つて居るのではないゾ、氣を付けろ……。

ハツクション！。

ロックスミス

中村君は、横巾に於ては六尺豐かの大男にも決してひけを取る者でないが、高さに於ては僕と同樣、甚だ以て振はざるものである。正直な處、五尺に足らざる事正に何寸何分といふ處である。

然るに僅か二三ヶ月の旅行に、御自分より大きな鞄と其外に、中形、小形都合三個を携帶して居られる。其大なる奴に至つては、片手に提げる事は勿論、滿身の力をこめても、擔ぐ事さへ覺束ない位のものである。此樣な澤山な着物をどこへ着る積りかと聊かあきれる。

今日はヒラデルヒヤの各百貨店を視察して、汗にまみれてホテルに歸り、下着を着換へるとあつて、例の大鞄を、ベッドの下からエンヤラヤツと引摺り出し、ポッケットに手を入れる、偖如何にしても大切なる鍵が見當らぬ。大方無頓着な先生の事であるから、手巾と一緒に引張り出して、何處へか落した事であらう。

『ヤッ？しまつた！君鍵をなくした、どうしやう？』

見れば先生の大鞄には、革のベルドが二本嚴重に廻して有つて、夫れに鍵が掛つて居る。

『其帶革を切放せば開くだらう』

『此奴を切つたら、あとの締りが困るね』

『夫れなら其まゝ日本へ御持歸りかね？』

『イヤ夫れも困る』

『では愈々メスを奮つて切開するさ、ハツハ…』

『先づ夫れより致方無しかね』

澁々ナイフを取出して、帶革を切らうとするい、先生存外正直である。

『まあ待ち給へ、何とかなるだらう』

そこで電話でクラークを呼び出して、鍵屋を僕の部屋へ直ぐ來る樣にと賴む。

五分もたゝぬ中に、コツ〳〵扉を叩く音がする。

『カムイン！』

ガチヤ〳〵澤山の合鍵をぶら下げて、汚な洋服汚なシヤツ、汚なネクタイ汚な靴、油だらけなロックスミスが、ホテルの地下室から活動寫眞の無賴漢の樣に這入つて來る。

『此鍵を失つたから、君、一つ開けて呉れ給へ』

『オールライトサー』

ガチヤ〳〵十分計り色々な鍵を合せて居たが、其中美事に適中して、手もなくガチンと開いた。先生ニヤリと笑ひながら、左の手に鍵をのせて、右手を上げて敬禮をする。蓋し若干のチツプを要求するのである。

中村君破顏一笑、サンキューと鍵を受取つたが、僕の方を向いて、五十仙もやるかね？と仰有る。

少なくも一弗やるさ……と僕が答へる。

先生澁々一弗取出して、彼の掌にのせる。

彼は一寸首を下げたが、上目づかいに口を一寸曲げて、タツタ一弗かといふ表情を殘して去る。

中村君は一寸變つて居る。必要なる鞄の鍵は捨てゝしまふが、不必要なるホテルの部屋の鍵は後生大事にポツケツトに入れたまゝ出發してしまふ。

旅行途中汽車の中で、ヤツ！又ホテルの鍵を持つて來てしまつたとて、郵便で返戻に及ぶこと二回、最後の一回に至つてはエー亦か、面倒臭いと仰有つて、其處らへ捨てゝおしまいになる。

鍵を持ち去ること三度に及び、誠に以て面倒至極ではあるが、捨てゝしまはれたホテルこそ宜い面の皮である。

マウントバーノン

シカゴ、クリブランド、紐育、ボストン、ヒラデルヒヤと、短日月の間に大急行で飛び廻り、金曜日の午後七時ワシントン市に着し、ニューウイラードホテルに投宿する、實に東奔西走、椅子溫まる暇もなしといふ處である。勿論此暑さに、椅子など溫めて居る必要もあるまい。最早黃昏とあつて視察も出來ず、一と風呂浴びて、道中の垢を流し、風を入れて一と息すると既に九時。

やれやれ此暑いのに亦シヤツを着て、ネクタイを結んでヅボンをはいて、夫れから上着もチヤンと着て、拠ローストビーフでも嚙みに行かなければならんかと思ふと憂鬱になる浴衣がけに兵兒帶で、笊そばを冷たいビールと共に、ツル〳〵ツとやつたら…と思へど、左樣なわけには參らぬのであるんである。

久しぶりに靜かなワシントンのベツドの上で、存分疲れた夢を圓かに結びたいと思つて來たのに、電車や自動車の雜音が馬鹿に騷々しい、畜生！又今夜も樂々とは寢かさぬ積りだな……。

翌日は土曜日とあつて何れの店も休みが多い、まゝよ今日は見物と極めて、朝よりサイ

トシーンカーに乘り、キヤブタル、コングレスライブラリー、ホワイトハウス、ナショナルミュージアム等を見物し、午後から郊外十五哩の、マウントバーノンに出掛ける。

途中アレキサンドリヤといふ町に、カーライルの家を見る、アレキサンドリヤは此ステーツで最も古いタウンである、人口僅かに一萬五千人位の町であるが、昔は此ステーツ第一の都會であつたといふ、一向發達しないので今もなほ昔其まゝの姿で、文化に取殘されて居る。

マウントバーノンはジョージ、ワシントンの住宅地であり、永眠の地である。其家は小高い岡の上で遙かにポトマック河の流れを眼下に眺め、老樹蓁々として幽邃閑雅なる處、此偉大なる人格者の住居に甚だ相應しい處である。家屋も什器も家具も、永眠のベッドも在りし昔のまゝに殘されてある。ワシントンの傳記を回想して、今此偉人のラストベッドに對するとき感慨の無量なるものがある。

心なきヤンキーの有象無象の靴の引摺る者毎日引きも切らず、階段を踏み落して今は鐵

骨で補強してあるとやら、此偉人の遺物に接して、蚊が喰つた程にも感ぜぬバーブヘヤー共——。

ミスターワシントンは今留守かね？とでも言ひさうな面をして居る。

黄金の浪に醉ふて建國の昔を忘れ、雜馬の末路でも夢見て居る事であらう、苦々しい…誰だ！シヤツトアツプとぬかし居るのは…。

歸朝

ワシントンを出發して、再びシカゴに寄り九月四日シカゴを立つて桑港に向ふ。

一向面白味もなき、大味な沿道の景色を眺めながら、成す事もなくウツラ〳〵と西に向つて走る。六日の朝覺むれば身は既にロツキー山の頂上に在る、海拔正に七千尺、高原平坦、石灰岩の蜿蜒として起伏するを見るのみ、雜草まばらなる疲せ地に、樹木とては一本もなく、風情のない事夥だしい、是が音に聞く、いや現に見るロツキーの一部である、何

時登つたのか氣が付かなかつた、午後二時オークランドに着し、初めて北方に當り、近く一連の山脈を望む。

三時四十分頃ソートレーキにかゝる、此鹽水湖、長さ九十哩巾四十哩、埋立てた個所七十哩、木橋を架する處三十哩とある、此大湖水の木橋に鐵路を敷設して、列車の横斷する所、流石に大工事である。湖水の鹽分凡そ二十パーセント、人が投身しても沈むことは出來ぬとある、若し命いらぬ人が有つたら先づ他所に行く方が安全であるといふ、イヤ安全でないといふ、まあどちらでも宜い。

此湖水海拔四千五百尺、其昔は深さがロッキーの中腹迄もあつたもので、今も其當時の水線が岩石に示されてあると地質學者は主張する、して見ると、段々乾いて小さくなつたもので將來は無くなつてしまうものであらう。昔の水線迄水が有つたとしたら、世界最大の湖水であると云ふ、まあ夫れもどうでも宜い。

翌くる七日の早朝には、海拔七千尺のネバタ山脈の絶頂に達する。遙かにドネア湖を望

み、脚下は斷崖數十丈、松杉の蟲々として林立せるを其頂邊より見下す、山腹を縫うて進む線路は、悉く木材を以て雪除けのトンネルが蜿蜒數哩に亘つて造られて居る、中々の大工事である。

水も湧かず草木も生えず、生靈もなき死の世界、炎熱燒くが如きデザートにも、海拔七千尺、積雪峯を沒する高山にも、キャンプを張り薪水を運んで鐵道を敷設し、交通を便にし富源を開拓して今日の繁榮を極めつゝある、亞米利加人の努力に敬意を表する。天與の富源は建國以前からある、手に唾して之を得たるは、亞米利加人の努力でなければならぬ。

午前十時、アメリカンといふ山腹のステーションに着く、河の巾五百尺と稱せらるゝ、アメリカンリバーは遙かに二千尺の脚下を流れ、樹林の間に隱見し、只見る一條の谷川のチョロ〳〵と流るゝ如く、流石に大なる景色である。

オークランド市からフェリーで桑港に着いたのは午後三時である。

桑港に船待ちすること五日間、九月十二日愈々バーブヘヤーと、クレージーダンスと、ニヤビヤと、ビーフステーキにグードバイして味噌汁とおさしみと米の飯の國に歸る。いや四分板と亞鉛バラック、臥薪嘗膽の國に歸る。

ヤンキーさらばと、天洋丸に乘り込む。

かくて風靜かに渡穩やかに、船中三越の修築プランを作ること三度、再び布哇を經て九月廿八日無事横濱に着く。

格別米國で、これぞと取立てゝ得たる處もなけれど、一見は想像や百聞に勝り、ベターザンナツシングといふ、結果となる。由來苦心慘膽の歳月は流れ、三越の修築は日に月に進む。

下足問題

震災以前には店内一面に莫蓙を敷き、階段には赤き絨壇を敷きつめて下足を預り、靴に

は一ち〳〵カバーを掛けて客を迎へたのであるが、震災直後のバラックに、土足のまゝ客を迎へて、一たん其利便を味ふては、再び元の通り下足を預ることとは、相互の手數不便甚だ以て堪へ難い。

下足の問題については、米國で參考となるべき何物かを見學して來いと、木によつて魚を求むる樣な命令を受けたが、豫定の通り鉦や太鼓で尋ねても參考となるべき何物も有る筈がない。

千思萬考の末、今度の修築には、斷然寄せ木の床となし、ある處は大理石、タイル、ゴム等を張り、土足のまゝ客を迎ふることにしてしまつた。而も尙店内の飛塵雜音等を何としたものかと、甚だ氣づかつたのであるが、木材の床には重油を塗つて、塵埃を吸收する方法をとり、他の材料を用ひた床も下足の手數を精々掃除の方にかけて見る。處が結果は案外良好で、寧ろ成功といふべきであつた。

成行き如何にと注目して居た、他の同業各店も此有樣を見て、一齊に之に習ひ、今では

下足を預る百貨店など一軒もなく、昔の夢となつてしまつた。

復興工事完成

諸君！愈々三越復興の工事を終つて、此處に其概要並に一般經過を御報告致すは、私の……幸平……いや光榮とする所で……ある、

シツカリ？

扨、修築の工を起したるは、大正十三年十月一日、即ち歸朝の直後である。かくて工事は着々進捗し、翌十四年九月十五日には先づ西館の竣成を告げ、十五年六月二日には、更に中央館成り、昭和二年三月末日遂に全部竣成の運びとなる。

當初より日數を閲すること、實に九百十一日、破壞に凡そ二萬三千人、修築に凡そ二十五萬七千人の人工を要した。

全館の面積は延坪八千七百六十一坪、修築に要したる主要材料は、補强鐵骨七百七十噸

鐵筋一千四百噸、セメント三萬四千樽、コンクリート一千八百五十立坪、石材一萬二千立方尺、大理石十萬七千平方尺、側壁化粧煉瓦九十九萬個等である。

耐震耐火の建築としては、鐵骨鐵筋コンクリートが、現今に於ける理想的構造とせられて居る。

蓋し建築に此構造を應用したるは、極めて新らしいことで、西暦一八六七年、佛人モニエー氏が、鐵筋コンクリートを以て、植木鉢を造り出して特許權を得たるに初まり、之を獨逸人ワイス氏が買收して、伯林のキエーネン氏と共に研究し、學理的に强度を算出する方法を示したのである。

受賣り！（と聲がかゝる）

一八七一年米國シカゴに大火があり、續いて翌年亦ボストンにも大火あり、爲めに建築の構造に之が應用せられ、遂に斯界に一大革命が遂げられるに至つたのである。

最初シカゴの火災復興に、鐵材とコンクリートを應用したが、忽ち米國各都市に流行す

るやうになり、其後屢々開催せられたる大博覽會の爲めに、建築は長足の進歩を遂げ、二十世紀に入つては、商業建築が米國建築の本體となつて、盛んに事務所建築が勃興し、一方學術の進歩と共に、摩天閣は各所に出現し、遂に今日の鐵骨鐵筋コンクリート建築の隆盛を見るに至つたのである。

然し米國の建築は、其高層なる點に於て、世界に比肩すべきものは無いが、未だ耐震的に理想建築とは言ひ得ない。

若し紐育やシカゴに、先年東京にあつた樣な大地震が起つたならば、如何なる慘狀を呈すべきか、實に測り知る可からずと寒心するものである。即ち彼地の建物には未だ耐震的には何等の考慮も拂はれて居らず、構造上種々の缺點があるのである。

其缺點を十分補足した、現代の理想的建築法を應用して修築せられたのが、即ち我が三越の建物である。

本館は在來の鐵骨柱に、一吋バー三十六本宛を補强し、是をコンクリートで嚴重に固め

ビーム、側壁、床等も亦之に準じて頑丈を極めたものである。

萬一、前年の大地震の二倍以上の强震が襲來しても、我が三越の建物はビクともするものでない。

簡單〳〵？

是に加ふるに、煖房、冷房、通風、バキユムクリーナー、汚水淨化裝置等の衞生設備より散髮、美容等の新設備、七百餘人を容るゝ演藝ホール、展觀用ギヤラリー等の娛樂的設備、エレベーター、エスカレーター等の交通機關、スプリンクラーと稱する自動消火設備、發電、製氷等の機械設備に至るまで——

ヨシ！判つタ！

最新の智識と最新の！

オイ〳〵止めろッ

辯士引込メッ！

ウヘッ！では此邊で打切りまして、最後に三越の歌をお聞きに達します。

三越の歌

白亞高塔天を摩し
商旗を空に翻へし
勇者の意氣を君見ずや

東に筑波西に富士
三百年の昔より
同業界に覇をなして

狂瀾怒濤の難航も
商運我に幸あれど

赤地に白き越の
我に續けと獅子吼する
是三越の姿なり。

江戸の中心日本橋
動かぬ基礎の上に立ち
守るは誠の一字なり。

先人努力の汗により
榮枯は常に定めなし

大三越の運命は
懸つて吾人の肩にあり。

吾人の意氣の燃ゆるとき
吾人の汗の浸む時

我が商運はいや榮え
我が信用はいや高く

マークの光燦として
王者の冠を戴かん

吾等は徒手の勇者なり
吾等は富の基なり

子孫に殘す美田なく
堤を築く糧なくも

働らく腕に汗足りて
瀨惰の友に鞭打たん。

夫れ營業の繁榮は
從業員の力なり

宜きサービスを行ふて
良品廉價の實を擧げ

正しき道を踏みなして
永久の勝利に赴かん。

社會の徵

昔は赤鞘の大小を腰間に横たへ、黑羽二重の紋付きに献上博多の帶を卷き付け、月代の延びた浪人者が、酒の勢ひを驅つて飲み倒し喰ひ倒し、强請押借り亂暴狼藉、何か因緣を付けては良民や商家から黃白を絞る。豆絞りの手拭に入墨の兄いが、何か一寸した穴を見付け、柄のない處に柄をすげて、眞面目な商人の店先きに尻をまくり、鉈豆の煙管を咥へて厭がらせを並べ立てる。商賣の邪魔になるから若干の黃白を包んで歸つて貰ふ、之は芝居でよく見る筋である。星移り物變つて、樣子が大分違つては來たが、働らかずに錢を欲しがる手合ひは中々つきない。

僕が營業部に居た頃である、ガチヤン！と手荒らく扉を開けて這入つて來たのは、其頃有名なゴロで『Sグロ』といふ男である、痩せぎすな小男に似合はず、鼻柱が馬鹿に强い今日は三人ばかり供が付いて居る。

『ヤア失敬！今日は友人を紹介する』

と後ろを顧ると、三人等しく着て居た外套を脫ぐ、下には黑天鵞絨のルバシカに昏金の緣付き、腰には昏金毛糸の太と繩を締めて、結び殘りをダラリツと下げて居る、三人共同じユニホームである。

彼氏の腰かけた椅子の後ろに、此ユニホームのロボツトが三人ズラリ並んで立て居る。昔英國の山林中に住んで居たといふフードロビンが、何か掛合ひ事にでも來た樣で、一寸ドラマチツクな光景である。

僕は默つて見て居たが、

『何か御用ですか？』

と靜かに口を切る。

『一寸營業部長に逢ひに來たんだ』

『夫れなら取次ぎの子供に、都合を聞かせてから來たら宜いじやありませんか、それに

此部屋は我々の事務室で、人に見せて惡い書類も扱つて居る。無斷でヅカ〳〵這入り込んではいけませんよ』

『なあに…營業部長は至極懇意なんだ、夫れに今日逢ふ約束がしてある』

『いや、懇意でも何でも有りません、夫れに今日逢ふ約束なんぞしませんよ』

『何……君は何だ?』

『僕は今君のいふ營業部長です』

『違ふ!そんな小さな男じやない、眼鏡をかけた、鼻の尖つた、もつと大きな男だよ』

『あゝ、夫れなら竹内君だらう』

『そ!其竹内とは何ですか?』

『次長ですよ』

『怪しからん奴だ、僕にはチャント營業部長だとヌカシ居つた』

『別に怪しからん事はないさ、部長不在の時は代つて責任を負ふべき人だ、況んや君達

に對してさう言つたからとて何が怪しからん』

彼氏は一寸面喰つた、人間違ひして極りが惡い、テレ隠しにブツ〳〵何か口の中で言ひながら僕の顏を斜めに睨んで居る。

其時扉を排して本人の竹内君が這入つて來た。彼は矢庭に立ち上ると、竹内君の胸倉を取つて小付き廻す。

竹内君は大學では柔道の選手で、何段とやらの剛の者である『Sグロ』の蟋蟀め今にヒネられるぞと見て居る中に、事務室から血の氣の多い連中が二、三人飛び出して、

『オイ亂暴するな!』…と痩せギスの彼を摘まんで部屋の外に押し出す。三人のフードロビンもマゴ〳〵しながら、出てうせた。之で今日は要領を得させずに歸してやる。何れ又何とか因緣を付けて來る事であらう。

僕がある朝細かい豫算表を熱心に製つて居た時、突然デスクの前に椅子を引張つて來て腰かけた男がある、見ればよく外ながら顏を知つて居るY某といふゴロである。

『先生！今日は是非御願ひが有つて來たんです』と如何にも十年の知己の樣な面をして馴れ馴れしく話しかける。

『どなたです？、今手の放されない用事をして居る、斷りなしに這入つて來ちやいけませんよ』

『まあ先生！さう言はずに是非一とつお願ひです』

と先生を連發する、厭やに厚顏しいやつである。いや厚顏しさは十年も前に通り越して其ズウ〳〵しいこと驚くの外はない。此樣な奴に四の五の理窟を言つても初まらない。匙を投げて、偖て何の用かと聞いて見る。

『實は其藤田先生の處の御子息が、お亡くなりに成りましてね』

『ウム夫れは知つて居るよ。誠に御氣の毒千萬な事だ。處で夫れが君どうしたと言ふんだ？』

『實は平常御世話樣になつて居るので、香典をと思ふが、生憎無一物と來て居るんで、

十圓ばかり先生……御願ひしたいんですが』

非道い奴である。人の不幸を道具にして泣き落しに來居つた。

『藤田さんは君などから香典を貰つたら、却つてお困りになるよ。それより志が有るなら一言眞面目に弔意を表して來れば宜いじやないか』

『いや！先生！夫れは又さうでないですよ』

と挺子でも動きさうにない、一寸仕事の邪魔にもなる、今朝電車の回數券を買つて、嚢口の中に小錢が、三圓なにがし有るのを覺えて居る。

『じやあ仕方がない。月給取りは月末にならなければ金はないよ。君に見込まれたのが因果だ、潔よく全財產を提供するから持つて行き給へ』

と、ポケツトの嚢口を開いてデスクの上に打ち開けると、銀貨銅貨取交ぜて三圓七十六錢。

『先生冗談じやない、是ではどうも…』

『さうか、是でも僕に取つては粒々辛苦の汗、小判の端しだ。是で月末迄小遣ひを支へる積りで居たのだ、いらなければ元の袋に納めて置くさ』

と錢に手をかける。彼氏は一寸面喰つて、

『エッ、マア、先生是だけでも仕方が有りまん、貰つて置きます』

と大急ぎで掻き集めて去つた。

後で聞けば、飯島君の處に行つて、三圓の銀貨を五圓の札に換へて貰ひ、香典として藤田君の宅に持參したさうである。果せる哉、藤田君も困りはて、結局二十圓計りの物を呉れて、一件の取引落着に及んだとある。

甲某といふのがある、大兵肥滿身の丈け五尺七、八寸、體重廿五、六貫、鼻下に濃い髭を蓄へてニコ〳〵したる比惠壽顏、年中酒に醉ふて熟柿の樣である、是が又人の顏さへ見ればペコ〳〵して近付く。

『先生？エー、ウムー私は先生と鄕里を同じうする者でありまして……エ、……どうぞ

……ウム…何分宜しく……御援助を…』と來た。

『はあ、僕は君と鄕里を同じうするですか、それはどうも光榮の至りですなそれで君、御援助とは……金でもくれと云ふ事ですか？』

『ウム……ハツハア……早く言へば…先づ其邊で…何分宜しく……』

をそく言つても同じ事さ。

『僕はね、働く人には同情するが、働かないで酒ばかり飲んで、人の處へ黄白をねだつて歩るく人は嫌いです、君なんぞ立派な體して居ながら働げば押し出し丈けでも相當の收入にはなるよ、君だつて親も有るだらう、其有樣では家族の者が可愛さうだよ、一つ心機一轉してくれ給へ、同鄕のよしみ是非賴むよ』

と捲くし立てる。元來訥辯の上に、聊か醉つて呂律が廻らない。受け答へにヘドモドして、ムニヤ〳〵と去る。

其後も度々來るが、醉ッ拂ひとは話はせんよ、僕に用があるなら、酒を飲まずに來い、

酒臭い奴と話をするのは大嫌ひだと取合はない。其後珍らしく酒氣をおびずに來た、而もモーニング白衿で堂々たる風采である。

丁度其時乙といふ之も矢張り働かずに錢を欲しがる原稿屋が來て居て、甲とも知り合ひの間柄であり、乙は甞て甲の爲めに何かの言ひ爭ひで張り飛ばされたことがある、幸ひ此二人を一緒に押つ拂つて呉れやうと考へた。

乙と僕は向ひ合つて話をして居たが、やをら甲の方に向き直つて一喝した。

『ヲイ甲君！今日は大層改まつて、身なりも非常に立派になつて來たね、それでは誰れも錢貰ひを商賣にして居るとは思ふまい、着物は立派に改めても、心の方を入れ換へなければ駄目だよ、拙者の所へ來るならば、其心迄入れ換へて來い！』

と高飛車にヤツ付ける。

先生出ばなを挫かれて、ヘドモドしながら頭を掻いて時利あらずと、コソ〳〵去る、後ろ姿は中々愛嬌がある。

乙も此勢ひに一寸驚いて、多辯を弄するに及ばず、之も此日はそこ〳〵に去る。甲は僕に對しては一寸苦が手であつた。

ある日、僕の宅へ大阪支店の店員で中川某といふのが來た。年の頃は廿四、五才、是非主人に逢ひたいといふ、勿論晝間は店に出勤して居る、母は何にも知らないから、大阪支店の者と信じ、まあお上りなさいと應接間へ通す。お茶よ菓子よと一通りすんで、何の御用ですかと聞いて見る。聊か言ひ出し兼ねる樣な樣子であつたが、店の事など何か話して後、今度東京へ參りましたのは此方に父母が居りまして、父が今病氣で寢て居りますので見舞かた〳〵參つたのです。家は代々木でありますが、一寸此邊に友人がありまして訪ねましたが、つひどこかで暮口を落しまして、家に歸るに困つて居ります。二圓でも一圓でも宜しう御座いますが、一寸旦那樣に拜借いたしたいと存じて伺ひましたとある。歸りまするれば明日でも、又店の方で御目にかゝりまして御返し致しますが…と、極り惡るさうにモジ〳〵して居る。

母は田舍者で、人の言ふことは直ぐ信用する、それはどうも御氣の毒と二圓出して渡してやる、彼は其まゝ一禮して歸つたといふ。

『中川なぞといふ人は存じませんよ』

『でもお前大阪支店の方だとさ』

『私は一向知らん人ですよ』

『でもあしたお店で逢つて返すと言つて居たよ』

『世の中の人が、誰れでも嘘を言はぬと極つて居れば、それでよろしいんですがね…ウフッ！』

ある日玄關で鈴の音がする。中學生の長男が出て見ると、六尺豊かの大男で、羽織袴に太いステッキを突いた、一見壯士風な偉丈夫が立つて居る。

『只今小島先生(七郎氏)の處に伺ふと、先生は御留守といふので困つて居りましたら、お隣りに林先生が御住居と知つて伺ひました。實は一寸圓タクで青山の方へ行きたいので

すが一寸一圓御都合出來ますまいか』…とある。

『只今父は店に行つて居りまして留守ですが』

『御留守でも一圓位何とかなりますまいか』

『僕と女中丈けですから駄目です』

と斷る、やがてムニヤ〳〵、澁々出て行つたといふ。

『お父様は何時あんな男の先生に成つたの？』

と言ふ、是には一寸説明に困る。それにあんな男とは一體どんな男かも判りかねる。—面白い世の中だ。

僕が家具部の主任をして居る時分、横濱の商業學校を出たといふ男で、〇〇五三二郎といふのが、店員となつて入つて來た。初めは普通に働いて居たが、陽氣の加減で少し氣が變になり、どうも仕事の歩みが本當でない。忠告をして休養せしめたり、醫者にもかゝらせて見たが、結局退店する事になつた。

其後二、三年を經て、ヒョツコリ店で逢つた時は、世間の浪に揉まれたと見えて、よれよれの木綿縞に、折り目の判らぬ小倉袴をはいて居る。何をして居るかと聞いて見ると、存在も碌々知られぬ雜誌社に居るといふ。

どうして知つたか、一日僕の家へ訪ねて來た。折柄留守であつたが、上れとも何とも言はぬにずん〳〵上り込み、今度國許へ歸るので、暇乞ひに來たと云ふ。小さなボール箱の菓子折を持つて來た、主人不在で判らぬから貰はぬといふのを、どうしても折角持つて來たものだからといつてきかぬ。丁度晝飯時ではあり——早く歸れば宜いと思ふが、なかなか動かぬ。何時迄も要領を得ぬことを言つて落ち付いて居る。流石呑氣な田舍者の母もホト〳〵持て餘し、茶を出す、菓子を出す、時分時だからとて、近所から壽司を取つて出す大分餓えて居ると見えて、出す物は皆平らげてケロリとして居る、やがて腹が一パイになつた頃、左樣ならと歸つて行つた。

『どうもあれは氣が變だよ』…と母が言ふ。

『こんな物を貰つても困るが、どこに住んで居ると言ひましたね?』

『さあ、どこに居るとも言はなかつたよ』

『住所が判らないでは、返す事も出來ずと、マ……其中には又店へでも來るだらう』…と其まゝ打ち捨てゝ置いた。

十日たつても廿日たつても、五三二郎氏は訪ねても來ない。仕方がないから、前日の菓子折を開いて見る。飯田橋邊のパン屋で買つて來たマシマローといふ菓子だ、近頃の陽氣で少し黴が生えて居る、一寸喰べて見る勇氣が出ない。と云つて、子供にやつて腹でも痛めては困る。勿體ないが裏の塵箱へ。

少々腹もたつ。

二た月程の後である、ヒョツクリ先生店へ訪ねて來た。

『君、國へ歸るといふじやないか?』

『はあ、歸らうと存じましたが、其…う、旅費が少々足りませんので』

『それで今日は何か御用ですか?』

『はあ、誠に相すみませんが、旅費を拜借致したいのです』

『それは御斷りしますよ、僕は金錢の貸借はしたくないんだ』

『それでも過日は御宅へ伺ひまして、エー粗菓を呈して置きました』

『ウムさう〳〵それで大いに閉口した。君に菓子を貰ふ理由もなし、御返し仕様にも君の住所は判らず廿日許り取つて置いたが、とう〳〵黴が生えたのでね、ツイ處分してしまつた。菓子など欲しければ、自分で買ふから、決して君あんな心配してくれては困るよ。それに君、人に物をくれる程の餘裕があれば、金など借りるのは辻妻が合はんね』

『ハア、イヤ』…ムニヤ〳〵〳〵。

名前は五三二郎など丶、二人前も持つて居るが、頭の働きは少々不足して居る。

『仕方がない、菓子の代は上げやう、幾らですか?』

『エー、五十五錢であります』一圓札を一枚渡す。

『お釣がありませんが』

『まあそれは宜しい、左樣なら』

或る年の暮である、朝早く臺所へ魚屋の小僧が、エナメルの亞鉛箱へ、魚肉の味噌漬を入れて持つて來た、之は粗末なものですが、御覽に入れます、日本橋の內海で、主人が宜しくと申しましたとある。

一寸御待ち下さいと、女中が取次いで居る間に、小僧は魚を置いて自轉車でサツサと歸つてしまつた。

偖內海とは聞いた事もなし、こんな物を貰ふなど見當も付かない。今に門違ひで取りに來るだらう、其まゝそつとして置けと命ずる。夕方に家へ歸つて見ると內海といふ人から手紙が來て居る。段々讀んで見ると、內海といふのは元三越の店員食堂の賄方の中の一軒の辨當屋である。先き頃店員食堂の經營が店の自營となつた爲めに、彼等は職業を失つたのである。三越に出て居た間は、河岸の問屋方面にも信用があつて、賴みもせぬのにドシド

シ材料を貸してくれた。然るに今度三越をやめられてから、絶對に貸してはくれないのみならず、今迄の買掛金を嚴しく督促せられる。自宅の商賣は不振になり、融通はきかなくなつて困難して居る、是非此際四千圓計り貸してくれ、現在の家屋を抵當にしても宜いと云ふ。

初めて今朝の魚の意味が判つた。平常内情を知つて居る、庶務のS君に聞いて見ると、餘り信用の置けない奴だといふ。無論斷らなければならんが、魚は貰ひ放しにも出來ないので拾圓の商品券をS君に托して斷つて貰つた。

其歳も愈々押詰つて、あすは元日といふ晩の事であつた。十時過ぎに漸く春の仕度を終へて床につくと、三十分も過ぎた頃、頻りに玄關で呼鈴が鳴る。内海といふ人が來て是非會ひたいといふ。誠に迷惑ではあるが仕方がない應接間へ通して、瓦斯ストーブに火を入れさせて置く。

寢間着をぬぎ換へて、應接間へ來て見ると、椅子を向ふへ押しやつて、板の間に座つて

居る。

椅子へお掛けなさいと云ふが、只ベコ〳〵するばかり、イツかな掛けやうとはせぬ。面倒だから此方はかまはず腰かけて、偖此夜更けに何の用事で來たかと聞いて見る。

成る程魚河岸の人足上りの辨當屋で、改まつた話などは出來ない。訥々と話し出すのを聞いて見ると、室町の山本氏が内海の後ろと横手の二ケ所に地面を持つて居る。内海が家を一方に引て地面を取換へて呉れゝば、山本氏の地面は一ケ所に固まつて廣くなる。一萬圓出すからとて話は纏まり、半金受取つて、今家を引て居るが、此處へ來て金に詰つた、後金の半金は引越してからと云ふ約束でどうにもならない、後金を貰つたら必ず返すから、千圓計り融通してくれと言ふ。

是には拙者も面喰つた、生れて初めてお目に掛る珍事件である。

『君は元三越に出入りして居たかも知れんが、お目にかゝる、いや據なく逢ふのは實に今が初めてだ。君の性質も信用も何にも知らない。然るに初めて面會を强要して、金を貸

せと言ふのは非道いしやないか……世間にそんな事で金を貸す人があるかね？』

『イヤ、全く申譯ありません、エーどうにも切端詰つたんで、面を被つて來たんです』

『面なぞ被つて來なくても宜しい、何せよ今金なぞ有りはせん』

『五百圓でも宜しう御座いますが？』

『斷るよ。此大晦日の眞夜中に、現金なんぞあるものか。今寢る處を起されて風を引きさうだ。兎に角今夜は歸つて呉れ給へ』

と漸くの事で歸つて貰つた。世間には厚顏しい奴があるものだ。

其後、彼は愈々金に詰つて、品川町の顏役某を賴んで、彼の家屋を何萬圓かで三越に買つて貰つた。約束通りの金は受取つたが、約束通りの期日が來ても彼は立退かない。

其中に三百といふ黴菌が彼にたかつて彼と同居し、營業主の名義を變更して、平氣で食堂を經營して居る。中に這入つた顏役が、いくら談判してもビクともせぬ。道義の觀念を失つた奴は實に强い。據ろなく訴訟となつて、摺つた揉んだで何年かを費し、立退料をせ

しめて漸く幕となる。

是から先き、彼の行く末がどうなるのか、見物は一寸氣になる。

僕の机の前に衝立を隔てゝ應接所がある。毎日千差萬別な人が出入りする、大方は錢を貰ひに來るバチルスで、錢食菌とでも命名すべき輩である、慈善を名として切符を賣付けに來る者、無用な出版をして本を高價に買はせんとする者、厭がらせ記事を掲載して、暗に口止料を要求する者、又其記事を止めさせるからと、御爲めごかしに仲裁を買つて出て結局甘い汁を吸はうとする奴、店で買つた品物に何か因緣を付けて、重役の責任ある回答を、などゝ威丈け高になる奴。甚だしきは袂に蠅の死んだのを入れて置いて、食堂で喰ひかけた飯の中に突き込み、サア怪からん、之をどうする、罷り間違へば人命にもかゝはる一大事件である、責任者を出して此解決を付けろ……などゝ喚めき立てる奴。賣場の友禪の模樣の中に、御紋章類似の柄があつた、實に不敬極まるじやないか、三越ともあらうものが何といふ事だ、社會の爲めに容赦はならぬ、是に對して重役達はどう考へて居るか、

責任ある返事を聞かぬ中は、此處一寸も動かぬぞ……などゝ途方もない國士氣取り、雜誌や新聞に廣告を出せの、新たに何々新聞を發刊するから援助しろの、豫て送つてある雜誌の購讀料として應分の御配慮を願ふのと紛々援々五月蠅い事夥だしい。

此五月蠅い應接を引受けて、程よく捌いて居るのが、秘書のM君とK君である。M君はスレンダーな、ヒョロリッとした、假令ば蟷螂の如き格好の人で餘り腕力は無さゝうであるが、口は達者なものだ。教育でも、宗教でも、政治の事でも、財政、經濟、法律、衞生科學、何でも御座れの博識振り、大概なゴロが下手な小理窟なんぞこねて見ても、到底先生には齒が立たない、諄々として說き伏せられ、長講一席拜聽に及んで、ダアーとなつて引下る。

『毎月雜誌を差上げて居りますが、エーどうぞ御援助の意味に於きまして、何分の御配慮願ひたいのですが、廣告料といふ名義でもよろしう御座います』

『はあ！一寸拜見致しました。時節柄思想善導の意味に於て、あゝいふ雜誌を御發刊に

なるのも、誠に時宜に適した事かも知れませんが、私は又一種の別案を持つて居るもので……』

と記事の內容に就いて一々批評を加へ、拙者の意見はかく〳〵と捲し立てる。

御援助御配慮の使命を帶びて來た先生は、雜誌の內容なんぞ心得て居るものでない。既に其認識の點に於て、M君とは格段の相違がある。彼氏は其內容を知らぬとも言へず、押返す程の議論も立たず、遂にヘドモドして閉口する。今や床板を見詰めて二の句を考へて居る時、M君は潮合を見計らつて。

『いや！それでは又よく考慮致して置きます』……サッと計りに引上げる。

彼氏は狼狽して引止めやうと首を上げた時は既にM君のヒョロリッとした姿は、煙の如くに消えて居る。

M君はクリスチャンではないが、青年店員を導いて、YMCAの英語部や、室內運動部の世話をやいて居る。町內の事でも、學校の事でも、交通協會の事務の事でも、何でも相當

の意見を持つて、世話をやく事を辭せぬ。年を取つて隱居でもしたら、さぞやかましい老爺になるであらうと、餘計な事まで心配になる。

K君は小兵で頑丈した、假令ば兜虫みた樣な格好の人だ。餘り口數はきかないが、ニヤニヤしながら急所を掴む。大概なゴロが怒鳴つても、平氣な顏して靜かに物をいふ。嵐の前の靜けさの樣に、一寸無氣味な所がある。

應接室の扉をドタン！と開けて、ダラシない足取りで這入つて來たのは、廿七八のゴロである。頭はモジャ〳〵に前をしどけなく片手は懷ろに突き込んで、酒氣も無いのにフラフラして居る。重役に面會を强要して、此部屋に案內せられた、後から靜かに這入つて來たのは秘書のK君である。

『私は秘書のKですが、今重役が他の客に面會中で、私が代つて御用件を伺ひます』

『ヤア！失敬、實はねえ、去年の十月、小林君に堀留署へ突き出されて、暫く喰ひ込んだお禮にッ……今日は來たんだ』

『はあ、夫れはどうも御叮寧に……御用件はそれ丈けですか』

『オッ、ォ戯談じやないよ、わッ、判つて居るだらう。くどく言はなくつたつて……ねえ、簡單にやつて呉れよ』

『すると何か……そのう……御要求なんですか？』

『あたり前じやねえか、かうして來る以上はね。エッ！オイ』

『それは御斷り致します——面會を强要し金錢を强請する者は、直に電話で浪花一四〇〇番に報告してくれと、警察の方から依賴が來て居りますんでねえ』

『オッ！オイ、そんなら俺を突き出すと云ふんか、ヨシ突き出して貰う、怖かネェや、オイ、やつて見ろい』

『御希望とあれば……』

『其代り覺えて居ろ！只は置かねえぞ』

『フム、そうすると、どうしやうと言ふのです？直接行動にでも出やうと言ふんですか

彼れ是れ面倒な事を云つて居るより、直接行動に出て呉れた方が、僕は扱ひよいんですがね。僕も在學中は柔道の選手で、たまには用ひないと寶の持ち腐れになるのでね』

K君は店の劍道部の世話役で、柔劍兩道共に相當の自信があるらしい。

暫く例のゴロと、何かゴタ〳〵折衝して居たが談判は不調に終り、チリン〳〵と電話を請願にかける。物の二分もたゝぬ中に、請願の某がヌツと顏を出す。

ヤア之はッ……と俄かにゴロは狼狽する。顏は警察で互に見知り越しと見える。

『又來たのか、一緒に別莊へ行かうかな』

『いや、今日は其風向きが惡い。貴郎の顏を立てゝ今日は、まあ、歸るとしやう、失敬した』とアタフタと立上る。

『歸らんでもよろしい、顏なんぞ立てんでもよい、顏を立てるなんて云ふのは無賴漢のいふ事だ、俺なんぞ職務でやるのだ、遠慮せずに一緒に來い』

『いや、實はたつた今、日比谷署から出て來たばかりで、腹はへるし錢はなし、少しば

かり貰ひに來たんだ、然し何だ、今日は風向きが惡いから……何れ又來る』

K君はニタツと笑つて、

『もう來ないでもよろしい、それに君、さつきは何と言つた、只は置かんと云つたね』

『いや、前言を潔く取消して今日は歸る、失敬……』

とヒヨロ〳〵出て行く。

暫くすると、キーツと靜かに扉が開いて洋裝婦人が這入つて來た。あとからK君が這入つて來て、例の通り

『私は祕書のKです。只今幾度が多忙で、私が代つて御用を伺ひます』

『アーラ貴郎Kさんと仰しやるんですか、私は大阪に居りました時分から、幾度さんには度々御目にかゝりましてね、私紐育から歸つて參りますと、直に日本の婦人の爲めに、社會事業に盡したいと存じまして、此の方の仕事を致して居りますのよ、それで何でも手の空いて居る婦人に、適當な職業を與へまして、何でもビジネスライクに導いて參りませんと

ね、日本の婦人は一般にさういふ處に缺點が御座いますのよ、兎に角何事業を興しますにも、基金を要するものですから、今度此の興業の利益を其方に充てる爲なんですのよ、實は此切符を……松屋の内藤さんにも四十枚願つて參りましたし、白木屋の山田さんにも五十枚願つたんです、是非幾度さんにも是丈け御取り置き願ひたいの、宜しいでしやう』と捲くしたてる。

『時節柄かういふ種類のものは、一切御斷り致して居りますんですが、一体此袋に何枚あるのですか』

『さあ何枚になつて居りませうか、あとから集金の者がお金は戴きに參りますから』

『フフフ……餘り、ビジネスライクでもありませんな、それに何だつて此樣な事業にレツスリングなんてやるんです？』

『さあ、其方は外のコンミテーがやるので私は關係ないのよ』

『兎に角重役が何と申しますか、十枚丈け御預り申して置きますから、後は御持歸りを願ひます』

『アラ……タツタ十枚ですか、幾度さんみたいなお偉い方が、それじや恥かしいわ、私がお願ひしたつてさう言つて頂戴よ』

と小皺の間へ白粉を叩き込んだ、アイアムビューティフル面に秋波を送る。

K君、聊かぞつとしたらしい。

此應接の扉、朝にグロを迎へ、夕べにエロを送る、近所に居る僕は氣が散つて仕事が手につかない。

三　六　會

十八日に開くから三六會といふ。格別是ぞといふ目的はない。よく言へば、取引先の旦那方が、社交とやらの爲め、惡く言へば、不良老年が集つて、皺でも延して、隱し藝の棚卸しでもして、一夕愉快に飲むといふ位なものである。それに會員中の常任幹事の、の一

さんが〇〇亭の女將を、後援するといふ意味もある。

三月目に一回位、此料亭で會合しやうといふ事になつて居る。

僕と飯野君にも、雜魚のトト交りといふ意味に於て、是非會員になれといふ。然るに我々兩人共に天下の藝なし猿であり、四疊半裡に美妓を擁して、淺酌低唱を樂しむ体の粹な代物でない。

けれども世の中には附合といふ變なものがあるといふ樣な……ウム……ムニヤ〳〵……會員の末席を汚すべく、餘儀なくせらるゝの光榮を有せしめらるるに立至つたわけである

エヘン！そこで集まる處の面々はと申すと、聊か憚りもあるので內證で申上げる。中橋のターさん、櫻川のKさん我が英國のS君、ヒッポのY君、海岸のヒーさん、十十五のTさん野放しのコーさん、小唄のカーさん、戻り橋のミーさん、曰く何、曰く何と十二三人の不良が、飲んで唱つて踊つて騷ぐ。狂蜂痴蝶落花狼藉、いや早や家內や子供には見せられた有樣でない。太棹の連れびきにミーさんの庄太夫が、尻の下に枕を當てがつて本式に延び

上り、『和歌の浦には名所が御座る、一に檀現二に玉津島』とやり出す。御本人は一寸黑ツポイ聲を張り上げて、此處一生懸命である。

紅葉狩りやら戻り橋と、長演數番流石にお安からぬ月謝を大分納めたらしい、惜しいことには大向ふがトンと不熱心である。どうも近頃の若い奴は話せぬと仰せある。

お年の割合に御元氣で、而もおぐしが不思義に黑い。

實盛とさとられまいぞ戻り橋

兎も角もまづ一段と座に直り

相の手が結構ですと大向ふ

まあそちらは〳〵當方は……と……雛妓を相手に、十！十五ダー皆ッ！といやがる酒を無理に飲ませて喜ぶTさん。

十十五さゝの間をタニ渡り

向ふの隅ではの！さんが、友禪を引き付けて長唄のおさらひ、三味に乘らうがのるまい

が、お前そち行け私しやこちがすき、と果ては友禪を膝の上にだき上げる、忽ちキャツと黄色い聲が上る。是で還歴は一昨年御すましとある、いや御元氣な事で……。

トンと來て本卦は家へ置き忘れ
友禪を膝にノセたり下したり

一方では婆族の爪びきに連れて、乙に口を曲げながら、特別他所行きの細い聲を、太とい胴中の眞中から絞り出して粋な小唄が初まる。一寸色ツボイわねえと油をかけられて、カーさん大得意。

納まらぬ小唄の咽喉をもて餘し

忽ち急霰の如き拍手が起ると見ると、正座に直された櫻川のKさん、手拭を鷲づかみにして一寸そり身の音羽屋氣取り、『生れは遠州濱松ぜー、十四の時から親に別れ…』と親から貰はない様な聲を出す。それから上は源冶店より下は山寺の和尚サンに至る迄、盛り澤山のケンチン汁、惣幕出揃ひで漸く納まりが付く。

親不孝の聲ドシコまん革袋

床の間の隅、二三のSに取まかれ、何か開陳しやうとして居るのは野放しのコーさんである。自慢の○○を兩○に挾んで……、陽氣の發する處一條の怪煙立ち登る、いざ鎌倉となれば天馬空に駈らんず有様、蒼龍雲を呼ばんとして穴に巣ごもり、風雨將に至らんとして臭氣樓に滿つ、……忽ちキャツ！、ゲラ〳〵クス〳〵と黄色い赤い灰色の聲とり〴〵おいくつです？と伺ひを立てれば、いや未だ昨年御ヂイチャンに成つたばかりと仰有る。

爪磨いで巣こもりねらへ女猫
野放しの駻馬田毎を踏み荒し

チリン〳〵、コーさんお電話、御馳走さまよ。

何？フム〳〵、エー〳〵、ハア、アイヨ。

さる程に田毎の月は雲かくれ

乙な三味線の音色につれて、粋な小唄の今度は本とうに、黒ツボイ咽喉がきこえる。

忽ち屏風のかげから、冠つた手拭の端をくはえて、現はれ出たるは此家の女將である、昔とつた左褄は、流石に冴えた手振りや、阿娜つぽい身ぶりに滿場の視線を集める。

世辭で丸めて踊りでこねて、と言ふサービスぶり。

サービスに一寸友禪も出して見せ

中橋のターさんもさる者、何をどこで喰べた罪か、向ふ鉢卷別誂らへの德利を取り寄せてのお茶か盛り、三味引きよせてお馴染の、粹な年增に寄りかゝり、爪びきの清元。仕ぐさも聲も色つぽい、天下の色男は拙でげす。

我が聲にほるゝ清元さゝきげん

なりはひの糸も三筋のもつれ哉

定めし今頃はS君も、久しぶりに、我が英國はロンドンのピカデリー邊で、スコツチウイスキーの滿を引いて、オールドアツクエンタンスの彼女と、英語のさゞめごとでもやつて居る事であらう。

ピカ更けてハローと旅のさゞめごと

一としきり賑かな老妓の糸に連れて、ドスンドスンと浮かれ出したのは、ヒツポのY君である。

ヒツポポタミス宜しくといふ偉大なる胴中を、輕るゝ〳〵と振りながら踊り出す。やがて小さな手巾をポケツトから拔き出して、クルリとうしろ向き、左右の指に端をつまんで振りながら、『僕は電車の旗振りだ』と右のアンヨを一寸と上げる。其アンヨなる物が十二文甲高と來て居る。待合の沓脫ぎに、黑い鞄が二ツ並んで居る、高利貸でも來て居るかと聞いて見ると、是はY君の靴だとある。

多藝なY君は踊り疲れると、座蒲團に餘る偉大なる尻を正座に据ゑて、象の如き眼を細くし、澁味のある濁音を張つて、エロ講談を一とクサリ。

『頃は何日なんめりや、テレツク××の御時、茶臼山の御陣には緋縮緬の幔幕を絞り上げ現はれ出でたる〇〇野少將永〇。今宵一八の初陣によき大將と引つ組で、功名せんと思

ひ立ち、寄せ手の陣を流し目に打見やり、○○にさけたる○○をカツパと○○いて、寄れや○まんと見がまへたり。

此時寄せ手の陣中より、現はれ出でたる古強者、青○緘茶革の鎧を一着なし、○なりの禿頭を前後に振り立て、巾着栗毛の逸物に打ちまたがり大空望んで突立ち上り、

ヤア〳〵遠からん者は鼻にも○げ、近くば寄つて○めても見よ、我こそは昌くも貴き御方の寵を一身に集め、此鎗先きに天下をば奪はんと企らみたる、湯氣の入道○高なり、我打取つて功名せよと呼ばはりつゝ大身の錆鎗押つ捻つて、只一と突きと繰り出せば……。

やさしき敵の振舞かな。麒麟も老ゆれば駄馬同然。老ぼれ何程の事やあらん、いで其○大根一と○みと立ち向ひ、上を下へと返しける。

鎗を合する事數百合、何れを勝ちと白魔弓、○くかと見えし少將が、素早く弓手を突き入れて、○○取つて無態に○○せ、無二無三にこそ○○みける。流石に猛き入道も、思はね秘術に惱まされ、既に危く見えけるが獅子奮迅の勇を鼓し。○まれし錆鎗手許に繰り引

き、太息ついてぞ居たりける。

去る程に少將は、今宵初陣の若武者なれば、戰場の掛け引き思ふに任せず、黄昏よりの一騎がけ、火水となつて戰ひしが、早や是迄と差し違へ、暫しが程は○もなく、○○のみぞ荒かりける。

折柄○○千姫は、鹿の子絞りの小袖を一着なし、濃き紅の染模様、打かけ伊達に着流して、吉田御殿の樓閣より此有様を打ち眺め、言

言ひ甲斐なき身方の人々かな、後日の手本に是れ見よと、打ちかけ小袖振り捨て、六枚○○三ツ○○、一ツ投げたる長○、見目よき若衆引捕らへ、足はキリリと藤の花、兩手は確かり○き茗荷、口は○○玉椿、○んづ○れつ○み合ひしが、何條千姫に及ぶべき、忽ち手練の早技に、早くも兜脱ぎすてゝ、情けの露と消えければ、椎茸髷に下知をなし、骸ら取つて古井戸に投げ込み、スツクと立たる有様は、毒を含みし紅茸の雨に濡れたる風情なり

恐れて逃ぐる若武者の、前髪とつて難なく組み伏せ、喰へつ振りつ扱ごき上げ、半狂亂

の有様に軈てあえなく鳴る神の、一天俄かにかき曇り、顯はれ出たる亡靈は、半面黑く燒け爛れ、鼻の障子も有らばこそ、恨めしの形相物凄く、把りしめたる太身の〇、是を喰らへと突き出し、阪崎出羽の守之にあり。千姫來れと呼ばはれば、人形喰ひに名を得たる、千姫なれど强敵に、恐れをなして敗軍なす。

かくては果てじと切られのお富、口に手を當てほゝと笑み、

問はれて何の某と、名のるもすこし烏滸なれど、今を去る事十八年、夜も長月の月待ちに、鬼若丸と相生の、松と松との若綠、未だ肩揚の濡れ事に、味な首尾から病み付いて、藏の二階に久松を、主の威光と浮き心、色と情けの二た道から、否やと云はせず〇〇いて大阪中に浮き名を立て、桂川では長はんを、切られの與三は木更津で、命かけての濡れ仕事……。』

クヤ！〳〵夜が更けるではないか、アーン。

續予を續る人々

終り

昭和七年七月十五日　印刷
昭和七年七月二十日　發行

（續予を續る人々奥付）

定價　壹　圓

著者　林　幸平　東京市神田區皆川町十二番地
發行者　小松　徹三　東京大森馬込一〇一四番地
印刷人　渡邊　八郎　東京大森馬込一〇一四番地
印刷所　石英社

版權所有

發行所　東京市神田區皆川町十二番地
百貨店商報社
電話神田一八三四番
振替口座東京三四六二六番

終